

那珂川水系河川整備基本方針

那珂川水系の流域及び河川の概要（案）

令和 年 月

国土交通省 水管理・国土保全局

目 次

1. 流域の自然状況.....	1
1.1 河川・流域の概要	1
1.2 地形	2
1.3 地質	3
1.4 気候・気象	4
2. 流域及び河川の自然環境.....	5
2.1 流域の自然環境	5
2.2 河川及び周辺の自然環境	7
2.3 特徴的な河川景観や文化財等	22
2.4 自然公園の指定状況	32
3. 流域の社会状況.....	37
3.1 土地利用	37
3.2 人口	38
3.3 産業経済	39
3.4 交通	40
4. 水害と治水事業の沿革.....	41
4.1 既往洪水の概要	41
4.2 治水事業の沿革	50
5. 水利用の現況.....	58
5.1 水利用の現況	58
5.2 渇水被害の概要	61
5.3 水需要の動向	63
6. 河川の流況と水質.....	64
6.1 河川流況	64
6.2 河川水質	66
7. 河川空間の利用状況.....	67
8. 河道特性.....	69
9. 河川管理の現状.....	75
9.1 河川区域	76
9.2 河川管理施設等	76
9.3 水防体制	78
9.4 危機管理に対する取組	80
9.5 流域治水への取り組み	85
10. 地域との連携.....	86

1. 流域の自然状況

1.1 河川・流域の概要

那珂川は、その源を福島県と栃木県の境界に位置する那須岳（標高1,917m）に発し、栃木県内の那須野ヶ原を南東から南に流れ、余笠川、篠川、武茂川、荒川等を合わせて八溝山地を東流した後、逆川を合わせて茨城県に入り、平地部で南東に流れを変え緒川、藤井川、桜川を、河口部で涸沼川を合わせて太平洋に注ぐ、幹川流路延長150km、流域面積3,270km²の一級河川である。

その流域は、栃木県・茨城県・福島県3県の13市8町1村からなり、流域の土地利用は、山林等が約62%、水田や畑地等の農地が約27%、宅地等の市街地が約11%となっている。流域内人口は約90万人であり、市街地が発達する下流部に人口が多い。

下流部には茨城県水戸市があり、茨城県央地域における社会・経済・文化の基盤を成すとともに、流域内には日光国立公園と8つの県立自然公園が指定される等、豊かな自然環境に恵まれているとともに、様々な水利用が行われており、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。



表 1-1 那珂川水系の概要

項目	諸元	備考
幹川流路延長	150km	全国1級河川109水系中20位
流域面積	3,270km ²	全国1級河川109水系中18位
流域市町村	13市8町1村	<ul style="list-style-type: none">・福島県：白河市、西郷村・栃木県：那須塩原市、那須町、日光市 塩谷町、矢板市、大田原市、那珂川町 さくら市、那須烏山市、茂木町、市貝町・茨城県：常陸大宮市、城里町、笠間市、那珂市、 水戸市、ひたちなか市、大洗町、茨城町、 鉾田市
支川数	196	

(出典：河川現況調査 平成27年度（2015年度）基準)

図 1-1 那珂川水系流域図

1.2 地形

きつれがわ

那珂川流域は、北方の那須岳、白河丘陵、東方の八溝山地、南方の喜連川丘陵に囲まれた広大な那須の扇状地が上流部に広がり、中流部の県境付近は八溝山地が南北に連なり狭窄部となっており沿川に低地が点在する。下流部では那珂台地と東茨城台地など広大な洪積台地が形成されている。那珂川流域は山地 62.5%、平地 37.5%に区分される。

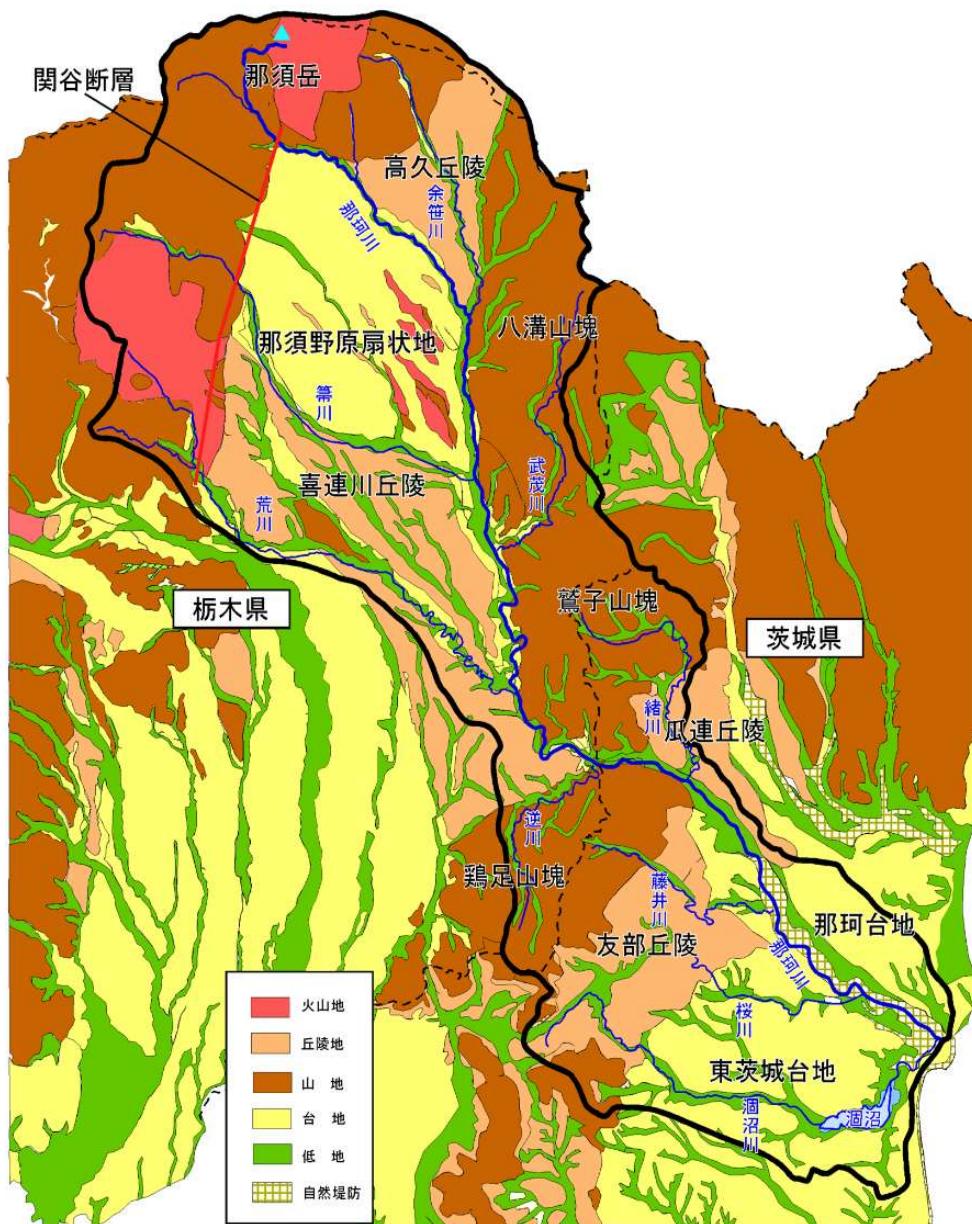


図 1-2 那珂川流域地形分類図

(出典：国土府土地局国土調査課土地分類図（08 茨城県・09 栃木県）を基に作成)

1.3 地質

那珂川流域の地質は、那須岳周辺は第四紀の火山性堆積物が広く分布し、中流部は八溝山、鷲子山、鶴足山と続く八溝山地に古生代の堆積岩（砂岩、粘板岩）が分布している。下流部の台地上には関東ローム層が厚く堆積している。

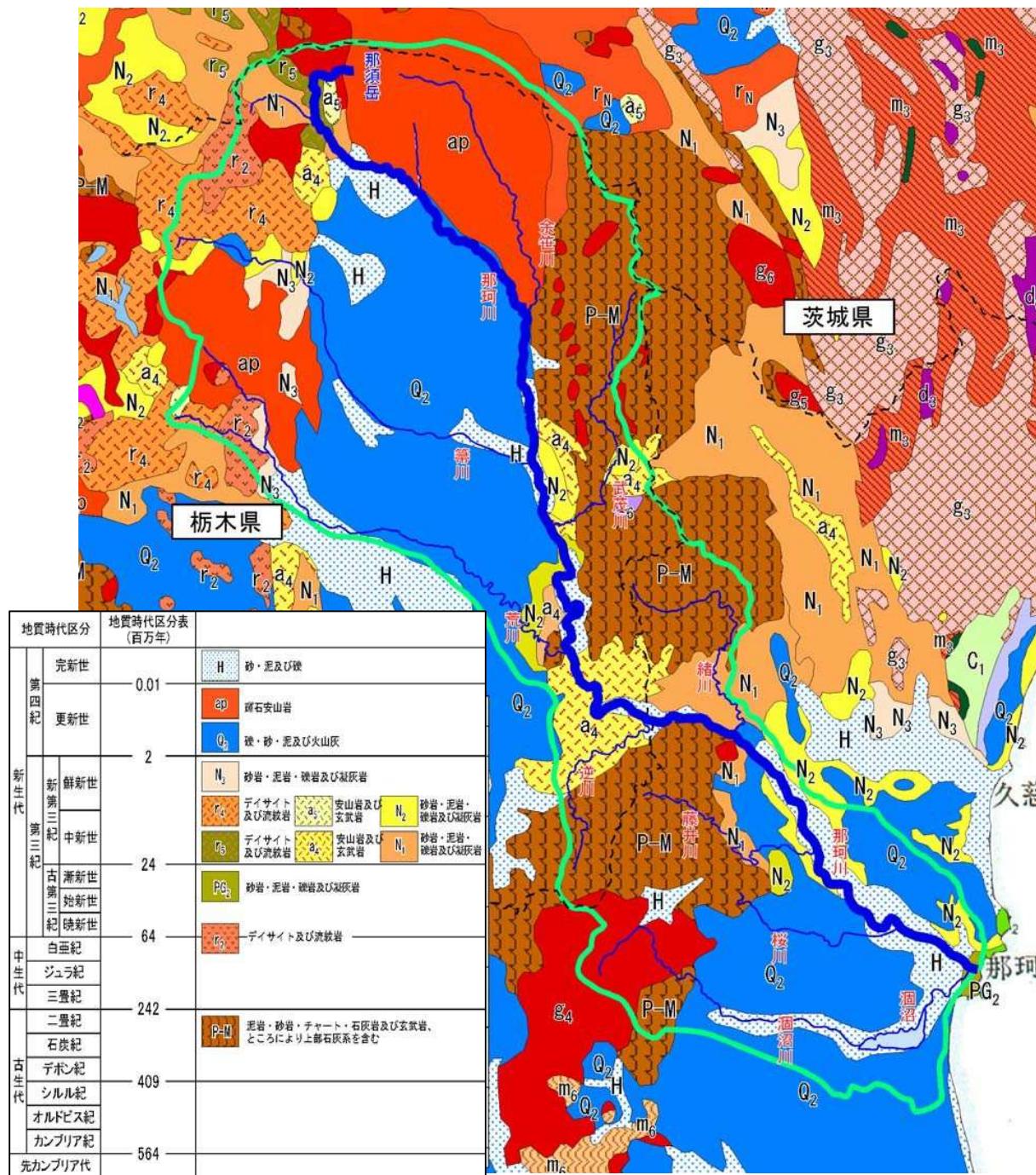


図 1-3 那珂川流域の表層地質図

(日本地質図大系 関東地方を基に作成)

1.4 気候・気象

那珂川流域は、冬は乾燥していて晴天の日が多く年間を通して降水量も少ない太平洋岸気候区に属している。一部を除いて比較的温暖で、また平均年間降水量については、水戸で約1,400mm、那須高原で約2,000mmとなっている。

流域内の各地域の気候を見ると、那須岳周辺の源流部は、天候が変わりやすく、夏期の降水量が多く、冬期の寒さが厳しい山岳気候特有の気候を示す。「那須下ろし」と呼ばれる冬から春にかけての季節風（からつ風）が強く吹き付ける那須野ヶ原扇状地の地域や八溝山地（八溝山塊、鷲子山塊、鶴足山塊）が南北に走る中流部は、夏期と冬期の寒暖の差が大きく、降水量も少ない。水戸周辺や海岸沿いの下流部は、海流の影響を受け、他の地域と比べて比較的温和である。那珂川流域の気候諸量について表1-2、図1-4に示す。

表 1-2 那珂川流域の月別平均気温・平均降水量
(昭和 53 年 (1978 年) ~ 令和 6 年 (2024 年) の 47 ヶ年平均)

平均気温	観測所	(°C)											
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
	水戸	3.1	3.9	7.2	12.3	16.9	20.3	24.0	25.6	22.0	16.3	10.7	5.5
	那須烏山	1.5	2.5	6.1	11.5	16.3	19.9	23.5	24.8	21.0	15.1	9.1	3.8
	大田原	1.6	2.4	5.8	11.3	16.4	19.9	23.3	24.5	20.7	14.9	9.1	3.9
	那須高原	-1.7	-1.4	2.0	7.9	12.8	16.4	20.1	21.1	17.3	11.7	6.4	1.2
													9.5

(出典：気象庁 気象統計情報HPを元に作成)

(mm)

平均降水量	観測所	計											
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
	水戸	47.6	58.2	106.8	119.5	140.9	142.9	140.1	129.9	177.6	172.1	79.5	44.3
	那須烏山	33.3	42.7	92.6	112.2	133.3	151.9	173.0	162.7	198.3	144.8	71.6	36.7
	大田原	29.7	39.2	87.1	109.6	136.8	169.9	213.9	227.3	203.9	146.2	69.2	34.1
	那須高原	49.1	48.9	100.1	140.2	172.6	215.8	278.3	301.1	291.8	187.1	92.6	55.4
													1359.4
													1353.1
													1466.9
													1933.1

(出典：気象庁 気象統計情報HPを元に作成)

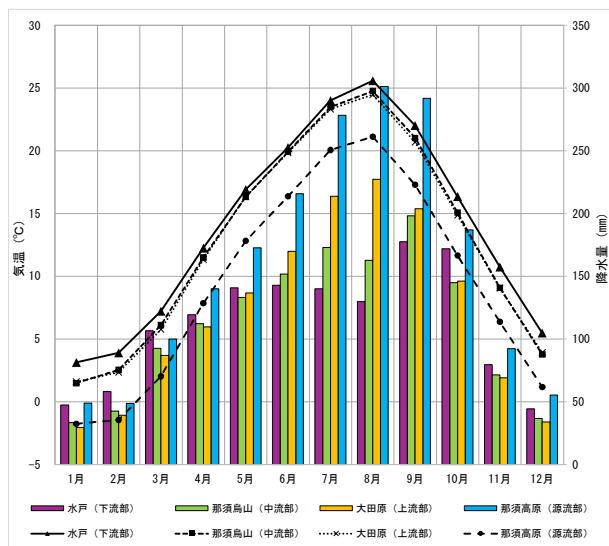


図 1-4 那珂川流域の月別平均気温・平均降水量
(昭和 53 年 (1978 年) ~ 令和 6 年 (2024 年) の 47 ヶ年平均)

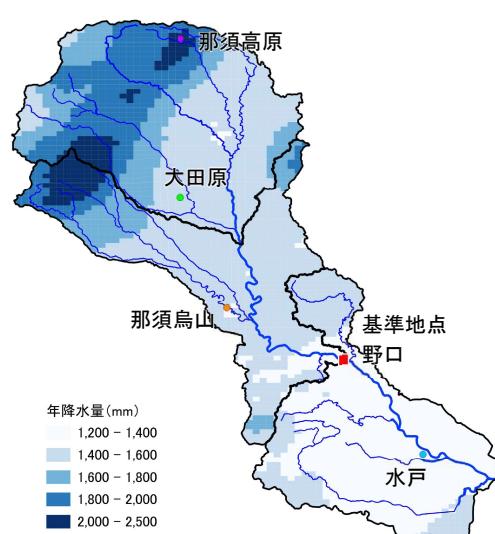


図 1-5 那珂川流域の年平均降水量線図
(出典：気象庁 HP)

2. 流域及び河川の自然環境

2.1 流域の自然環境

那珂川はその源を那須火山帯に属する那須岳とする。那須岳周辺は日光国立公園に指定され、ニッコウキスゲ等の高山植物やクロサンショウウオがみられる沼原湿原を有し、山麓にはミズナラやブナの天然林が分布している。

上流部の那珂川と簾川に挟まれた一帯は那須野ヶ原と呼ばれ、大規模な複合扇状地が形成されており、扇状地中央付近までは地下水面が深く、河川は流れる水が伏流し、水無川となる。扇状地の下流域では、多くの湧水地が見られ、良好な水質に生息する天然記念物のミヤコタナゴやイトヨ等がみられるなど、特徴的な水域の生態系を育んでいる。

中流部の八溝山地が南北に連なり、那珂川が八溝山地の西麓を流れる区間には谷底平野の河岸段丘が発達し、周囲は水田の多い地域となっている。さらに下流の崖地に挟まれ、狭窄した山間部は、那珂川周辺が八溝、那珂川、御前山県立自然光公園に指定されており、那珂川の砂礫河原と斜面林からなる多様な環境が形成され、ヤマセミやカワラニガナ、カワラバッタ、イカルチドリなどの多様な動植物がみられる。また、連続した瀬・淵は、全国でも有数のアユの生息場となっている。

下流域は那珂台地と東茨城台地など広大な洪積台地が形成され、高水敷にヨシ・オギ群落が分布し、ウグイ等の淡水魚の他、ボラやマハゼ等の汽水性魚類が多く生息する。また、冬季にはカモ類が飛来する。涸沼川には、水産資源となるヤマトシジミが生息・繁殖し、涸沼のヨシ原にはヒヌマイトンボが生息・繁殖している。

那珂川は地形条件により大きく6つに分けることができる。まず、活火山である那須岳から那須野ヶ原扇地上流端までの「源流区間」、その下流の簾川が合流するまでの「那須野ヶ原扇地区間」、八溝山地に沿って南下する「山間区間」と八溝山地を横断し両岸が崖地となっている「狭窄区間」、その下流、瓜連丘陵や友部丘陵等の台地や丘陵地の間の河岸段丘を形成している「台地・丘陵地区間」及び最下流の自然堤防が発達する「自然堤防区間」である。

那珂川の河床勾配は、下流部では1/7,000～1/4,000と緩勾配であるが、中流部では1/700から1/300、上流部では1/300から1/10と急勾配である。

那珂川を地形と水域の観点から上流部、中流部（中上流部、中中流部、中下流部）、下流部（下流部（淡水域）、下流部（汽水域）、支川涸沼川）に分け、各区間の河川及びその周辺の自然環境について示す。

- ◆ 上流部：源流区間、那須野ヶ原扇地区間
- ◆ 中流部：中上流部（丘陵区間）、中中流部（渓谷区間）、中下流部（沖積低地・谷底平野区間）
- ◆ 下流部：淡水域（自然堤防区間）、汽水域（自然堤防区間）、支川（涸沼川）

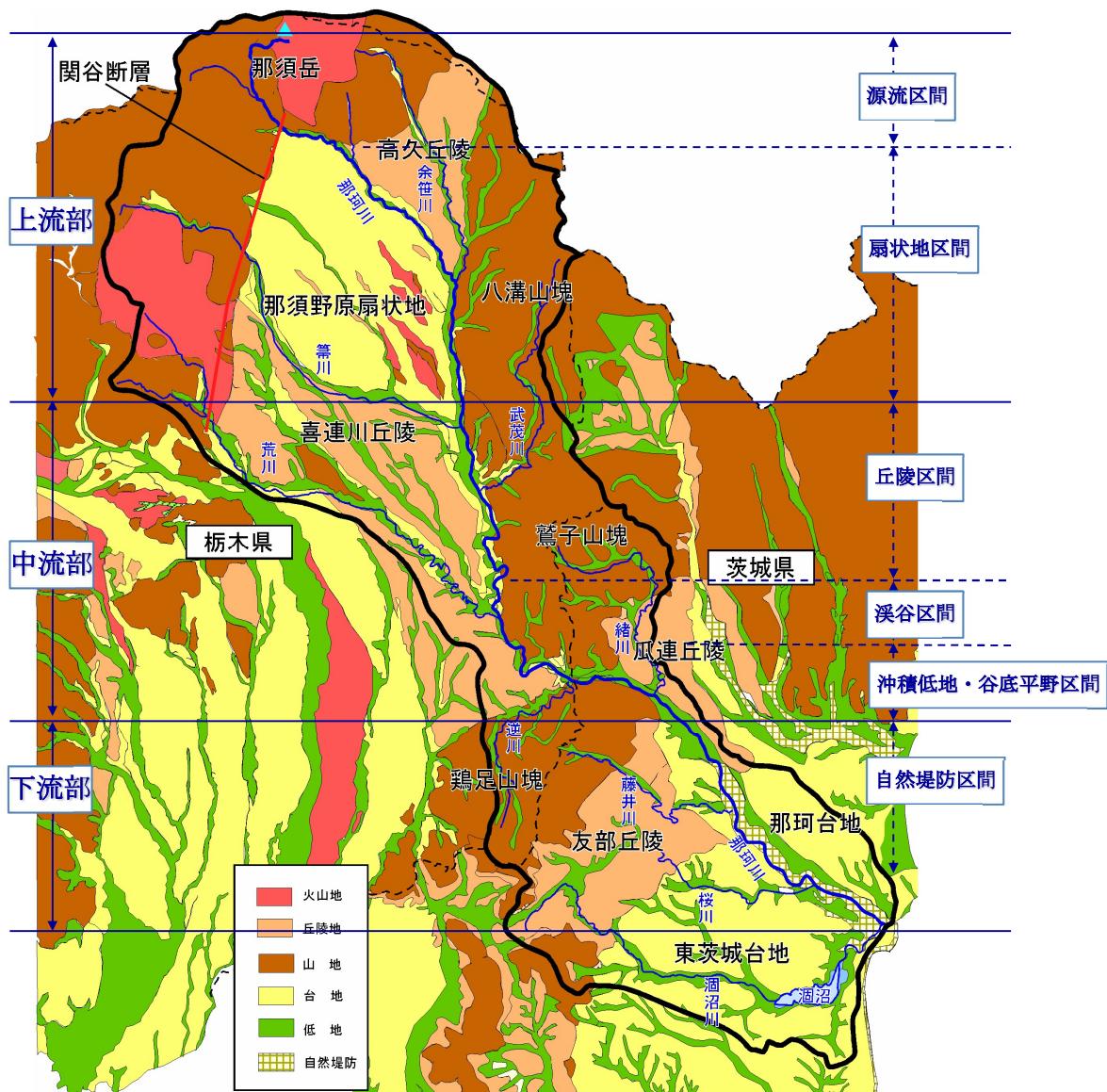
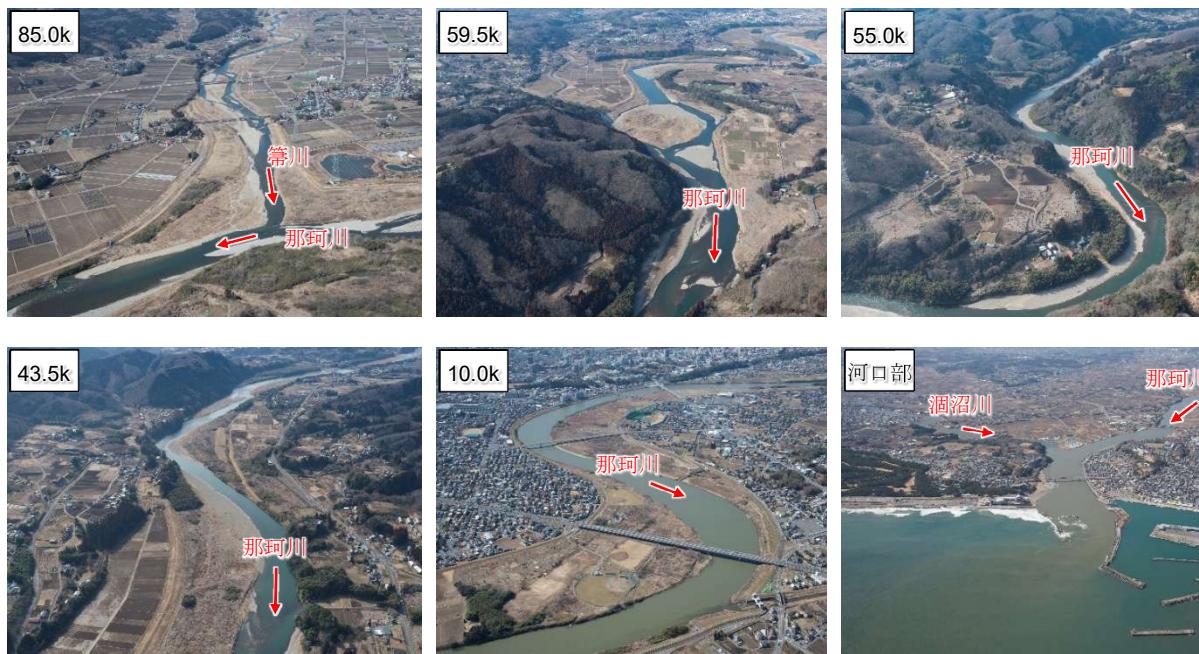


図 2-1 那珂川流域地形分類図

(出典：国土庁 土地分類図（08 茨城県・09 栃木県）を基に作成)

2.2 河川及び周辺の自然環境

(1) 上流部（源流区間、那須野ヶ原扇状地区間）

那珂川の上流部の那須火山帯は、日光国立公園に指定されており、落葉広葉樹林であるブナ・ミズナラが広がるとともに、巨石で構成される急勾配の渓谷が形成され、その下流側の扇状地では、砂州が発達し、瀬淵や礫河原が形成している。

連続する瀬・淵には、ニッコウイワナやヤマメ、アユ（魚類）が生息・繁殖している。また、水生植物群落にはタガメ（昆虫類）が生息し、自然裸地にはイカルチドリが生息・繁殖している。堤内地には、湧水地群が形成され、天然記念物イトヨ、ミヤコタナゴ（魚類）が生息・繁殖している。



新緑のブナ林



ミヤコタナゴ（コイ科）
丘陵地や扇状地周辺の湧水を起源とする水田地帯を流下する細流に生息する。かつては多く生息していたが、現在では絶滅の危機に瀕している。国指定天然記念物で、流域には生息地保護区がある。

（写真：大田原市 WEB）



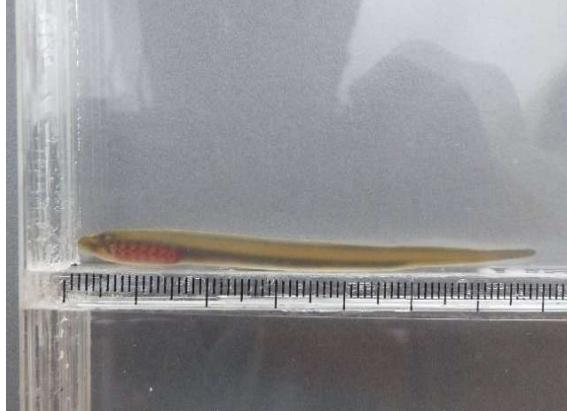
イトヨ（トゲウオ科）
丘流れのゆるやかな泥土質の場所及び水性植物の根茎部に、ちくわ型の巣をつくる。産卵が終わると巣の片方に蓋をして雄は外敵を監視し、背の鋭い3本の鋭いトゲを立て、巣の周りを警戒する。那珂川流域に生息するイトヨは陸封型で、大田原市の生息地は、市の天然記念物に指定されている。

（写真：大田原市 WEB）

(2) 中上流部（丘陵区間）

堤内地は田畠が広がる丘陵区間となり、砂州が発達し、瀬・淵、ワンド、礫河原が形成される。

連続する瀬・淵はアユやサケ、カジカが、ワンド・たまりにはヒガシシマドジョウ、スナヤツメ類やタガメ、自然裸地にはイカルチドリ、斜面林にはヤマセミが生息・繁殖している。

	
<p>カジカ（カジカ科） 河川の上・中流域の礫底に生息し、一生を河川で過ごす。繁殖期は2~6月で、浮石の下に卵を産み付け、雄が卵塊を保護する。主に水生昆虫類を捕食する。日本固有種で、本州のほぼ全域に生息する。</p>	<p>スナヤツメ（ヤツメウナギ科） 一生を淡水域で過ごし、主に河川中流部の流れの緩やかな湧水のある冷水環境に生息する。泥中の有機物を食べて成長する。終生を通じて、ウナギ形の体系であり、幼生期（アンモシーテス）から変態後は摂餌を行わない。</p>

(3) 中中流部（渓谷区間）

山地が隣接し、大きな蛇行がみられる狭隘な区間である。河川が大きく蛇行し、良好な瀬・淵、礫河原が存在する。山地が隣接することで、斜面林が発達している。

連続する瀬・淵はアユやサケ、カジカが生息・繁殖しており、自然裸地にはイカルチドリやカワラバッタ、カワラハハコが、斜面林にはヤマセミが生息・生育・繁殖している。



ヤマセミ（カワセミ科）

河川の中流から上流部に周年生息し、土の崖に穴を掘って営巣する。全長 38cm。嘴は鋭く、頭部・背・翼の上面は白色と黒色の細かい模様。頭部の羽が長く冠羽のように見える。

カワラハハコ（キク科）

河原の砂地に生育する多年草。茎は中部でもよく分枝し、高さは 30~50cm となり、白色の細毛が多い。葉は長さ 3~6cm、幅 1.5mm ほどの線形で、両面に白毛があり、とくに下面に多い。夏に茎の上部に花序を出し、多数の白色の頭花をつける。

(4) 中下流部（沖積低地・谷底平野区間）

砂州が出現し、瀬が形成される区間である。交互砂州が形成し、良好な瀬・淵、ワンド、礫河原、低・中茎草地や湿地のある氾濫原環境が存在するが、河道内の樹林化が進む。

連続する瀬・淵には回遊性のアユやサケ、ワンド・たまりにはヒガシシマドジョウが生息・繁殖し、自然裸地にはイカルチドリやカワラバッタ、カワラハハコが生息・生育・繁殖し、河畔林にはコゴメヤナギが生育している。

	
<p>イカルチドリ（チドリ科） 開けた河川敷の砂礫地や中州などに生息し、 営巣する。水生昆虫やミミズなどの小動物を 採食する。冬は数羽～十数羽の小群で川原や 浅い水辺等に生息する。</p>	<p>ヒガシシマドジョウ（ドジョウ科） 河川中流から下流域の砂底もしくは砂礫底に 生息する。繁殖期は5～6月で、川に流れ込む 細流などで産卵が行われる。</p>

(5) 下流部（淡水域）

感潮域の淡水域区間である。二極化により、水際が単調化している。令和元年（2019年）出水後の築堤、樹木伐採等により、オギ群落、ヨシ群落が減少し、一年生草本群落が増加している。

自然裸地、水生植物、ワンド・たまりなどの多様な環境が存在する。水生植物帶のヨシ原にはオオヨシキリ、湿地にはタコノアシ、ワンド・たまりにはミナミメダカが生息・生育・繁殖し、汽水性のボラやマハゼ等も見られる。

	
<p>タコノアシ（タコノアシ科） 水田や河原などの水位変動する湿地に生育する。多年草で、茎は直立し高さ 30~80cm になり普通は無毛で淡紅色を帯びる。夏に茎の先に数本の総状花序を伸ばし、黄白色の小花を多数つける。和名は花序の枝がタコの足に、小花が吸盤に見えることによる。</p>	<p>ミナミメダカ（メダカ科） 平野部の河川、池沼、水田、農業用水路などの流れの緩やかで、水生植物が豊かな環境に生息する。浅い水域を好み表層を群泳する。繁殖期は4~8月である。</p>

(6) 下流部（汽水域）

汽水環境の区間であるが、水際は直線的で、令和元年（2019年）出水後の築堤等や経年の竹林面積拡大によりヨシ原が減少している。一部区間では、汽水域に特徴的なヨシ原や干潟が形成されている。

ヨシ原ではその環境を代表するオオヨシキリが生息・繁殖し、干潟にはヤマトシジミやアリアケモドキ等の底生動物が多く生息・繁殖している。また、河口砂州には、海浜性の砂丘に生育するハマナスが生育している。

	
<p>オオヨシキリ（ヒタキ科） 全国で繁殖する夏鳥であり、河川や湖沼のヨシ原などに生息する。一夫多妻性で、同時期ではないが、オスの周辺にメスが巣をつくり、抱卵、育雛する。巣は数本のヨシを束ねたお椀型である。</p>	<p>ハマナス（バラ科） 海岸地帯に生育する落葉低木で、枝に細かなとげが多い。葉は羽状複葉で7~9小葉で、花は紫紅色、果実は多肉で黄赤色である。</p>

(7) 那珂川水系における重要種

河川水辺の国勢調査において、那珂川水系で確認された重要種は、魚類 32、底生動物 54 種、植物 47 種、鳥類 43 種、哺乳類 8 種、爬虫類 9 種、両生類 7 種、陸上昆虫類 96 種が確認されている。

表 2-1 重要種の選定基準

略称	資料	分類	選定内容	
文化財	文化財保護法	天然記念物	文部科学大臣によって指定された重要な記念物（動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む）、植物（自生地を含む）及び地質鉱物（特異な現象の生じている土地を含む）で我が国にとって学術上価値の高いもの）なお、県や市町村の条例により指定される天然記念物も同様の扱いとする。	
種の保存	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）	国内希少野生動植物種	本邦における生息・生育状況が人為の影響により存続に支障を来たす事情が生じている種で以下のいずれかに該当するもの（亜種又は変種がある種は、その亜種又は変種とする） ・個体数が著しく少ないか、又は著しく減少しつつある種 ・全国の分布域の相当部分で生息地等が消滅しつつある種 ・分布域が限定されており、かつ、生息地等の生息・生育環境の悪化又は生息地等における過度の捕獲若しくは採取により、その存続に支障を来たす事情がある種	
		国際希少野生動植物種	国際的に協力して種の保存を図ることとされている絶滅のおそれのある野生動植物の種（国内希少野生動植物種を除く。）であって、政令で定めるもの	
環境省 RL	環境省レッドリスト（2020年）	絶滅（EX）	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種	
		野生絶滅（EW）	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ存続している種	
		絶滅危惧 I 類（CR+EN）	絶滅の危機に瀕している種	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種 IA 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
		絶滅危惧 II 類（VU）	絶滅の危険が増大している種	
		準絶滅危惧（NT）	現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種	
		情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足している種	
		絶滅のおそれのある地域個体群（LP）	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高い種	
環境省海 洋 RL	環境省海洋生物レッドリスト（2017年）	絶滅（EX）	我が国ではすでに絶滅したと考えられる種	
		野生絶滅（EW）	飼育・栽培下でのみ存続している種	
		絶滅危惧 IA 類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの	
		絶滅危惧 IB 類（EN）	IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	
		絶滅危惧 II 類（VU）	絶滅の危険が増大している種	
		準絶滅危惧（NT）	現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種	
		情報不足（DD）	評価するだけの情報が不足している種	
茨城県 RDB	茨城県版レッドデータブック（植物編：2012年）、（動物編：2016年）	絶滅	本県ではすでに絶滅したと考えられる種（飼育下でのみ生息している野生絶滅を含む）	
		絶滅危惧 I 類	絶滅の危機に瀕している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの	
		絶滅危惧 IA 類（CR）	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの	
		絶滅危惧 IB 類（EN）	IA 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの	
		絶滅危惧 II 類	絶滅の危険が増大している種。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 IB 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの	
		準絶滅危惧	存続基盤が脆弱な種。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの	
		情報不足	評価するだけの情報が不足している種 注目種	最近県内での生息が確認された種であるが、県内の分布域がまだ十分に調査されていない種
栃木県 RL	栃木県版レッドリスト（第4次：2023年）	絶滅	県内ではすでに絶滅したと考えられる生物	
		絶滅危惧 I 類（A ランク）	絶滅の危機に瀕している生物。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	
		絶滅危惧 II 類（B ランク）	絶滅の危険が増大している。現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「A ランク」に移行することが確実と考えられるもの。	
		準絶滅危惧（C ランク）	存続基盤が脆弱な生物。現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては上位ランクに移行する要素を有するもの。	
		情報不足	評価するだけの情報が不足している生物	
		絶滅のおそれのある地域個体群	地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群	
		要注目	注目すべき生物。保護上留意すべき生物、または特徴ある生息・生育環境等により注目すべき生物。	

表 2-2 重要な魚類の経年確認状況一覧

No.	種名	河川水辺の国勢調査							重要種選定基準				
		H7	H9	H13	H18	H23	H28	R3	文化財	種の保存	環境省RL	環境省海洋RL	茨城県RDB
1	スナヤツメ類	○	○	○	○	○	○	○		絶滅危惧II類(VU)		(北方型:II類)	絶滅危惧II類
2	ニホンウナギ	○	○	○	○	○	○	○		絶滅危惧IB類(EN)		準絶滅危惧種	要注目
3	キンブナ	○		○	○	○				絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	絶滅危惧II類
4	ヤリタナゴ							○		準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	絶滅危惧I類
5	アブラボテ							○		準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧I類	
6	タナゴ	○	○	○		○	○	○		絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧IB類	絶滅危惧I類
7	アカヒレタビラ							○		絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧IB類	絶滅危惧I類
8	アブラハヤ	○						○					要注目
9	ドジョウ	○	○	○	○	○	○	○		準絶滅危惧(NT)		情報不足	
10	ヒガシシマドジョウ	○	○	○	○	○	○	○				準絶滅危惧	
11	ホトケドジョウ	○		○		○	○	○		絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧II類	絶滅危惧II類
12	ギバチ	○	○	○	○	○	○	○		絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	準絶滅危惧
13	サクラマス(ヤマメ)	○			○					準絶滅危惧(NT)		(無斑型:IA類)	
14	ミナミメダカ						○	○		絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	絶滅危惧II類
15	クルメサヨリ		○	○			○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧種	
16	カマキリ	○								絶滅危惧II類(VU)			
17	カジカ (ワツセミカンガ (淡水性両側回遊 型))			○	○	○	○	○				準絶滅危惧種	
18				○	○	○	○	○		絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧II類	要注目
19	カワアナゴ					○						情報不足:注目種	
20	イドミミズハゼ					○				準絶滅危惧(NT)		情報不足:注目種	
21	ミニズハゼ	○	○				○	○				絶滅危惧II類	
22	ヒモハゼ							○		準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	
23	シロウオ							○		絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	
24	ボウズハゼ	○	○		○	○	○					情報不足:注目種	
25	マサゴハゼ							○		絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧IA類	
26	オオヨシノボリ	○	○	○	○	○	○	○				準絶滅危惧種	
27	ゴクラクハゼ							○				絶滅危惧IA類	
28	ビリング			○	○							準絶滅危惧種	
29	ジュズカケハゼ					○				準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	絶滅危惧II類
30	エドハゼ					○		○		絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-3 重要な底生動物の経年確認状況一覧

No.	種名	河川水辺の国勢調査						重要種選定基準					
		H5	H9	H13	H18	H24	H30	文化財	種の保存	環境省RL	環境省海洋RL	茨城県RDB	栃木県RL
1	イシマキガイ		○	○	○		○					絶滅危惧IA類	
2	マルタニシ	○		○						絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	要注目
3	カワグチツボ			○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧IA類	
4	ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ						○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧種	
5	ミズゴマツボ		○				○	○		準絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	
6	ナガオカモノアラガイ						○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧種	
7	コシダカヒメモノアラガイ				○			○		情報不足(DD)			
8	モノアラガイ	○	○	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	
9	ヒラマキミズマイマイ		○							情報不足(DD)		準絶滅危惧種	
10	ウネナシトマヤガイ							○		準絶滅危惧(NT)			
11	ヤマトシジミ	○	○	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)			
12	マシジミ		○	○						絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	要注目
13	ヌマコダキガイ			○						絶滅危惧II類(OR+EN)			
14	アリアケカワゴカイ				○					絶滅危惧IB類			
15	イトメ		○				○			準絶滅危惧種		準絶滅危惧種	
16	ドロオニスピオ		○									情報不足2現状不明種	
17	ミドリビル						○			情報不足(DD)			
18	アンデールヨコエビ	○								準絶滅危惧(NT)			
19	ヒヌマヨコエビ						○					準絶滅危惧種	
20	ミソレヌマエビ		○		○	○						準絶滅危惧種	
21	ヌマエビ						○			絶滅危惧II類			
22	又カエビ	○	○	○	○		○					準絶滅危惧種	準絶滅危惧
23	テナガエビ	○	○	○	○	○	○					要注目	
24	スジエビ	○	○	○	○	○	○					要注目	
25	サワガニ	○		○	○	○	○					要注目	
26	アカテガニ	○										準絶滅危惧種	
27	モクズガニ	○	○	○	○	○	○					準絶滅危惧種	要注目
28	タイワンヒライソモドキ						○					準絶滅危惧種	
29	アリアケモドキ				○	○	○	○				絶滅危惧IA類	
30	オオシロカゲロウ				○	○	○					要注目	
31	コシボソヤンマ		○									準絶滅危惧	
32	キイロソナエ						○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧種	
33	アオサンエ	○	○	○	○		○					準絶滅危惧	
34	ホンサンエ	○					○					要注目	
35	ヒメサンエ				○		○					準絶滅危惧	
36	ナゴヤサンエ				○					絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	情報不足
37	キイロヤマトンボ						○			準絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	情報不足
38	マイコアカネ	○		○								準絶滅危惧	
39	ミヤマアカネ	○										準絶滅危惧種	
40	リスアカネ			○								絶滅危惧II類	
41	ヒメマルミズムシ	○										準絶滅危惧	
42	オオコオイムシ		○									要注目	
43	タガメ		○							絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧種	準絶滅危惧
44	ムラサキトピケラ					○						要注目	
45	キベリマメゲンゴロウ	○	○	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)		要注目	
46	ミズスマシ	○	○							絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧種	
47	コナガミズスマシ			○			○			絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	情報不足
48	クビボソコガシラミズムシ		○							絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	情報不足
49	スジヒラタガムシ			○						情報不足(DD)		準絶滅危惧	
50	コガムシ			○						情報不足(DD)		要注目	
51	ガムシ			○						絶滅危惧(NT)		絶滅危惧II類	準絶滅危惧
52	ヨコミゾドロムシ							○		絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧	情報不足
53	アシナガミゾドロムシ		○					○				絶滅危惧II類	
54	ゲンジボタル				○							準絶滅危惧種	要注目

*重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-4 重要な植物の経年確認状況一覧

No.	種名	河川水辺の国勢調査					重要種選定基準				
		H5	H12	H14	H20	H31	文化財	種の保存法	環境省RL	茨城県RDB	栃木県RL
1	カタヒバ				○					準絶滅危惧種	
2	ハマハナヤスリ					○				絶滅危惧II類	
3	クモノシダ				○	○				準絶滅危惧種	
4	シノブ					○				準絶滅危惧種	
5	イワオモダカ					○				絶滅危惧IA類	絶滅危惧II類
6	ヤナギモ				○	○				準絶滅危惧種	
7	ニガカシュウ					○				準絶滅危惧種	準絶滅危惧
8	ミクリ	○	○		○	○			準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目
9	ヒロハノイヌノヒゲ	○			○					準絶滅危惧種	
10	ヤガミスゲ				○	○				準絶滅危惧種	準絶滅危惧
11	ヒメスゲ					○				絶滅危惧II類	
12	オオクグ		○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IB類	
12	シオクグ				○	○				絶滅危惧II類	
13	カンエンガヤツリ				○				絶滅危惧 II 類(VU)	準絶滅危惧種	準絶滅危惧
14	カモノハシ	○	○	○	○					準絶滅危惧種	絶滅危惧II類
15	アイアシ	○		○	○	○				絶滅危惧IB類	
16	スズメノカタビラ	○		○						情報不足(現状不明種)	準絶滅危惧
17	イヌアワ				○	○				準絶滅危惧種	
18	ナガミノツルキケマン		○		○				準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目
19	コウモリカズラ		○	○	○	○				準絶滅危惧種	
20	イチリンソウ	○								準絶滅危惧種	
20	キクザキイチゲ		○							準絶滅危惧種	
21	バイカモ				○	○				絶滅危惧IA類	
22	タコノアシ	○	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目
22	フサモ	○								絶滅危惧IB類	情報不足
23	レンリソウ		○							準絶滅危惧種	
24	ハルニレ				○					絶滅危惧II類	
25	トキホコリ					○			準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IB類	要注目
26	カワラサイコ	○	○	○	○					準絶滅危惧種	
27	ハマナス	○		○	○	○				絶滅危惧II類	
28	ノウルシ	○	○	○	○				準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	準絶滅危惧
29	コゴメヤナギ	○	○	○	○	○				準絶滅危惧種	
30	アリアケスマレ	○								準絶滅危惧種	
31	ヒメミソハギ		○		○					準絶滅危惧種	
32	ミズマツバ			○	○	○			準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	要注目
32	ヒシ	○								準絶滅危惧	
33	ウスゲチョウジタデ		○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目
34	コイヌガラシ		○	○					準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	要注目
35	サデクサ	○	○	○						準絶滅危惧	
36	又カボタデ	○							絶滅危惧 II 類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類
37	カワラナデシコ			○	○					準絶滅危惧種	
38	カワヂシャ	○	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	準絶滅危惧
39	ミゾコウジュ		○	○		○			準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目
40	ヒメナミキ	○	○	○	○	○				準絶滅危惧種	
41	ナミキソウ					○				絶滅危惧II類	絶滅危惧I類
42	カワラハハコ	○	○	○	○	○				絶滅危惧II類	
43	ノニガナ				○	○				準絶滅危惧種	
44	カワラニガナ	○	○	○		○			準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IB類	要注目
45	アキノハハコグサ	○							絶滅危惧 I B 類(EN)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類
46	シャク					○				準絶滅危惧種	
47	ツボクサ	○									絶滅危惧II類

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-5 重要な鳥類の経年確認状況一覧

No.	和名	河川水辺の国勢調査				重要種選定基準				
		H5	H8	H16	H25	文化財	種の保存法	環境省RL	茨城県RDB	栃木県RL
1	カツブリ	○	○	○	○				準絶滅危惧	
2	ハジロカツブリ			○	○				絶滅危惧II類	
3	カンムリカツブリ	○	○	○	○				絶滅危惧IB類	
4	ヒメウ				○		絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧II類		
5	ヨシゴイ	○			○		準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	
6	ササゴイ			○				絶滅危惧IB類		
7	アマサギ	○	○	○	○			準絶滅危惧	絶滅危惧II類	
8	チュウサギ	○	○	○	○		準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
9	コサギ	○	○	○	○				絶滅危惧II類	
10	マガン		○	○	国天然		準絶滅危惧(NT)			
11	オシドリ	○		○	○		情報不足(DD)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	
12	カワアイサ				○			準絶滅危惧		
13	ミサゴ	○		○	○		準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
14	オオタカ		○	○	○		準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	
15	ハイタカ		○		○		準絶滅危惧(NT)	注目種	準絶滅危惧	
16	サシバ	○		○	○		絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	
17	ハイイロチュウヒ		○						準絶滅危惧	
18	チュウヒ	○	○	○	○	国内希少	絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧II類		
19	ハヤブサ	○	○	○	○	国内希少	絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧II類	
20	ウズラ	○					絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	
21	ヒクイナ	○					準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧II類	
22	イカルチドリ	○	○	○	○			絶滅危惧II類		
23	シロチドリ		○				絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	
24	ハマシギ	○	○		○		準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧	準絶滅危惧	
25	イソシギ	○	○	○	○				要注目	
26	オオジシギ	○	○				準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IA類	絶滅危惧I類	
27	オオセグロカモメ	○		○	○		準絶滅危惧(NT)			
28	コアジサシ	○		○	○		絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	
29	カッコウ	○		○	○			絶滅危惧IB類		
30	アオバズク		○	○				絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	
31	フクロウ		○	○					準絶滅危惧	
32	ハリオアマツバメ				○				絶滅危惧I類	
33	ヒメアマツバメ	○		○					注目種	
34	ヤマセミ	○	○	○				絶滅危惧IB類	準絶滅危惧	
35	コシアカツバメ	○		○	○			絶滅危惧II類		
36	サンショウクイ				○		絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	
37	ノビタキ	○	○		○				準絶滅危惧	
38	オオセッカ			○		国内希少	絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧IB類	絶滅危惧I類	
39	コヨシキリ			○				絶滅危惧IB類	準絶滅危惧	
40	サンコウチョウ		○	○	○				準絶滅危惧	
41	ホオアカ	○			○			絶滅危惧IB類	準絶滅危惧	
42	コムクドリ	○		○	○				準絶滅危惧	
43	ヤマドリ				○				準絶滅危惧	

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-6 重要な両生類・爬虫類・哺乳類の経年確認状況一覧

No.	分類群	種名	河川水辺の国勢調査				重要種選定基準				
			H7	H15	H23	R2	文化財	種の保存法	環境省RL	茨城県RDB	栃木県RL
1	哺乳類	キクガシラコウモリ		○		○					要注目
2		コキクガシラコウモリ		○							要注目
3		モモジロコウモリ		○		○					要注目
4		ユビナガコウモリ				○					絶滅危惧IB類
5		ニホンイタチ	○	○	○	○					要注目
6		カヤネズミ	○	○	○	○					情報不足現状不明種 要注目
7		ニホンリス			○						準絶滅危惧種
8		ジネズミ		○	○						情報不足
1	爬虫類	ニホンカナヘビ	○	○	○	○					要注目
2		ニホンマムシ		○	○	○					準絶滅危惧
3		タカチホヘビ			○						準絶滅危惧種 情報不足
4		ヒガシニホントカゲ				○					絶滅危惧II類
5		アオダイショウ	○	○	○	○					要注目
6		シマヘビ		○	○	○					要注目
7		ジムグリ			○						要注目
8		ヒバカリ		○	○	○					情報不足2現状不明種 要注目
9		ヤマカガシ	○	○	○	○					準絶滅危惧
1	両生綱	ガジカガエル		○	○	○					準絶滅危惧種 要注目
2		シュレーゲルアオガエル		○	○	○					準絶滅危惧
3		ツチガエル		○	○	○					情報不足注目種 絶滅危惧IB類
4		トウキョウダルマガエル	○	○	○	○			準絶滅危惧(NT)	情報不足注目種	準絶滅危惧
5		ニホンアカガエル	○	○	○	○					準絶滅危惧
6		ヤマアカガエル	○		○	○					絶滅危惧II類
7		アズマヒキガエル			○	○					情報不足注目種 準絶滅危惧

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-7 重要な陸上昆虫類の経年確認状況一覧 1/2

No.	種名	河川水辺の国勢調査				重要種選定基準				
		H5,H6	H12	H17	H27	文化財	種の保存法	環境省RL	茨城県RDB	栃木県RL
1	ワスレナグモ		○					準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	
2	コガネグモ	○	○	○	○			準絶滅危惧種		
3	コアシダカグモ			○				準絶滅危惧種		
4	オツネントンボ	○						絶滅危惧II類		
5	キイトンボ		○					準絶滅危惧種		
6	オゼイトンボ				○			準絶滅危惧種	要注目	
7	アオモンイトンボ		○	○					絶滅危惧II類	
8	ヒヌマイトンボ	○					絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧IA類		
9	ムスジイトンボ				○			準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
10	アオハダトンボ				○		準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目	
11	マダラヤンマ	○	○				準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
12	カトリヤンマ			○					絶滅危惧II類	
13	サラサヤンマ				○			準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
14	モイワサナエ	○						絶滅危惧II類	準絶滅危惧	
15	アオサナエ				○				準絶滅危惧	
16	ホンサナエ	○	○	○					要注目	
17	ヒメサナエ		○	○				準絶滅危惧		
18	ナゴヤサナエ	○					絶滅危惧II類(VU)	準絶滅危惧種	情報不足	
19	ムカシヤンマ				○				準絶滅危惧	
20	ハラビロトンボ	○		○	○			準絶滅危惧種		
21	チョウトンボ			○					要注目	
22	キトンボ	○						絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	
23	マイコアカネ	○	○	○					準絶滅危惧	
24	ミヤマアカネ	○	○	○	○				準絶滅危惧種	
25	ケギヌキハサミムシ	○	○	○					要注目	
26	オオハサミムシ	○	○	○	○				情報不足	
27	クツワムシ			○				絶滅危惧IB類	要注目	
28	ハマズズ			○				絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	
29	カワラバッタ	○	○	○	○			絶滅危惧II類	要注目	
30	ショウリヨウバッタモドキ		○	○	○			準絶滅危惧種		
31	アズキヘリカメムシ		○	○				絶滅危惧IA類		
32	シロヘリツチカメムシ	○		○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
33	ヨツボシカメムシ		○	○				絶滅危惧II類		
34	オオクチブトカメムシ				○			準絶滅危惧種		
35	イトアメンボ	○					絶滅危惧II類(VU)			
36	モンシロミズギワカメムシ	○						準絶滅危惧		
37	コオイムシ			○			準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	
38	タガメ		○	○	○		絶滅危惧II類(VU)	準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
39	アシナガモモフトスカシバ			○			絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧	
40	ハイイロボクトウ		○	○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
41	ホソバセセリ		○					絶滅危惧II類		
42	ギンイチモンジセセリ	○	○	○	○		準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	要注目	
43	ミヤマチャバネセセリ		○					準絶滅危惧		
44	ウラゴマダラシジミ	○		○				準絶滅危惧種	準絶滅危惧	
45	オオミドリシジミ				○				準絶滅危惧	
46	ミヤマシジミ						絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧I類	
47	オオヒカゲ	○		○	○			準絶滅危惧種	要注目	
48	オオムラサキ	○	○	○	○		準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	要注目	
49	ツマグロキショウ	○	○				絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧IB類	要注目	
50	ゴマフツツガ		○				絶滅危惧(NT)			
51	チャバネットツガ		○						準絶滅危惧	
52	ニシキシマメイガ		○	○					要注目	
53	ヤネホソバ			○			準絶滅危惧(NT)			
54	スゲドクガ		○	○	○		準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
55	コシロシタバ	○		○			準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
56	カギモンハナオイアツバ		○				準絶滅危惧(NT)		準絶滅危惧	
57	オオシロテンクチバ			○				準絶滅危惧種		
58	ナカスジキヨトウ		○	○					要注目	
59	オオチャバネヨトウ			○			絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	
60	ハチモドキハナアブ			○					要注目	
61	フトハチモドキバエ		○	○					要注目	
62	オグラヒラタゴミムシ			○					要注目	
63	ウミミズギワゴミムシ			○			準絶滅危惧(NT)			
64	セアカオサムシ		○				準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧種	要注目	
65	オサムシモドキ	○	○	○	○				準絶滅危惧	
66	クロモンヒラナガゴミムシ			○					要注目	
67	キベリマルクビゴミムシ	○					絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類	
68	フタモンマルクビゴミムシ			○	○		絶滅危惧IB類(EN)		絶滅危惧I類	
69	アイヌハンミョウ				○		準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	
70	ホソハンミョウ				○		絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧II類	
71	シマケシゲンゴロウ			○					準絶滅危惧	

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

表 2-8 重要な陸上昆虫類の経年確認状況一覧 2/2

No.	種名	河川水辺の国勢調査				重要種選定基準				
		H5,H6	H12	H17	H27	文化財	種の保存法	環境省RL	茨城県RDB	栃木県RL
72	シマゲンゴロウ		○	○	○			準絶滅危惧(NT)		要注目
73	ケシゲンゴロウ	○	○					準絶滅危惧(NT)		情報不足
74	キベリマメゲンゴロウ			○	○			準絶滅危惧(NT)		要注目
75	オオミズスマシ		○					準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧
76	ミズスマシ	○						絶滅危惧II類(VU)		絶滅危惧I類
77	マダラコガシラミズムシ			○				絶滅危惧II類(VU)		準絶滅危惧
78	カワラゴミムシ		○							絶滅危惧II類
79	コガムシ		○	○	○			情報不足(DD)		要注目
80	ガムシ		○	○				準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧
81	シジミガムシ	○		○				絶滅危惧IB類(EN)		
82	ルリエンマムシ			○	○					絶滅危惧II類
83	ヤマトモンシデムシ		○	○				準絶滅危惧(NT)		要注目
84	ヒメヒラタシデムシ		○		○					要注目
85	ヤマトヒメメダカカッコウムシ		○	○	○				準絶滅危惧種	準絶滅危惧
86	アイヌテントウ	○	○	○	○					要注目
87	ジュウサンホシテントウ	○	○	○	○					要注目
88	ムモンチャイロテントウ		○							要注目
89	キアシネクイハムシ			○						準絶滅危惧
90	トゲアリ		○					絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	要注目
91	モンスズメバチ			○	○			情報不足(DD)		
92	キオビクモバチ		○							絶滅危惧II類
93	フタモシクモバチ			○				準絶滅危惧(NT)		
94	ニッポンハナダカバチ	○		○				絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類	絶滅危惧I類
95	クロマルハナバチ				○			準絶滅危惧(NT)	情報不足!注目種	
96	オスジハナバチ			○						要注目

※重要種の選定基準は、表 2-1 に示す。

2.3 特徴的な河川景観や文化財等

(1) 特徴的な河川景観

那珂川流域には豊かな自然が残っており、急峻な山地から太平洋に注ぎ込む那珂川の流域では、同じ流域でありながら様々な特徴的な河川景観を見ることができる。

那珂川の上流部は、源流の深い緑の渓谷を流れる川の姿、新緑や紅葉に映える時期の深山ダムのダム湖、扇状地を浸食してきた谷の中を流れる那珂川などの美しい河川景観が特徴的である。



深山ダムのダム湖



那珂川の上流域の様子

中流部では「関東の嵐山」と称せられる御前山と麓を流れる那珂川が合わさった景色、崖地の深い谷の中を流れ、流れのはやい清流と白い礫河原、両岸の崖と緑が重なった景観などが見られる。



御前山の麓を流れる那珂川



那珂川の中流域の様子

那珂川の下流部には、水戸徳川家第9代藩主斉昭公が、天保4年（1833年）に領内を巡視し8つの景勝地を選定した「水戸八景」のうち5つの景勝地があり、このうち那珂川本川と涸沼川の合流点右岸の高台から望む「巖船夕照」や、涸沼の湖畔から見られる「広浦秋月」などは、かつてを忍ばせる景勝地である。また、河口から鹿島灘を望む、太平洋の広がりを感じることができる景観も優れている。



「巖船夕照」の眺め



朝日を受けた河口部

(2) 文化

① 名勝・史跡及び天然記念物

那珂川流域内国指定および県指定の名勝・史跡、天然記念物を表 2-9 に示す

表 2-9 (1) 那珂川流域の名勝・史跡、天然記念物（国指定）

県	市町村	指定区分	名 称
茨城県	水戸市	天然記念物	白旗山八幡宮のオハツキイチョウ
		名 勝	常磐公園
		特別史跡	旧弘道館
		史 跡	常磐公園
		史 跡	吉田古墳
		史 跡	愛宕山古墳
		史 跡	大串貝塚
		史 跡	台渡里官衙遺跡群（台渡里官衙遺跡・台渡里廃寺跡）
		史 跡	馬渡埴輪製作遺跡
	ひたちなか市	史 跡	虎塚古墳
		史 跡	十五郎穴横穴群
		常陸大宮市	登録記念物 岡山氏庭園（養浩園）
	笠間市	天然記念物	片庭ヒメハルゼミ発生地
	茨城町	天然記念物	大戸のサクラ
		史 跡	小幡北山埴輪製作遺跡
	大洗町	史 跡	磯浜古墳群
栃木県	栃木県全域	天然記念物	ミヤコタナゴ
		特別天然記念物	カモシカ
	那須塩原市	天然記念物	逆スギ
	大田原市	名 勝	おくのほそ道の風景地 八幡宮（那須神社境内）
		史 跡	侍塚古墳
	那須烏山市	史 跡	長者ヶ平官衙遺跡附東山道跡
		史 跡	鳥山城跡
	那須町	名 勝	おくのほそ道の風景地 殺生石
		名 勝	おくのほそ道の風景地 遊行柳（清水流るゝの柳）
	塙谷町	天然記念物	尚仁沢上流部イヌブナ自然林
	那珂川町	史 跡	唐御所横穴
		史 跡	那須官衙遺跡
		史 跡	那須小川古墳群・駒形大塚古墳・吉田温泉神社古墳群・那須八幡塚古墳群
		史 跡	那須神田城跡

（出典：文化庁、茨城県教育委員会 HP、栃木県教育委員会 HP）

表 2-9 (2) 那珂川流域の名勝・史跡、天然記念物（茨城県指定）

県	市町村	指定区分	名 称
茨城県	水戸市	史 跡	笠原水道
		史 跡	水戸城跡（堀及び濠）
	ひたちなか市	天然記念物	金沙山の大ヒイラギ
		天然記念物	平磯白亜紀層
		史 跡	那珂湊反射炉跡 附那珂湊反射資料25点
		天然記念物	酒列磯前神社の樹叢
	那珂市	天然記念物	不動院のカヤ
		天然記念物	菅谷のカヤ
		天然記念物	菅谷のモチノキ
	常陸大宮市	天然記念物	三浦杉
		天然記念物	鷺子山上神社のカヤ
	笠間市	天然記念物	八重の藤
		天然記念物	稻田禪房のお葉付イチョウ
		史 跡	難台山城址
	茨城町	名 勝	広浦
		名 勝	親沢
	城里町	史 跡	伝内大臣平重盛墳墓
		史 跡	那珂西城址
	大洗町	天然記念物	お葉付イチョウ

（出典：茨城県教育委員会 HP、都道府県指定文化財データ）

表 2-9 (3) 那珂川流域の名勝・史跡、天然記念物（栃木県指定）

県	市町村	指定区分	名 称
栃木県	那須塩原市	天然記念物	大黒岩（含化石チャネル堆積物）
		史 跡	乃木希典那須野旧宅
	大田原市	天然記念物	糸魚生息地
		天然記念物	堀之内のツクバネガシ
		天然記念物	片田のヒイラギ
		天然記念物	大野室のイチョウ
		天然記念物	佐久山のケヤキ
		天然記念物	湯泉神社社叢
		天然記念物	磯上のヤマザクラ
	さくら市	史 跡	西原古墳
	矢板市	天然記念物	泉のエノキ
		天然記念物	観音寺のイチョウ
		天然記念物	矢板市山田地区のチョウゲンボウ繁殖地
		史 跡	御前原城跡
		史 跡	堀越遺跡
	那須町	天然記念物	湯泉神社のおおすぎ
		天然記念物	那須町のこうやまき
		天然記念物	八幡のミネザクラ
		天然記念物	伊王野城跡の樹林
		史 跡	殺生石
	茂木町	天然記念物	九石のけやき
		天然記念物	安楽寺のけやき
		天然記念物	覚成院のかや
		天然記念物	茂木小山のヤマザクラ
		天然記念物	河井八幡宮の社叢
		天然記念物	小貫のイロハモミジ
		天然記念物	荒権神社のケヤキ
		天然記念物	小貫のひいらぎ
		史 跡	千本城跡
		史 跡	細川家の墓所
	那珂川町	天然記念物	馬頭院の枝垂栗
		天然記念物	北向田のケヤキ
		天然記念物	戸隠神社のイチョウ
		史 跡	武茂城跡（乾徳寺境内を含む）

(出典：栃木県教育委員会 HP、都道府県指定文化財データ)

② 文化財

那珂川流域の国指定および県指定の文化財を表 2-10 に示す。

表 2-10 (1) 那珂川流域の文化財（国指定-茨城県）

県	市町村	指定区分	名 称
茨城県	水戸市	重要文化財	八幡宮 本殿
		重要文化財	旧弘道館 〔正庁〕
		重要文化財	旧弘道館 〔至善堂〕
		重要文化財	旧弘道館 〔正門〕
		重要文化財	薬王院 本堂
		重要文化財	中崎家 住宅
		重要文化財	佛性寺 本堂（附旧露盤1個）
		重要文化財	太刀〈銘則包作附糸巻太刀拵〉
		重要文化財	朱漆足付盥
		重要文化財	木造 聖徳太子立像（太子堂安置）
		重要文化財	三昧塚古墳 出土品
		重要文化財	一橋徳川家関係資料
		重要無形文化財	一中節三味線
		登録有形文化財	茨城県立水戸商業高等学校 旧本館玄関
		登録有形文化財	水戸市水道低区配水塔
		登録有形文化財	祐月本店 雜蔵
		登録有形文化財	和田家住宅 延年楼
	ひたちなか市	選択無形民俗文化財	大串のささらと大野のみろく
		選択無形民俗文化財	那珂湊の獅子とみろく
	那珂市	重要文化財	紙本著色 聖徳太子絵伝
	常陸大宮市	登録有形文化財	間宮家住宅 主屋
		登録有形文化財	旧岡山酒造養浩園喜雨亭
笠間市	笠間市	重要文化財	楞厳寺 山門
		重要文化財	笠間福荷神社 本殿
		重要文化財	塙家住宅 〔主屋〕
		重要文化財	塙家住宅 〔土間〕
		重要文化財	木造 薬師如来坐像
		重要文化財	木造 薬師如来立像
		重要文化財	木造 千手観音立像
		重要文化財	木造 弥勒仏立像
		登録有形文化財	笠間市立歴史民俗資料館（旧宍戸町役場庁舎）
	城里町	登録有形文化財	富田家住宅 主屋
		登録有形文化財	大日堂
		重要文化財	木造 阿弥陀如来坐像
大洗町	城里町	重要文化財	木造 薬師如来及両脇侍像（附銅造胎内仏）
		重要文化財	木造 浮彫如意輪観音像
		登録有形文化財	島家住宅 主屋
	大洗町	登録有形文化財	幕末と明治の博物館 別館
		登録有形文化財	武石家住宅 主屋
		登録有形文化財	大貫家住宅 主屋
		登録有形文化財	旧おかめ旅館 本館

(出典：文化庁、茨城県教育委員会 HP)

表 2-11 (1) 那珂川流域の文化財（国指定-栃木県）

県	市町村	指定区分	名 称
栃木県	那須塩原市	重要文化財	深鉢形土器〈残欠共〉 栃木県那須郡西那須町櫛沢遺跡出土
		重要文化財	旧青木家 那須別邸
		重要文化財	那須疏水旧取水施設〔東水門〕
		重要文化財	那須疏水旧取水施設〔西水門〕
		重要文化財	那須疏水旧取水施設〔導水路及び余水路〕
		重要文化財	那須疏水旧取水施設〔東隧道〕
		重要文化財	那須疏水旧取水施設〔西隧道〕
		登録有形文化財	高木会館
		登録有形文化財	加登屋旅館 別館
		登録有形文化財	加登屋旅館 本館
		登録有形文化財	加登屋旅館 悠仙閣
		登録有形文化財	乃木神社 拝殿
		登録有形文化財	乃木神社 本殿
		登録有形文化財	三斗小屋温泉大黒屋旅館 本館
		選択無形民俗文化財	百村の百堂念仏舞
	大田原市	国宝	那須国造碑
		重要文化財	大雄寺〔本堂〕
		重要文化財	大雄寺〔庫裏〕
		重要文化財	大雄寺〔禪堂〕
		重要文化財	大雄寺〔鐘楼〕
		重要文化財	大雄寺〔経蔵〕
		重要文化財	大雄寺〔総門〕
		重要文化財	大雄寺〔北東廻廊〕
		重要文化財	大雄寺〔南東廻廊〕
		重要文化財	大雄寺〔南西廻廊〕
		重要文化財	那須神社〔楼門〕
		重要文化財	那須神社〔本殿〕
		重要文化財	木造 高峰顯日坐像
		重要文化財	木造 無学祖元坐像
		重要文化財	絹本着色 仏國國師像
		重要文化財	絹本着色 仏応禪師像
		重要文化財	綾包太刀拵
		重要文化財	太刀〈銘成高〉
		重要無形文化財	竹工芸
		登録有形文化財	足利銀行黒羽支店（旧黒羽銀行）
		選択無形民俗文化財	湯津上のダイモジ（大捻繩）引き
矢板市	那須烏山市	重要文化財	木幡神社 本殿
		重要文化財	木幡神社 標門
		重要文化財	荒井家住宅（栃木県矢板市立足）〔表門〕
		重要文化財	荒井家住宅（栃木県矢板市立足）〔主屋〕
		重要文化財	木造 千手觀音及両脇侍像
		登録有形文化財	山縣有朋記念館 別館
	那須烏山市	選択無形文化財	程村紙
		重要無形民俗文化財	烏山の山あげ行事
		選択無形民俗文化財	八雲神社の山あげ祭
		選択無形民俗文化財	塙の天祭
那須町	那須町	重要文化財	三森家住宅（栃木県那須郡那須町）〔主屋〕
		重要文化財	三森家住宅（栃木県那須郡那須町）〔表門〕
		重要文化財	金銅 阿弥陀如来立像
		登録有形文化財	林家住宅
	茂木町	重要文化財	旧羽石家住宅（栃木県芳賀郡茂木町）
		登録有形文化財	旧木幡小学校 校舎
那珂川町	那珂川町	登録有形文化財	飯塚家住宅新宅 主屋
		登録有形文化財	飯塚家住宅新宅 表門及び扉
		登録有形文化財	飯塚家住宅新宅 文庫蔵
		登録有形文化財	飯塚家住宅新宅 裏門
		登録有形文化財	飯塚家住宅新宅 中庭木戸
		登録有形文化財	飯塚家住宅本宅 離れ
		登録有形文化財	飯塚家住宅本宅 表門
		登録有形文化財	飯塚家住宅本宅 脇門

(出典：文化庁、栃木県教育委員会 HP)

表 2-10 (2) 那珂川流域の文化財（茨城県指定）

県	市町村	指定区分	名 称
茨城県 水戸市		有形文化財	銅印
		有形文化財	海後遺跡出土人面付土器
		有形文化財	三昧塙古墳出土遺物
		有形文化財	小野天神前遺跡出土土器
		有形文化財	舟塙古墳出土遺物
		有形文化財	六地蔵寺所蔵典籍・文書 典籍892部・文書407点
		有形文化財	旧水戸城 薬医門
		有形文化財	栗王院 仁王門
		有形文化財	四脚門
		有形文化財	水海道小学校 玄関
		有形文化財	旧茂木住宅
		有形文化財	綿引家住宅 主屋・倉
		有形文化財	木造 薬師如来坐像
		有形文化財	木造 聖誕如来座像
		有形文化財	木造 大黒天像
		有形文化財	木造 薬師如来坐像
		有形文化財	木造 阿弥陀如来脇侍三尊像
		有形文化財	木造 十二神符像
		有形文化財	金銅化仏
		有形文化財	銅造 大日如来及三十日仏坐像
		有形文化財	銅造 誕生釈迦仏立像
		有形文化財	鍍金仏
		有形文化財	阿弥陀如来像
		有形文化財	木造 墓石太立像
		有形文化財	綿本着色 両界曼荼羅
		有形文化財	綿本着色 弘法大師像
		有形文化財	綿本着色 真言八祖像
		有形文化財	綿本着色 十二天立像
		有形文化財	綿本着色 六字経曼荼羅
		有形文化財	綿本着色 十三仏図
		有形文化財	綿本着色 詈迦十六善神圖
		有形文化財	綿本墨画 芦雁図 立原杏所筆
		有形文化財	綿本着色 流燈 横山大観筆
		有形文化財	綿本彩色 阿房劫火 木村武山筆
		有形文化財	紙本着色 制吒童子像
		有形文化財	紙本淡彩 海島秋來 小川李鉄筆
		有形文化財	カルビスの包み紙のある静物 1面 中村彝筆 油絵 麻布 1923
		有形文化財	大般若波羅蜜多經
		有形文化財	唐本一切経（抜藤原時朝）
		有形文化財	紙本墨書き 神皇正統記六地蔵寺本
		有形文化財	角赤文庫
		有形文化財	徳川光圀書翰集
		有形文化財	太刀（鎧吉房）
		有形文化財	大鎌刀
		有形文化財	鎧
		有形文化財	鎧（兜、大袖付）
		有形文化財	黒韋肩浅葱筋兜
		有形文化財	総毛引紅糸威胴丸具足
		有形文化財	軍陣鞍
		有形文化財	鎧
		有形文化財	鞍
		有形文化財	鎧
		有形文化財	鎧
		有形文化財	金梨地蒔絵鎧
		有形文化財	鎧製絆筒
		有形文化財	准頂用具
		有形文化財	密教法具
		有形文化財	藤絆榼
		有形文化財	つのたらい
		有形文化財	銅装籠輪宝羯磨文戒体箱
		有形文化財	銅装籠輪宝羯磨文説相箱
		有形文化財	鏡板貼山伏笈
		有形文化財	漆塗絆榼
		有形文化財	六地蔵石幢
		無形民俗文化財	大串のささらばやし
		無形民俗文化財	大野のみろくばやし
		無形民俗文化財	水戸大神楽
茨城県 ひたちなか市		有形文化財	乳飲み児を抱く埴輪（大平古墳群黄金塚出土）
		有形文化財	後野遺跡出土石器及土器
		有形文化財	東中根遺跡群出土遺物
		有形文化財	十五郎穴横穴群出土品
		有形文化財	後光厳天皇御消息
		有形文化財	瀬戸緑釉狛犬
		有形文化財	太刀（無銘伝大村加ト）白鞘
		有形文化財	黒韋威胴丸鎧
		有形文化財	鎧櫃
		有形文化財	華嚴院の梵鐘
		有形文化財	木造 薬師如来坐像
		有形文化財	木造 昆沙門天像
		有形文化財	木造 吉祥天像
		有形文化財	木造 善尼童子像
		有形文化財	木造 如意輪觀音立像
		有形文化財	藍子山上神社 本殿（附棟札2枚）・随神門（附棟札1枚）
		有形文化財	木造 阿弥陀如来脇侍三尊像
		有形文化財	四神旗 附祝文（写）
		有形文化財	笠間城櫓
		有形文化財	旧宍戸城 表門
		有形文化財	木造 佐白觀音坐像
		有形文化財	木造 十一面觀音菩薩像
		有形文化財	木造 阿弥陀如来坐像
		有形文化財	木造 不動明王像及び両童子
		有形文化財	木造 阿弥陀如来立像
		有形文化財	木造 大日如来坐像
		有形文化財	木造 金剛力士立像
		有形文化財	木造 大日如来坐像・如来坐像
		有形文化財	寄木造 十一面觀音立像
		有形文化財	銅造 阿弥陀如来立像（附旧支柱1本）
		有形文化財	綿本著色 阿弥陀如来迎団
		有形文化財	紙本著色 金山寺圓屏風雪月花周絆筆
		有形文化財	唐本一切経
		有形文化財	唐本一切経
		有形文化財	金剛般若波羅蜜經
		有形文化財	鰐口 如意寺、嘉曆三年在銘
		有形文化財	鰐口 如意寺、嘉曆三年在銘
		有形文化財	薄光彩磁葡萄紋様花瓶板谷波山作
		有形文化財	水華磁仙桃文花瓶 板谷波山作
		有形文化財	木村家住宅
		有形文化財	木造 阿弥陀如来三尊像
		有形文化財	綿本著色 阿弥陀如来像
		有形文化財	木造 弘法大師像
		有形文化財	銅造 十一面千手觀音菩薩像
		有形文化財	両界曼荼羅版本
		有形文化財	太刀（無銘菱くわし紋）
		有形文化財	礼盤
		有形文化財	銅鏡
		無形文化財	栗野春慶塗
茨城県 城里町		有形文化財	一本松遺跡出土遺物
		有形文化財	蓮如筆消息大根田御坊宛
		有形文化財	稅所文書（山戸本）86点
		有形文化財	大洗磯前神社 本殿・拝殿
		有形文化財	木造 阿弥陀如来立像
		有形文化財	木造 阿弥陀如来坐像
		有形文化財	木造 阿弥陀如来坐像
		有形文化財	木造 觀世音菩薩立像
		有形文化財	木造 勢至菩薩立像
		有形文化財	木造 阿弥陀如来立像
		有形文化財	綿本著色 金剛界大日如来画像
		有形文化財	觀音聖人画像
		有形文化財	唯信鈴断片
		有形文化財	太刀（銘常州水戸住藤原近則）
		有形文化財	短刀
茨城県 大洗町		有形文化財	扇散壽絵書棚
		有形文化財	香合
		有形文化財	朱漆塗萬葉模様椀
		有形文化財	嚴島神社 本殿

(出典：文化庁、茨城県教育委員会 HP)

表 2-10 (3) 那珂川流域の文化財（栃木県指定）

県	市町村	指定区分	名 称
栃木県	那須塩原市	有形文化財	旧塩原御用邸新御座所
		有形文化財	大山記念館洋館（旧・大山巖別邸洋館）
		有形文化財	絹本着色 羅刹天
		有形文化財	温泉神社 石燈
		無形民俗文化財	塩原平笠獅子舞
		無形民俗文化財	関谷の城獅舞
		無形民俗文化財	上大賀の城獅舞
	大田原市	有形文化財	木造 阿弥陀如来立像
		有形文化財	木造 聖観音立像
		有形文化財	木造 積迦如來坐像
		有形文化財	木造 積迦如來坐像
		有形文化財	銅造 阿弥陀如来・両脇侍像
		有形文化財	絹本着色 黒羽周辺景観図
		有形文化財	絹本着色 広凌觀瀬図
		有形文化財	絹本着色 積迦涅槃図
		有形文化財	紙本着色 楊柳觀音像
		有形文化財	木版紙本着色 五百羅漢像
		有形文化財	紙本着色 積迦涅槃図
		有形文化財	紙本着色 童子馬師皇図
		有形文化財	板繪本着色 四聖の図
		有形文化財	板繪墨画 虎図
		有形文化財	両界曼荼羅図
		有形文化財	木版一切経
		有形文化財	紺紙金泥大般若波羅密多経
		有形文化財	創重可繋
		有形文化財	止戈枢要
		有形文化財	乘化夢奇方
		有形文化財	宝曆年中政事改正考草案
		有形文化財	太刀 無名（伝 弘綱）
		有形文化財	太刀 銘 一
		有形文化財	刀 銘 野州住源正義
		有形文化財	刀 銘 守勝
		有形文化財	刀 銘 垣洲住細川正規作（刻印）
		有形文化財	わきざし 銘 源真守造之
		有形文化財	銅製鶴口（天正）
		有形文化財	銅製鶴口（文和）
		有形民俗文化財	人面獸心の壁書
		無形民俗文化財	城獅舞
		無形民俗文化財	正淨寺金毘羅
	さくら市	有形文化財	鐵造 阿弥陀如來立像
		有形文化財	銅造 阿彌陀如來坐像
		有形文化財	絹本着色 鮎図
		有形文化財	絹本着色 野鶴を襲う鹿図
		有形文化財	紙本着色 捕鯨図
		有形文化財	紙本着色 秋山訪友図
		有形文化財	紙本着色 吉原堤図
		有形文化財	紙本着色 御用堀普請図・落成図
		有形文化財	紙本着色 座頭京上り図
		有形文化財	紙本着色 秋景山水図
		有形文化財	紙本着色 田植図・収穫図
		有形文化財	紙本着色 夏山水図
		有形文化財	紙本着色 鷹と怪鳥図
		有形文化財	紙本着色 春景図
		有形文化財	紙本着色 雲龍図
		有形文化財	紙本着色 山水図
		有形文化財	板繪着色 神輿渡御図
		有形文化財	太刀 萩原昭秀贈作之
		有形文化財	太刀 銘 作賤土細川正義
矢板市	矢板市	有形文化財	山縣有朋記念館（旧・山縣有朋別邸）
		有形文化財	木造 金剛夜叉明王坐像
		有形文化財	木造 千手觀音坐像
		有形文化財	木造 行綠僧都坐像
		有形文化財	木造 二十八部衆像
		有形文化財	木造 風神・雷神像
		有形文化財	木造 阿彌陀如來坐像（紅頬梨色阿彌陀像）
		有形文化財	銅造 大日如來坐像
		有形文化財	銅造 千手觀音菩薩坐像（縣仙）
		絹本着色 黏図	
那須烏山市	那須烏山市	有形文化財	絹本着色 高野四社明神図
		有形文化財	絹本着色 新遊三尊十六善神図
		有形文化財	絹本着色 觀世音菩薩図
		有形文化財	絹本着色 阿彌陀如來坐像
		有形文化財	板繪着色 花鳥図
		有形文化財	刀 銘 野州住道贊作之
		有形文化財	槍 銘 守勝
		有形文化財	曜麥天目茶碗（禾目天目）
		有形文化財	寛元二年銘の板碑
		有形文化財	宮原八幡宮 本殿
那須町	那須町	有形文化財	木造 千手觀音菩薩立像
		有形文化財	木造 薬師如來坐像
		有形文化財	木造 薬師如來坐像
		有形文化財	金銅 観音立像
		有形文化財	銅造 阿彌陀三尊立像（善光寺式）
		有形文化財	紙本着色 松に鹿圓六曲屏風
		有形文化財	板繪着色 横貴妃図
		有形文化財	板繪着色 龍信の股ぐりの図
		有形文化財	太刀 萩原昭秀作
		有形文化財	刀 銘 下野国田中研次昭盛作
茂木町	茂木町	有形文化財	刀 銘 作隠幕下士・細川正義同正守造之
		有形文化財	わきざし 銘 陸奥守藤原将応
		有形文化財	天蓋
		有形文化財	旗団鑓
		有形文化財	松倉山観音堂仏像
		有形文化財	金銅 势至菩薩立像
		有形文化財	青銅製 銅口
		無形民俗文化財	半俵の素念仙
		有形文化財	茂木家文書（百通）附 茂木家文書目録（宝永七年六月）百通
		有形文化財	能持院船門
塩谷町	塩谷町	有形文化財	木造 文六阿彌陀如來坐像
		有形文化財	木造 十一面觀音立像
		有形文化財	木造 薬師如來坐像
		有形文化財	銅造 観音勢至菩薩立像・脇侍
		有形文化財	絹本着色 黒魚通澤水之図
		有形文化財	絹本着色 唐美人図
		有形文化財	紙本着色 猿田彦・碓女命之図
		有形文化財	紙本着色 小深検地帳
		有形文化財	小賞観音堂 附 石燈籠
		無形民俗文化財	茂木町内上組の百幡念仙
那珂川町	那珂川町	無形民俗文化財	河井のささら
		有形文化財	刀 銘 源利庵
		有形文化財	わきざし 銘 宗勝
		無形民俗文化財	風見の神楽
		有形文化財	鷲子山上神社 本殿
		有形文化財	木造 延命地蔵菩薩坐像
		有形文化財	紺紙金字法華經
		有形文化財	刀 銘 宇隣藩細川義規男正規造之
		有形文化財	拾得の団鑓
		有形文化財	五鈴杵
市貝町	市貝町	無形民俗文化財	富山の佐々良舞
		選定保存技術	大畠家の武者絵のぼり

(出典：文化庁、栃木県教育委員会 HP)

(3) 舟運の歴史

那珂川は近世において、水戸と水戸藩領および下野（栃木）方面、東北諸藩と江戸を結ぶために、河口近くで合流する涸沼川と共に輸送動脈の役割を果たしてきた。江戸時代の那珂川舟運は奥州諸藩の廻米や幕府領の城米、所産物などを那珂川から涸沼川、北浦、霞ヶ浦、利根川を利用して運び、江戸方面との交流に利用されてきた。

那珂川舟運の遡航終点は黒羽河岸で、那珂川の舟運を利用した物資輸送には、河岸で舟に積み替えられ、那珂川を下り涸沼川を遡って涸沼湖畔の海老沢河岸や網掛河岸に陸揚げされ、陸路を駄送（岡付け）し、そこから小川に出て霞ヶ浦の舟運を利用した。また、涸沼の海老沢から陸路下吉影に至り、そこから巴川を小舟に積み替えて下って塔ヶ崎、串挽（鉾田）に出て北浦を経て潮来、さらに利根川を遡り下総関宿から江戸川を南下して松戸・市川・行徳を経て中川を横断し、隅田川に入り、本所・深川・浅草・日本橋筋の河岸に輸送された。このように那珂川・涸沼川経由の江戸回漕路を「内川廻し」（内廻りともいう）と呼んだ。また、会津地方から物資が久慈川から高和田河岸などで陸揚げされて那珂川河岸に陸送された。

那珂川で本格的な舟運が始まった万治年代（1658年～1661年）の6河岸は、その後物資輸送の増大とともに河岸の数は増え、江戸中期の安永6年（1777年）には14河岸、明治に入って13年（1880年）には19河岸となった。しかし東北本線、真岡線、烏山線等の鉄道の開通に伴い、次第に船荷が減少し、舟運の衰退とともに河岸も姿を消していった。

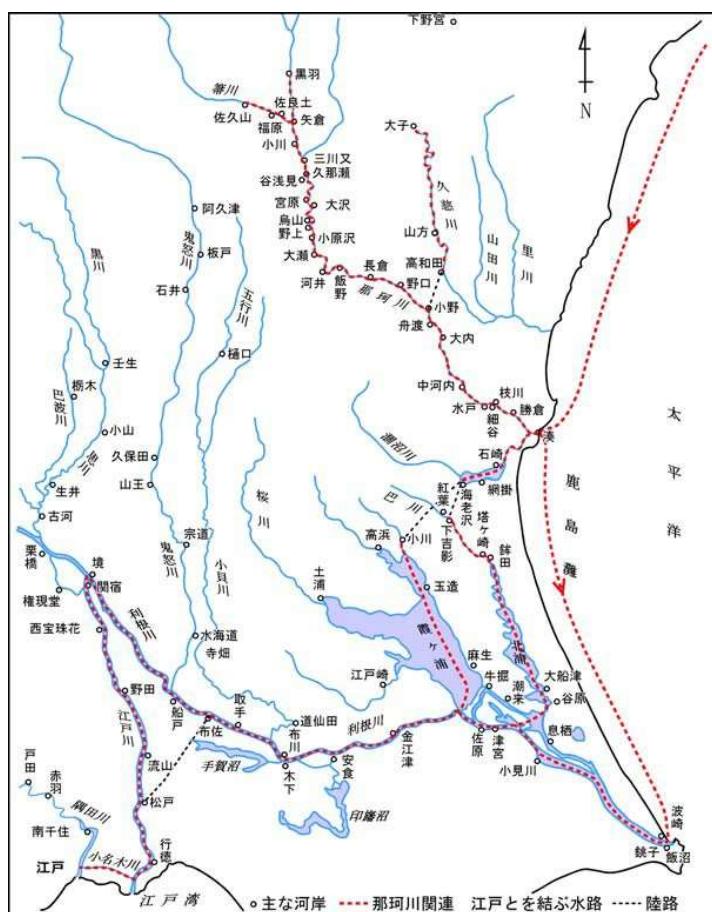


図 2-2 那珂川河岸と利根川水系の水運路

(出典：地方史研究協議会日本産業史大系を基に作成)

(4) イベント・観光

① イベント

那珂川流域の市町村では各種のイベントが行われており、古くから流域の住民の生活に根付いているものも少なくない。

那須烏山市（旧烏山町）の「山あげ祭」は、八雲神社例大祭の奉納行事で、450 年以上の歴史をもつ。現在毎年 7 月に、特産の烏山和紙を、竹や網代に編んだ上に幾重にも貼りつけた「山」があげられ、その前で狂言が演じられ、場面ごとに木頭（指揮者）の拍子木を合図に様々に変化する仕掛けと、「将門」「戻橋」などの踊りがくりひろげられる。この祭礼は、昭和54年（1979年）に国の重要無形民俗文化財に指定された。

表 2-12 に那珂川流域市町村のイベントを示す。



▲山あげ祭の様子

（出典：那須烏山市商工観光課）

表 2-12 那珂川流域市町村のイベント

県	市町村	年中行事
茨城県	水戸市	梅まつり みとの日 桜まつり つつじまつり あじさいまつり 水戸黄門まつり 萩まつり 菊花展 アートタワーみと 磨節全国大会 水戸太神楽 大串ささらばやし 大野のみろくばやし
	ひたちなか市	阿字ヶ浦海岸花火大会 ひたちなか祭り花火大会 那珂湊海上花火大会 みなとフェスタ（八朔祭り） みなと産業祭
	那珂市（旧那珂町）	なかひまわりフェスティバル 八重桜まつり いい那珂フェスティバル 月見の会 静峰ふるさと公園イミネーション 那珂市産業祭 静峰ふるさと公園雪まつり 那珂のひなまつり 額田まつり 秋の例大祭・静神社
	常陸大宮市	ふるさと祭り おおみや あゆの里祭り やまとが宿芋煮会 やすらぎの里公園さくら祭り 美和ふるさと祭り ひたち大宮夏祭り 西塩子の回舞台 長倉七夕まつり 鶯子祇園祭 上小瀬の祇園祭 花立星まつり ひたち大宮辰ノロさくら祭り 北斗星新そばまつり
	笠間市	笠間神社菊祭り ふるさと友部まつり 町民文化祭 夏祭り（八雲神社の祇園祭 平神社の祇園祭） 六所神社大祭 泉ばやし 灯籠念仏 惡態祭り
	茨城町	茨城町音頭 あんば祭り
	城里町	源太踊り 徳蔵大師祭
	大洗町	花火大会 八朔祭 菊祭り
	那須塩原市	湯けむりマラソン全国大会 川崎大師厄除不動尊例祭 塩原温泉感謝祭 福渡たなばたまつり 塩原温泉夏祭り 塩原朝市物語 ギャアてい火まつり 塩原温泉古式湯まつり 塩原温泉まつり 八幡宮例祭夜祭り 三恩人感謝祭 高原大根・もみじまつり 高尾忌角イルミネーション 奉納女将もちつき祭 三本木獅子舞 木綿畑新田太々神楽 穴沢獅子舞 高林獅子舞 木綿畑本田獅子舞 百村百堂念佛舞 那須波切不動尊火祭り 黒磯神社天王祭・茅の輪くぐり 笠岩神社祭礼 黒磯市民盆踊り 那須野ふるさと花火大会 板室温泉祭礼 峰葉師大祭 那須野巻狩まつり さわやか高原マラソン大会 花市 常盤ヶ丘墓前祭 開こん記念祭 さくら・つじまつり あやめ・あじさいまつり 西那須野ふれあいまつり 乃木神社例大祭 産業文化祭 大山元帥墓前祭 嶽山第根神社例大祭 上塙原古代獅子舞 中塙原平家獅子舞 関谷の城獅舞 上大賞の城獅舞
栃木県	大田原市	太子祭 大田原藩主墓前祭 那須神社春季大祭 雅楽奉納（正淨寺） 八童神社例大祭 さくら祭り 那須神社例大祭 屋台まつり 与一まつり 子育て地蔵尊夏まつり 佐久山花火大会 灯篭流し 成田山夏祭り大祭 那須与一公墓前祭 大田原神社例大祭 上石上温泉神社例大祭（城獅舞奉納） 与一の里大田原産業文化祭 大田原マラソン大会 大塚繩引き 光丸山祭礼 紫陽花まつり 温泉神社獅子舞 温泉神社太々神楽 両郷礪上神社 太々神楽 芭蕉の里新春マラソン 全国佛句大会
	さくら市	花市 どんど焼き 今宮神社節分祭 光明寺感満不動尊縁日 芋串観音縁日 さくら市夏祭り さくら市サマーフェスティバル喜連川花火大会 八坂神社祭り 龍光寺とうみぎ観音縁日 今宮神社例大祭 星宮神社代々岩戸神楽 菊花展 今宮神社大公孫樹祭り（ライトアップ事業） 喜市 喜連川イルミネーション
	矢板市	木幡神社例大祭（百物揃え） ともなりまつり 矢板かはらマラソン大会 高原山トライアスロン大会 つじまつり ふるさとまつり納涼祭踊り ともなり文芸まつり 太々神楽（境林） 岩戸神楽 八坂祭 どんど焼き はしか地蔵縁日
	那須烏山市	山あげ祭 加茂神社例大祭 いかんべ祭 三箇塙の天祭 興野ささら獅子舞 宮原觀世流 太々神楽 下境佐々良獅子舞
	那須町	桜まつり 那須ヨサコイ祭り 北条の獅子舞 那須高原こいのぼり祭 開山祭 御神火祭 教伝地蔵尊縁日 大沢の獅子舞 那須高原朝市 八雲神社例大祭 那須高原へこまつり なすっこまつり 伊王野盆踊り大会 聖天祭 花火大会 一つ榊の獅子舞 那須九尾まつり 那須温泉神社例大祭 那須高原菊花展 伊王野霞ヶ岡神社祭 黒田原神社例大祭 那須岳（茶臼岳）閉山祭 半俵寒寂仏 花市 節分祭 時庭の神楽 那珂川北部渓流釣り解禁
	茂木町	河井のささら
	塩谷町	さくらフェスタ in 大平崎 花の祭典 ふるさと納涼祭 しおや湧水の里マラソン大会 風見神楽 寺工事の獅子舞 道下の獅子舞 上平の大杉ばやし
	那珂川町	三和神社のどんど焼き 新町の花市 馬頭公園の桜まつり 静神社例大祭のたけのこ祭 小砂焼春の陶器市 霧ヶ岳山村文化体験村のなのはな祭り 竹芸展 那珂川・幕川の鮎解禁ぶどう園 天皇祭 温泉神社山車 やな 納涼祭 三和天祭 諏訪神社のささら舞 道の駅感謝祭 温泉神社秋例祭 菊花大会 小砂焼登窯祭 商工祭 そば祭 鶯子山上神社夜祭 ゆりがねの湯感謝祭

（出典：各市町村 HP）

② 観光資源

那珂川流域は上流では温泉や牧場、遊園地などレジャー施設、中流では自然を楽しむキャンプ場などの施設、下流では水戸市内を中心に歴史や文化を学ぶことができる施設など、数多くの観光資源が存在する。表 2-13 に那珂川流域の観光資源を示す。

表 2-13 那珂川流域市町村の観光資源

県	市町村	観光資源
茨城県	水戸市	偕楽園 好文亭（偕楽園内） 義烈館 弘道館 保和苑 水戸芸術館 茨城県立歴史館 彰考館 德川博物館 茨城県近代美術館 水戸市立博物館 水戸市植物公園 水戸市内原郷土史義勇軍資料館
	ひたちなか市	虎塚古墳 十五浪穴 湊御殿の松 養賓閣跡 山上門 反射炉跡 水門帰帆 中生代白亜期層 観濤所 酒面磯崎神社の自然林 比觀亭跡 ふるさと懐古館 武田氏館 国営ひたち海浜公園 阿字ヶ浦海水浴場 平磯海水浴場 姥の懐マリンプール 馬渡はにわ公園
	那珂市	静峰ふるさと公園 一の闇のため池親水公園 茨城県植物園熱帯植物館 鳥獣センター 茨城県きのこ博士館 森のカルチャーセンター 宮の池公園 なかLucky FM公園（那珂総合公園） 阿弥陀寺 一乗院 引接寺 鹿島神社 須田神社 弘願寺・くすぐり地蔵 駒形神社 静神社 正覚寺 上宮寺 常福寺 蒼龍寺 昆盧遮那寺 不動院 三嶋神社 文殊院（戸村観音） 鰐勝院 龍昌院 鳳神社
	常陸大宮市	西部総合公園 辰ノ口親水公園 パークアルカディア 陰陽山森林公園 三王山自然公園 御前山青少年旅行村 やすらぎの里公園 花立自然公園 大宮自然公園 大賀ファミリー公園 常陸大宮市運動公園 甲申社 雷神山にある横穴群 西方寺 歴史民俗資料館 籠岩 鏡岩 御城展望台 陰陽神社 蒼泉寺 義民本橋次左衛門の碑 百観音自然公園 鶯子山上神社 三浦杉 諏訪神社本殿 日向神社 乗蓮院 種生院 誕生寺 法専寺 常弘寺 松吟寺 高長寺 江畔寺 江畔寺 立野神社 阿弥陀院 御前山ダム
	笠間市	笠間工芸の丘 春風萬里荘 田中嘉三記念館 笠間稲荷美術館 笠間稲荷神社 西念寺 常陸国出雲大社 真淨寺の物見櫓 笠間城跡 つつい公園 石の百年館 石切り山脈 笠間芸術の森公園 匠工房笠間（茨城県産業指導所） スカイロッジ 隠沢観音 壇家住宅 五雲の椿 安居の千日堂 普賢院本堂 岩間囃子 滝入不動堂 宍戸藩陣屋表門 子忍びの森 羽梨山神社
	茨城町	涸沼自然公園 広浦公園 親沢公園 上ノ山古墳 大戸のサクラ 宝塚古墳 福性寺と飯沼城跡 勘十郎堀 円福寺 小幡城跡 小幡北山埴輪制作遺跡 神谷古墳群 水戸浪士の毛塚 木村屋住宅
	城里町	金剛院歌碑 石塚城跡 那珂西城跡 青山神社 小坂神社 小松寺 平重盛の墓 ふれあいの里 ホロルの湯 藤井川ダム グリーン桂うぐいすの里 山びこの郷 仏国寺・奥の院 小勝のカヤ 伊藤益荒・伊藤斎宮（水戸天狗党）自刃の碑
	大洗町	大洗マリンタワー アクアワールド・大洗 大洗くわく科学館 幕末と明治の博物館 大洗海洋博物館 大洗美術館 大洗磯前神社 願入寺 磯節発祥の地の碑 磯節踊り子の碑 大洗荒磯太鼓 巖船の夕照 子の日ヶ原の碑 村山暮島の碑
	那須塩原市	塙原もの語り館 天皇の間記念公園 関谷郷土資料館 奥塙原オートキャンプ場 大沼公園 もみじ谷大吊橋 回顧の吊橋 竜化の滝 沼ヶ原湿原 乙女の滝 旧青木家那須別邸 鳥野目河川公園オートキャンプ場 那珂川河畔公園 那須疏水公園 黒磯公園 晩翠橋 黒磯郷土館 日新の館 鳥ヶ森公園 那須野が原公園 那須野が原博物館 深山ダム 板室温泉 三斗小屋 温泉 三斗小屋宿跡 妙雲寺ぼたん園 塙原自然研究路 小太郎ヶ淵 新湯爆裂火口跡 八方ヶ原 千本松牧場 TEPCOランド塙原 逆杉 源三窟 木の葉化石園 ハンターマウンテン塙原
	大田原市	大田原城址 大田原神社 光真寺 与一の墓 黒羽観光やな 黒羽城址公園 五峰の湯 ザゼン草群生地 寒井観光余一やな 大雄寺 高館城跡 那須神社 芭蕉公園 芭蕉の館 羽田沼 笠石神社（那須国造碑） 下侍塚古墳 上侍塚古墳 御亭山緑地公園 なかがわ水遊園 なす風土記の丘湯津上資料館 雲巖寺
	さくら市	荒川水辺公園 御用堀 寒竹園 もとゆ温泉 喜連川スカイタワー 喜連川城温泉 早乙女温泉 お旗塚古墳 今宮神社 御前城跡 滝沢家住宅 青銅不動明王坐像（光明寺） 寛方・タゴール平和公園 川原石塔婆群 西導寺 地蔵菩薩坐像 勝山パークリッジ 勝山城址
栃木県	矢板市	川崎城跡 城の湯温泉 宮川渓谷 寺山赤滝・小滝 山縣有朋記念館 荒井家住宅 寺山ダム 矢板武記念館 八方ヶ原 長峰公園 御前原城跡 県民の森 寺山観音寺 木幡神社 生駒神社 沢観音寺 塙竈神社 寺山鉱泉 小滝鉱泉 赤滝鉱泉 コリーナ矢板 矢板温泉
	那須烏山市	龍門の滝 花立峠 やまびこの湯烏山 山あげ会館 龍門ふるさと民芸館 国見の棚田 烏山大橋 烏山城跡 大平寺 稲積神社 守山キャンプ場 八溝県民休養公園（四季の森） 安樂寺ハハケ所塙場公園 大金太子堂 那須家・大田原家の墓（芳朝寺） ばんこ穴 こぶしが丘温泉 寿乃湯 大金温泉
	那須町	那須岳 南ヶ丘牧場 那須七湯 殺生石 遊行柳 芦野城址 伊王野城址 八幡のツツジ群落 三森家住宅 那須温泉神社 那須歴史探訪館 那須ハイランドパーク りんどう湖ファミリー牧場 那須どうぶつ王国 マウントジーンズスキーリゾート那須 那須温泉ファミリースキー場 各種の美術館・博物館
	茂木町	大瀬キャンプ場 旧羽石家住宅 大瀬観光やな 能特院細川家墓所 馬門の滝 城山公園茂木城跡 茂木手工芸館 ツインリンクもてぎ 十石河川公園 木造丈六阿弥陀如来坐像（安樂寺） 茂木焼窯工 大村彫刻の森美術館 茂木焼窯元 小貫古木群 仏頂山・高峰山遊歩道 真岡鐵道のSL
	塩谷町	尚仁沢湧水 尚仁沢はーとらんど 水と親しむ児童公園 高原山 観音橋 佐貫観音 籠岩大滝 自然休養村センター 川霧の湯 町営やまゆりの湯 権現の湯
	那珂川町	鷺子山上神社 なす風土記の丘資料館小川館 土蔵ギャラリー金子懐古館 馬頭広重美術館 いわむらかずお絵本の丘美術館 もうひとつの美術館 カタクリ山公園 小川ふるさと館 キャンブランなまづっこ まほろばの湯 ゆりがねの湯 那珂川温泉
	市貝町	ゆったリランド市貝温泉健康保養センター 伊許山キャンプ場 真岡線SL ゴルフ場 観音山梅の里

（出典：各市町村 HP）

2.4 自然公園の指定状況

那珂川流域の市町村において、数多くの自然、動植物が保護・保全の対象となっている。

表 2-14 那珂川流域の自然公園指定状況

指定	名称	関係市町村	面積 (ha)	指定年月日
国	日光国立公園	西郷村、那須塩原市、矢板市、日光市、塩谷町、那須町	全 体 : 114,908 福島県 : 7,329 栃木県 : 103,634	S9.12.4 (日光地区) S25.9.22 (区域拡張: 藤原、塩原、那須地区) S60.9.5 (那須、塩原地域一部削除) H9.9.18 (日光地域一部拡張、一部削除) H19.8.30 (小瀬地域削除) R3.4.9 (日光地域一部変更)
	尾瀬国立公園	日光市	全 体 : 37,222 栃木県 : 1,147	H19.8.30
茨城県	奥久慈県立自然公園	常陸大宮市	10,410	S28.3.20
	御前山県立自然公園	常陸大宮市、城里町	7,380	S29.7.19
	大洗県立自然公園	水戸市、ひたちなか市、茨城町、大洗町、鉾田市	2,543	S26.7.13
	笠間県立自然公園	笠間市、城里町	3,969	S30.11.7
	吾国愛宕県立自然公園	笠間市	3,835	S49.11.21
	水戸県立自然公園	水戸市	300	S26.7.13
栃木県	尾瀬国立公園	日光市	1,147	H19.8.30
	前日光県立自然公園	日光市	10,982	S30.3.25
	益子県立自然公園	益子町、茂木町	2,136	S30.3.1
	那珂川県立自然公園	那須烏山市、茂木町、市貝町	3,001	S42.3.10
	八溝県立自然公園	那須町、大田原市、那珂川町	6,918	S46.7.20

(出典：日本の国立公園（環境省 HP）、国定公園・県立自然公園の制度（茨城県 HP）、自然公園の管理（栃木県 HP）、福島県の自然公園及びビジターセンター（福島県 HP）)

表 2-15 那珂川流域の生息地等保護区指定状況

名 称	所在地	設定年 月 日	面 積 (ha)	指定地の概要	保護に関する方針（概要）
羽田ミヤコタナゴ 生息地保護区	栃木県 大田原市	H6.12.26	60.6 (12.8)	栃木県北部の那須野ヶ原扇状地東部に位置する丘陵地。羽田沼と同沼を水源とする農業用水路及びそれらを取り巻く水田等。	ミヤコタナゴの生息には、用水路の水質・形質維持及び餌条件、産卵母貝であるマツカサガイの生息の確保が必要。当該区域における各種行為は、用水路の水質・形質等の生息環境への影響について特に配慮が必要。マツカサガイの捕獲を規制。

(出典：環境省生物多様性センター 生物多様性情報システム)

表 2-16 那珂川流域の国指定及び県指定自然環境保全地域指定状況

指 定	地域名	所在地	指 定 年月日	備 考
茨城県	大佐飛山	那須塩原市	S56. 3. 16	ブナ・オオシラビソ天然林
	清音寺	城里町	S52. 2. 3	クロムヨウラン、クロガネモチの自生
	小松寺	城里町	S52. 2. 3	マルバダケブキ、ミヤマウズラ、オオムラサキ、ムヨウラン
	釜上	ひたちなか市	S54. 12. 1	ラセイタソウ、イワタバコ群落、タブノキ、ヒイラギ、第三系凝灰岩質砂岩
	樅山	鉾田市	S57. 2. 22	タブノキ、スダジイ、モミ等、常緑樹林、チャバネセセリ等豊富な昆虫類
	玉沢	鉾田市	S57. 2. 22	タブノキ、スダジイ、ヤブツバキ等常緑樹林、ウラギンシジミ、セスジイトンボ
	地割	常陸大宮市	S60. 8. 1	安山岩質集塊岩、ウチョウラン、ヒナラン、ムギラン、ミヤマスカシユリ
	野口池	笠間市	H1. 11. 27	ヤマドリゼンマイ、ウラジロ、ハッショウトンボ、オゼイトトンボ
栃木県	鶯子山	那珂川町	S48. 8. 31	トチバニンジン、イワウチワ群落、センダイハグマ等
	篠根	那須塩原市	S48. 8. 31	モミ
	親園	大田原市	S48. 8. 31	ミヤコタナゴ等
	多田羅沼	市貝町	S48. 8. 31	サギソウ、トキソウ、湿生植物
	佐貫観音	塙谷町	S48. 8. 31	チヨウゲンボウ、マツバラン
	七千山	那須塩原市	S48. 8. 31	ハイマツ、ハクサンシャクナゲ等、ミズナラ、ツキノワグマ、シカ等
	鮎田	茂木町	S51. 1. 31	トウキョウサンショウウオ
	東高原	矢板市	S51. 1. 31	ブナ、ミズナラ
	松倉山	茂木町、那須烏山市	S52. 7. 19	クマガイソウ、イワマツ等
	焼森山	茂木町	S52. 7. 19	イワタバコ、クマガイソウ等
	小塙	那須烏山市	S52. 7. 19	荒川の河蝕地形
	南高原	塙谷町	S53. 9. 19	ヒノキ
	袈裟丸山	日光市	S57. 6. 22	コウシンソウ、ニホンカモシカ、ホンシュウジカ等、爆裂火口
	湯西川	日光市	S61. 1. 21	トチノキ、クロベ、テン、ツキノワグマ、カモシカ等
	尚仁沢	矢板市、塙谷町	H4. 12. 18	ブナ、ミズナラ、モミ等の天然林、年間をとおして一定の湧水現象
	弁天沼	日光市	H11. 3. 31	サギソウ、カキツバタ、カラカネイトトンボ等
	下川井	那須烏山市	H27. 2. 24	シモツケコウホネ、ミズタカモジ、メダカ、ニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル等
	小代	日光市	H28. 3. 29	シモツケコウホネ、マツカサガイ

(出典：自然環境保全地域（環境省 HP）)

表 2-17 那珂川流域の鳥獣保護区特別保護地区指定状況

指定	所在地	名 称	面 積 (ha)	期 間
福島県	西郷村	西郷特別保護地区	149	R25. 10. 31迄
茨城県	城里町	御前山特別保護地区	82	R2. 11. 1～R12. 10. 31
	笠間市	佐白山特別保護地区	31	R3. 11. 1～R13. 10. 31
	茨城町、大洗町、鉾田市	涸沼特別保護地区	935	H26. 11. 1～R16. 10. 31
	日光市	日光特別保護地区	3,438	R5. 11. 1～R15. 10. 31
栃木県	那須塩原市、日光市	塩原特別保護地区	147	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	大田原市	雲巖寺特別保護地区	23	H29. 11. 1～R9. 10. 31
	矢板市	高原山特別保護地区	221	H30. 11. 1～R10. 10. 31
	日光市	袈裟丸山特別保護地区	204	R6. 11. 1～R16. 10. 31
	那須塩原市、那須町	那須みやま特別保護地区	1,925	R4. 11. 1～R14. 10. 31

(出典：令和7年度（2025年度）茨城県鳥獣保護区等位置図、令和7年度（2025年度）鳥獣保護区等位置図（栃木県）、栃木県内鳥獣保護区一覧（栃木県 WEB）、令和7年度（2025年度）鳥獣保護区等位置図（福島県 WEB）)

表 2-18 那珂川流域の鳥獣保護区指定状況

指定	所在地	名称	面積 (ha)	期間
福島県	西郷村	西郷	931	R25. 10. 31迄
茨城県	水戸市	千波	1, 300	R5. 11. 1～R15. 10. 31
	水戸市、城里町	水戸	1, 500	H29. 11. 1～R9. 10. 31
	水戸市、城里町	大塚池	270	R6. 11. 1～R16. 10. 31
	水戸市、笠間市	内原	566	R3. 11. 1～R13. 10. 31
	ひたちなか市	ひたち海浜公園	453	R2. 11. 1～R12. 10. 31
	那珂市	那珂	1, 280	R5. 11. 1～R15. 10. 31
	常陸大宮市	大宮	890	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		ガンマーフィールド	140	H29. 11. 1～R9. 10. 31
	常陸大宮市、城里町	御前山	1, 990	R2. 11. 1～R12. 10. 31
	笠間市	佐白山	557	R3. 11. 1～R13. 10. 31
		友部	724	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		愛宕山	807	R7. 11. 1～R17. 10. 31
	鉾田市	鉾田	600	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		北浦	800	H29. 11. 1～R9. 10. 31
	鉾田市、茨城町、大洗町	涸沼	2, 072	H26. 11. 1～R16. 10. 31
栃木県	那須塩原市	千本松	836	R6. 11. 1～R16. 10. 31
		烏ヶ森	186	R3. 11. 1～R13. 10. 31
		大佐飛山	2, 323	H30. 11. 1～R10. 10. 31
		赤田	111	H29. 11. 1～R9. 10. 31
		戸田調整池	28	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		塩原ダム	430	H30. 11. 1～R10. 10. 31
		乃木公園	28	R1. 11. 1～R11. 10. 31
	那須塩原市、日光市	塩原	854	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	那須塩原市、那須町	六斗地	79	R2. 11. 1～R12. 10. 31
	那須塩原市、那須町	那須みやま	11, 970	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	大田原市	雲巖寺	258	H29. 11. 1～R9. 10. 31
		黒羽	345	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		琵琶池	165	R1. 11. 1～R11. 10. 31
		龍城公園	11	R3. 11. 1～R13. 10. 31
		那須神社	33	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		那須スポーツパーク	47	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		羽田	110	H30. 11. 1～R10. 10. 31
	大田原市、矢板市	籌川	78	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	大田原市、那須町	八溝	1, 088	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	さくら市	さくら南小学校	4	R3. 11. 1～R13. 10. 31
		勝山城跡公園	13	R6. 11. 1～R16. 10. 31
		喜連川	31	R7. 11. 1～R17. 10. 31
	さくら市、那須烏山市	八溝県民休養公園	915	R3. 11. 1～R13. 10. 31
	矢板市	高原山	852	H30. 11. 1～R10. 10. 31
		川崎城跡公園	11	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		木幡	2	R6. 11. 1～R16. 10. 31
		寺山観音寺	3	H28. 11. 1～R8. 10. 31
	那須烏山市	烏山	1, 173	H29. 11. 1～R9. 10. 31
		那珂川国民休養地	30	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		江川小学校	135	R3. 11. 1～R13. 10. 31
	那須烏山市、茂木町	松倉山	15	R1. 11. 1～R11. 10. 31

表 2-19 那珂川流域の鳥獣保護区指定状況

指定	所在地	名称	面積 (ha)	期間
栃木県	日光市	日光	21,792	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		五十里	946	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		大沢	1,850	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		栗山小中学校	12	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		袈裟丸山	204	R6. 11. 1～R16. 10. 31
		湯西川	589	H29. 11. 1～R9. 10. 31
		奥鬼怒	1,277	H30. 11. 1～R10. 10. 31
		小百小学校	28	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		弁天沼	2	R4. 11. 1～R14. 10. 31
	那須町	矢ノ目ダム	459	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		芦野・伊王野	325	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		芦野小学校・遊行柳	32	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		那須街道	138	R6. 11. 1～R16. 10. 31
		千振湖	257	H29. 11. 1～R9. 10. 31
	塩谷町	塩谷	1,155	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		佐貫観音	20	H29. 11. 1～R9. 10. 31
		飯岡	21	R2. 11. 1～R12. 10. 31
		斗光ヶ丘	15	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		船生西小学校	2	H30. 11. 1～R10. 10. 31
		大平崎公園	72	R1. 11. 1～R11. 10. 31
	那珂川町	薺利	8	R7. 11. 1～R17. 10. 31
		城間	45	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		馬頭	300	R1. 11. 1～R11. 10. 31
		那珂川町青少年旅行村	210	R5. 11. 1～R15. 10. 31
		鶯子山	25	H30. 11. 1～R10. 10. 31
	市貝町	小貝小学校	223	R4. 11. 1～R14. 10. 31
		小貝中央小学校	60	R1. 11. 1～R11. 10. 31
		琴平山	27	H28. 11. 1～R8. 10. 31

(出典：令和7年度（2025年度）茨城県鳥獣保護区等位置図、令和7年度（2025年度）鳥獣保護区等位置図（栃木県）、
栃木県内鳥獣保護区一覧（栃木県HP）、令和7年度（2025年度）鳥獣保護区等位置図（福島県HP）)

表 2-20 那珂川流域の特定植物群落一覧

名 称	所在地
大洗海岸の常緑広葉樹林	大洗町
御前山の暖帯林	城里町
小松の常緑樹林	城里町
常北町の暖帯林	城里町
笠間市の常緑樹林	笠間市
岩間町の自然植生	笠間市
鷺子山の植生	常陸大宮市
仏頂山の植生	笠間市
難台・吾国山の植生	笠間市
那珂湊市釜上の植生	ひたちなか市
伊王野のケヤキ林	那須町
佐久山のヤマクボスゲ群落	大田原市
雨巻山のブナ林	茂木町
那須茶臼岳のヒメイワカガミ	那須町
三本槍岳頂上のハイマツ、チシマザサ群集	那須塩原市、那須町
矢沢林道のチドリノキ、オクノカンスゲ群集	那須塩原市
大佐飛山のオオシラビソ・コメツガ・チシマザサ群集	那須塩原市
大佐飛山のコメツガ・ハイマツ群集	那須塩原市
県民の森のクロヒナスゲ群落	矢板市
塩原大沼のミズバショウ	那須塩原市
釈迦ヶ岳のコメツガ・イラモミ林	日光市、那須塩原市
鷺子山の希少植物	那珂川町
筍根のモミ天然林	那須塩原市
東高原のブナ・ミズナラ群落	矢板市
松倉山の暖帯照葉樹林	那須烏山町、茂木町
焼森山のイワタバコ・クマガイソウ群落	茂木町
南高原のヒノキ天然林	塩谷町

(出典：第5回自然環境保全基礎調査 特定植物群落調査報告書（環境庁自然保護局 生物多様性センター）、自

然環境調査 Web-GIS（環境省自然環境局 生物多様性センター）

3. 流域の社会状況

3.1 土地利用

那珂川流域は全般に山地が多く、上流域では源流周辺では天然広葉樹林や天然針葉樹林がほとんどを占めるが、扇状地の高原地帯では開発された地域が広く見られ、畑等の農地を中心に入為的な利用が多い。中流域は平地部が狭くなり、那珂川を取り囲む天然混交林の山林が多くなっている。下流域では沿川低地の水田、周辺台地上の畑が多く、さらに市街地等の発達で人為的利用が多くなっている。

流域の利用状況について見てみると、宅地等の市街地が約 11%、水田や畑地等の農地が約 27%、山林等が約 62%である。

表 3-1 那珂川流域の土地利用面積

(単位 : km²)

流域面積	市街地	農地	山林等
3,270	344 (11%)	890 (27%)	2,036 (62%)

(出典：令和 3 年度（2022 年度）国土数値情報)

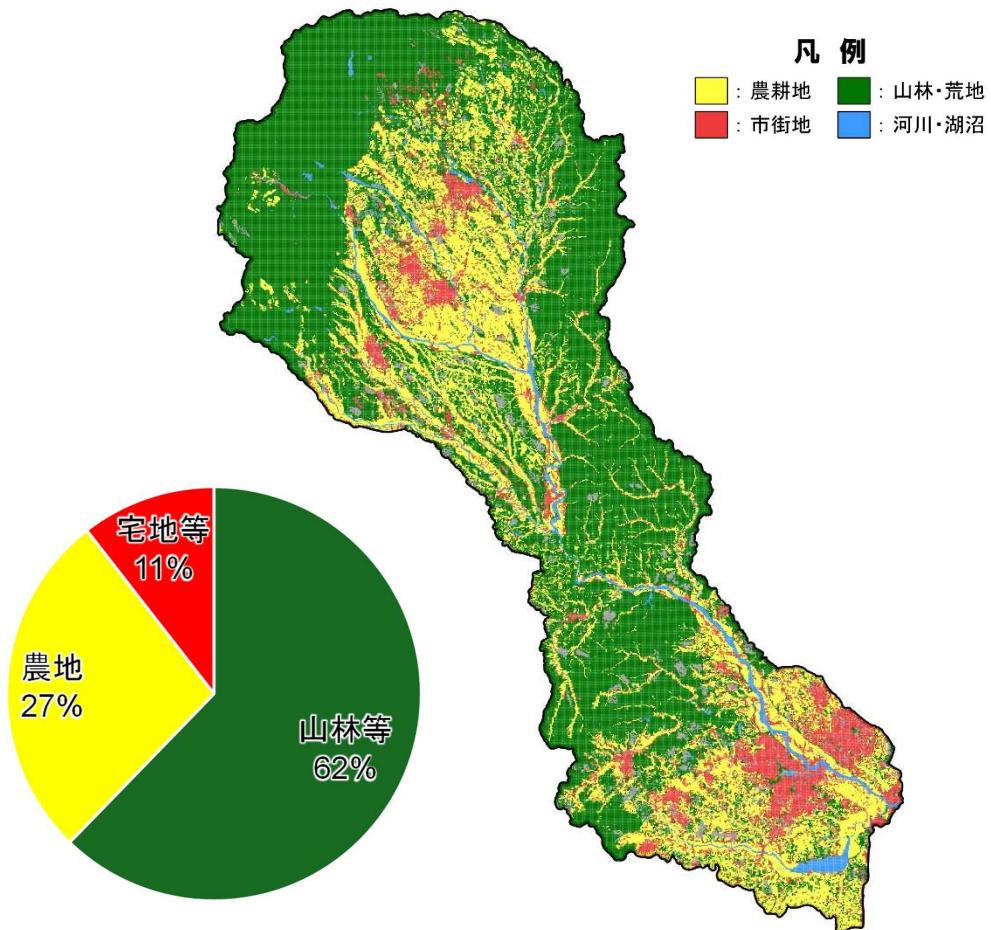


図 3-1 那珂川流域の土地利用の割合

3.2 人口

那珂川流域関連市町村の総人口は増加傾向にあり、この傾向は工場が進出し観光リゾート産業が発展する上流域やもともと商業や工業が盛んな下流域の市町村に見られるが、一方で中流の市町村では減少傾向にある。

那珂川流域関連市町村の人口の推移を表3-2、図3-2に示す。

表3-2 那珂川流域関連市町村の人口変化（平成7年（1995年）～令和2年（2021年））

(千人)	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
福島県	83	85	85	84	82	80
栃木県	485	489	485	480	460	438
茨城県	722	729	729	729	718	704
総数	1,290	1,303	1,299	1,293	1,260	1,223

（出典：国勢調査）

注：那珂川流域関連市町村の人口を計上するに当たり、最新の国勢調査結果が出ている平成12年（2000年）当時の流域関連市町村のデータを対象とした。

上流域、中流域、下流域に含まれる市町村はそれぞれ下記のとおりである。また（）内は最近行われた合併した市町村のうち、人口を計上している旧市町村名である。

- ・ 福島県：白河市（白河市、表郷村、東村、大信村）、西郷村
- ・ 栃木県：那須塩原市（黒磯市、西那須野町、塩原町）、大田原市（大田原市、湯津上村、黒羽町）、さくら市（氏家町、喜連川町）、矢板市、那須烏山市（南那須町、烏山町）、日光市（日光市、今市市、足尾町、栗山町、藤原町）、那須町、茂木町、塩谷町、那珂川町（馬頭町、小川町）、市貝町
- ・ 茨城県：水戸市（水戸市、内原町）、ひたちなか市、那珂市（那珂町、瓜連町）、常陸大宮市（御前山村、大宮町、山方町、美和村、緒川町）、笠間市（笠間市、友部町、岩間町）、鉾田市（旭村、鉾田町、大洋町）、茨城町、城郷町（常北、桂村、七会村）、大洗町

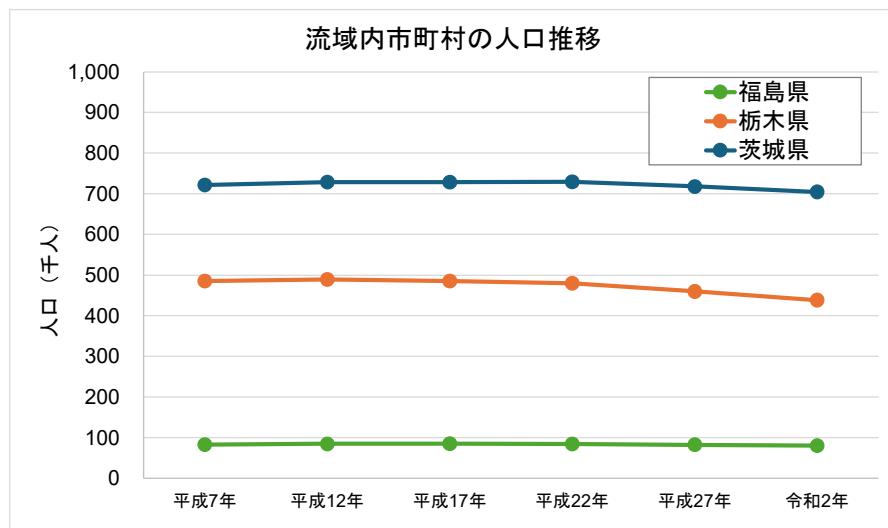


図3-2 那珂川流域関連市町村人口の推移

3.3 産業経済

那珂川水系の産業について、上流域ではもともと農業や酪農、観光業が主な産業であったが、近年では自動車関連や光学関連、ゴム製品などの工場が進出するなど、栃木県の工業拠点として大きな役割を果たしている。中流域では農業、林業、プラスチック加工等の小規模な工業が主な産業である。下流域は茨城県の商業・工業の重要な拠点である水戸市やひたちなか市を擁し、この地域の経済の基盤を成している。また、歴史・文化的な資源を利用した観光業や那珂湊や大洗などの漁港があり、漁業なども盛んである。

那珂川流域における産業別就業者数および割合の推移を表3-3、図3-3に示す。近年、那珂川流域では就業人口全体が減少傾向にある。第三次産業人口の割合は平成22年（2010年）までは増加傾向であったが、その後はほぼ横ばいで推移している。第一次、第二次産業人口の割合も近年はほぼ横ばいの傾向を示している。

表 3-3 那珂川流域の産業別就業者数

（単位：千人）

	第1次産業	第2次産業	第3次産業	合計
昭和50年（1975）	489	667	824	1,980
昭和55年（1980）	412	746	977	2,135
昭和60年（1985）	346	827	1,089	2,262
平成2年（1990）	273	918	1,236	2,427
平成7年（1995）	229	922	1,397	2,548
平成12年（2000）	196	878	1,449	2,523
平成17年（2005）	177	775	1,494	2,446
平成22年（2010）	138	701	1,446	2,285
平成27年（2015）	132	696	1,444	2,272
令和2年（2020）	118	662	1,291	2,071

四捨五入により一致しない場合がある

国勢調査（総務省統計局）

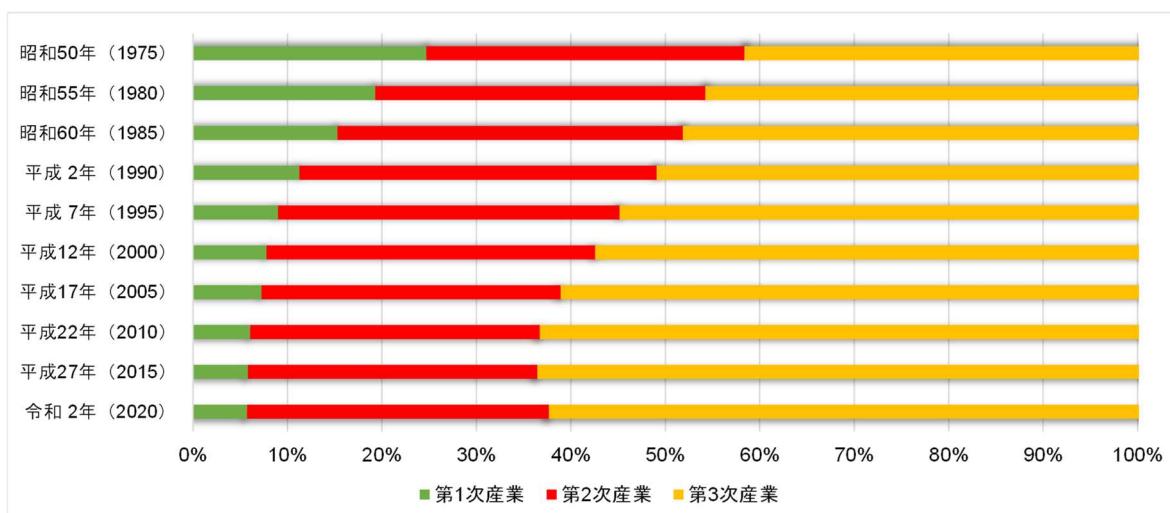


図 3-3 那珂川流域の産業別就業者数の割合

（出典：国勢調査昭和50年（1975年）～令和2年（2020年））

3.4 交通

那珂川流域には、那珂川沿いを南北に通る国道 123 号、293 号、294 号があり、首都圏や東北地方と結ぶ道路として重要である。下流域では常磐自動車道、国道 6 号、50 号、51 号、上流域では東北自動車道、国道 4 号が挙げられる。現在、内陸部を縦貫する北関東自動車道の整備も進んでおり地域間のネットワークが構成されている。

鉄道は、首都圏や東北地方を結ぶ重要な路線として機能している。上流域では東北新幹線とJR東北本線があり、下流域ではJR常磐線・JR水郡線が走っている。中流域にはJR烏山線や真岡鐵道、下流域にはJR水戸線や茨城交通線、鹿島臨海鉄道線があり、地域住民の足として大きな役割を果たしている。

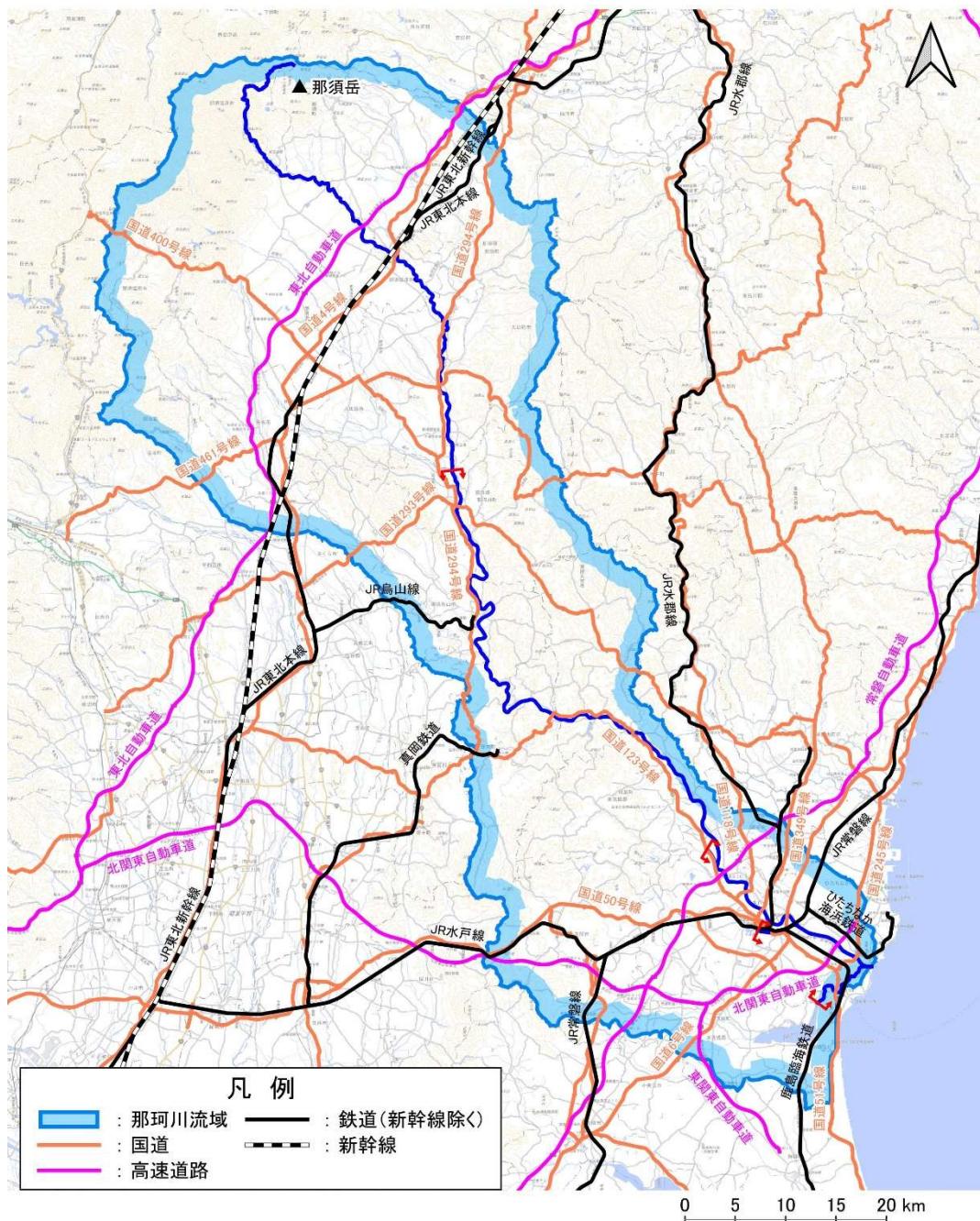


図 3-4 那珂川流域主要交通網図

4. 水害と治水事業の沿革

4.1 既往洪水の概要

那珂川は古くから、流域の人々を潤し豊かな生活の支えとなってきたが、同時に那珂川がもたらした洪水被害も計り知れない。

那珂川の洪水記録で最も古いのは、佐竹氏時代末期の慶長7年（1602年）のものである。

(1) 藩政時代の洪水

徳川藩政時代の大洪水としては、享保8年（1723年）、天明6年（1786年）が知られ、特に天明6年（1786年）の洪水が最大といわれる。城下の家屋の流出など被害は甚大で、天明3年（1783年）による凶作に追い打ちをかけるものとなった。

表 4-1 藩政時代の水害

		被　害　状　況
慶長7年	（1602年）	淨光寺門を浸す。
寛文10年10月	（1670年）	領内損耗8万余石。
◎ 享保8年8月	（1723年）	荒神橋・新寺橋欄干の上を高瀬舟が往来する。水戸下町は一面浸水。千波湖増水で1尺5寸（約45cm）の水深。淨光寺口の水深は慶長7年より3尺（約90cm）低かった。俗に卯年の洪水といわれた。
享保11年	（1726年）	（洪水）
享保13年7月	（1728年）	年に8度の洪水が続いた。7月8、9日の洪水は、卯月の洪水より、1尺6、7寸（約50cm）ほど低かった。
享保13年9月	（1728年）	9月2日にまた出水。享保8年に等しい大水。
享保15年9月	（1730年）	8月29日から9月1日にかけて洪水。享保8年よりやや多い。三之丸御殿が破損。那珂川で上流から流れて来る人家が見られた。
享保18年6月	（1733年）	（洪水あり、記録なし）
享保19年6月	（1734年）	那珂川大水、杉山土手崩れる。
寛保2年6月	（1742年）	轟橋石垣崩れる。
宝暦7年4月	（1757年）	（洪水）
宝暦7年5月	（1757年）	享保8年以来の大水。
宝暦7年6月	（1757年）	千波湖溢れる。
宝暦7年8月	（1757年）	千波湖溢れる。
宝暦12年4月	（1762年）	千波湖・那珂川洪水。
宝暦13年4月	（1763年）	（府下洪水）
安永7年	（1778年）	（洪水）
安永8年8月	（1779年）	那珂川氾濫、荒神橋・赤沼附近は軒端に浸水。下町ではほとんど浸水。枝川も全村没水。
安永9年6、7月	（1780年）	（洪水）
天明3年6月	（1783年）	那珂川氾濫、安永8年より2尺（約60cm）ほど高し。
◎ 天明6年7月	（1786年）	16日昼頃那珂川・千波湖が氾濫。崖崩れ、土手崩れ、家屋倒壊発生、杉山河岸半ば水没。那珂川の水位は、享保8年の水より、5尺高く、根本町でも6尺高、枝川で3尺高といわれる。水戸藩米倉浸水し、1万俵以上が被害。下町の水位は、1丈1、2尺（約3.6cm）になった。
天明8年	（1788年）	（洪水）
文化8年	（1811年）	（洪水）
文化9年	（1812年）	（洪水）
文政6年8月	（1823年）	那珂川洪水。
文政7年8月	（1824年）	天明6年以来の大水、一の町まで溢れる。
文政8年	（1825年）	（洪水）
文政12年	（1829年）	（洪水）
天保6年	（1835年）	（洪水）
天保9年	（1838年）	（洪水）
弘化3年	（1846年）	（洪水）
安政5年	（1858年）	（洪水）

注：◎は大洪水と伝えられている洪水。

（出典：建設省関東地方建設局常陸五十年史）

(2) 明治・大正・昭和初期の洪水

明治・大正時代の大洪水としては、明治23年（1890年）、明治29年（1896年）、明治35年（1902年）、明治43年（1910年）が知られ、特に明治43年（1910年）の洪水が最大といわれる。降雨総量は水戸測候所が明治30年（1897年）に開設されて以来という225.8mmに達し、連日の豪雨で青柳地点の水位は7.02mを記録、関東地方一帯で破堤、浸水が頻発した。また、昭和13年（1938年）の洪水は水戸市周辺で大規模な洪水被災があった。

表 4-2 明治～昭和初期の水害

年 月 (西 暦)	被 害 状 況
明治3年 7月 (1870年)	不明。
明治11年 8月 (1878年)	不明。
明治18年 10月 (1885年)	那珂川平常水位より6尺 (1.8m) 増す。勝田市田畠冠水。
明治20年 6月 (1887年)	勝倉で平常水位より1丈 (3m) あがる。
明治22年 9月 (1889年)	那珂川平常水位より1丈5尺 (4.5m) あがる。三反田字上瀬の堤防決壊。
明治23年 7～8月 (1890年)	那珂川で水位2丈余 (約6m) あがる。川筋は一面溢水。
明治25年 9月 (1892年)	青柳の水位7mを越える。
明治29年 9月 (1896年)	青柳の水位7.42m。海門橋（那珂湊）、那珂川橋（太田街道）、枝川の浜路橋流失。下市一帯、水戸駅まで浸水。
明治31年 9月 (1898年)	那珂川、千波湖氾濫。
明治32年 7月 (1899年)	不明。
明治35年 9月 (1902年)	那珂川水位6.24m。水戸で全壊89戸、半壊67戸。農作物の被害甚大。
明治40年 7月 (1907年)	那珂川、枝川で水位、1丈4尺 (4.2m) となる。
明治41年 7月 (1908年)	大雨。
明治41年 8月 (1908年)	那珂川で増水。3尺 (90cm) ほどあがる。
明治43年 8月 (1910年)	青柳で水位7.02m。水戸で床上浸水416戸、床下272戸。枝川で床上66戸、流出家屋3戸。
明治44年 7月 (1911年)	那珂川、千波湖氾濫。
大正2年 8月 (1913年)	枝川で水位1丈8尺 (5.4m)。畑作物被害甚大。
大正3年 8月 (1914年)	那珂川の水位2丈1尺余 (6.3m)。枝川の床上浸水70戸、浸水家屋100余戸。大洪水。
大正6年 9～10月 (1917年)	枝川で水位1丈3尺余 (約4m)。川田村で家屋倒壊49戸。
大正9年 5月 (1920年)	那珂川水位1丈5尺 (4.5m)。（大洪水）
大正9年 10月 (1920年)	那珂川水位1丈8尺 (5.4m)。早戸川氾濫。（大洪水）
大正9年 12月 (1920年)	那珂川の水位3尺余 (1m) 増水。
大正10年 9月 (1921年)	（洪水）
大正11年 2月 (1922年)	（大洪水）
大正11年 4月 (1922年)	早戸川堤防決壊。枝川で水位1丈5尺 (4.5m)。
昭和3年 8月 (1928年)	（洪水）
昭和4年 9月 (1929年)	那珂川増水1丈 (3m)。農作物被害甚大。
昭和5年 8月 (1930年)	（洪水）
昭和7年 11月 (1932年)	（洪水）
昭和9年 9月 (1934年)	（洪水）
昭和10年 9月 (1935年)	（洪水）
昭和13年 6月 (1938年)	6～7月にかけて、水戸市北部那珂郡柳河、川田、勝田各村の大部分が冠水。水府橋を除く5橋（千歳橋、那珂川大橋、万代橋、関戸橋、海門橋）が流出・沈下崩落。被災人数17,000人超。9月にも洪水被害起こる。

（出典：建設省関東地方建設局常陸五十年史）

(3) 昭和（戦後）以降の洪水

昭和（戦後）以降の大洪水としては、昭和22年（1947年）、昭和33年（1958年）、昭和36年（1961年）、昭和41年（1966年）、昭和61年（1986年）、平成10年（1998年）、平成23年（2011年）、令和元年（2019年）があり、近年でも頻繁に生じている。

表 4-3 昭和（戦後）以降の主な洪水（那珂川流域）

洪水発生年	西暦	原因	被害状況
昭和13年6、7月	1938年	台風	被災者数17,000人超、5橋流出・沈下
昭和16年7月	1941年	台風第8号	全半壊77戸、床上浸水2,478戸、床下浸水465戸
昭和22年9月	1947年	カスリーン台風	床下浸水 1,000戸 床上浸水 1,919戸
昭和33年7月	1958年	台風第10号	不明
昭和36年6月	1961年	台風第6号	床下浸水 49戸（栃木県）（茨城県内は不明） 床上浸水 10戸（栃木県）（茨城県内は不明）
昭和39年8月	1964年	台風第14号	浸水家屋被害なし
昭和41年9月	1966年	台風第26号	不明
昭和47年9月	1972年	台風第20号	床下浸水 9戸（うち栃木県 0戸） 床上浸水 2戸（うち栃木県 0戸）
昭和61年8月	1986年	台風第10号	床下浸水 2,815戸（うち栃木県 809戸） 半壊 85戸 床上浸水 4,864戸（うち栃木県 1,305戸） 全壊流失 25戸
平成3年8月	1991年	台風第12号	床下浸水 542戸（うち栃木県 325戸） 全壊流失 3戸 床上浸水 196戸（うち栃木県 31戸）
平成10年8月	1998年	台風第4号、停滞前線	床下浸水 400戸（茨城県） 床上浸水 411戸（茨城県）
平成11年7月	1999年	停滞前線	床下浸水 352戸（うち栃木県 284戸） 半壊 14戸 床上浸水 51戸（うち栃木県 20戸） 全壊流失 1戸
平成14年7月	2002年	台風第6号	床下浸水 26戸（うち栃木県 4戸） 床上浸水 16戸（うち栃木県 3戸）
平成23年9月	2011年	台風第15号	床下浸水 49戸 床上浸水 52戸
令和1年10月	2019年	令和元年東日本台風	床下浸水 313棟 半壊 786棟 一部損壊 765棟 床上浸水 91棟 全壊 116棟

※ 被害状況については、S36.6、S39.8、S47.9、S61.8、H10.8、H11.7、H14.7、H23.9、R1.10について
「水害統計」、S22.9は「水戸市水害誌」から記載。

(4) 昭和以降の著名洪水の概況

昭和以降における著名洪水の概況は以下のとおりである。

① 昭和 13 年（1938 年）洪水

6 月末小笠原西方から北上した台風は関東地方一帯に未曾有の豪雨をもたらした。那珂川流域では下流域の雨量が特に多く、水戸測候所では 59 時間で 491.6mm を記録した。

那珂川の水位が 7.55m という前代未聞の出水となり、水戸市近郊の村々の冠水のほか、5 つの橋梁の流出・沈下・崩落などにより鉄道を含む交通機関は途絶し、被災人数 17,000 人を数えた。この年 9 月にも台風による洪水が発生し、那珂川の水位は 8.46m と過去最高を記録した。雨量は多くなかったものの急激な増水により少なからぬ被害をもたらした。



▲昭和 13 年洪水の水戸市街地の様子

（出典：茨城新聞社写真記録茨城の 20 世紀）

② 昭和 16 年（1941 年）洪水

7 月 10 日から降り始めた雨は月末まで継続的に降り続き、総降雨量は 588.0mm に達した。那珂川は 13 日に最高水位 7.28m を記録していったん減水に転じたが、21～22 日に再び上昇を始め、23 日に渡里村水道浄水場で 10.4m、青柳で 8.23m を記録した。家屋の全壊 20 戸、流失 32 戸、床上浸水 2,478 戸の被害をもたらした。

③ 昭和22年（1947年）洪水

13日に沖ノ鳥島付近から北上したカスリーン台風は、房総半島をかすめて三陸沖に抜けたが、台風の接近に伴って寒気団が侵入し各地に降雨をもたらした。12日から15日までの総雨量は水戸で381.4mmであったが翌16日にかけて暴風雨にかわり3時間の降雨量197.5mmという水戸測候所の過去最大を記録した。那珂川は大出水となり、最高水位は水府橋で7.80mに達した。負傷者97名、全壊67戸、床上浸水1,919戸、床下浸水1,000戸の大災害となつた。



▲昭和22年9月洪水の様子（水郡線鉄橋付近）
(出典：常陸河川国道事務所資料)

④ 昭和33年（1958年）洪水

9月27日に神奈川県に上陸した台風第22号は、東京付近を経て下館、大子付近を相次いで通過し、最大風速は水戸で26m/s、筑波山で34m/s、雨量は茨城県南部で300mmを記録した。那珂川の最高水位は、野口で4.14m、水府橋で6.35mに達した。

⑤ 昭和36年（1961年）洪水

6月27日に四国沖で消滅した台風第6号により南方の湿った気流が日本上空に進入し、梅雨前線が活発化したため、四国、中国から関東に及ぶ広い範囲に豪雨をもたらした。いったん北上した梅雨前線が南下したことにより、那珂川流域は大雨となり、水戸で362mmを記録した。那珂川の最高水位は、野口で4.68m、水府橋で7.06m、最大流量は野口で4,339m³/s（計画高水流量5,200m³/s）であった。

⑥ 昭和41年（1966年）洪水

6月27日台風第4号の接近により関東地方全域に多量の降雨があり、水戸では229mmを記録した。那珂川の最高水位は、水府橋で7.10mに達した。

さらに9月には、台風第26号が勢力を弱めることなく日本に上陸したため、短時間に降雨が集中した。那珂川の最高水位は、野口で4.90m、水府橋で7.18mを記録した。

⑦ 昭和 61 年（1986 年）洪水

フィリピンの東海上に発生した台風第 10 号は、伊豆大島付近の海上で温帯低気圧となつたが、8 月 5 日 3 時には銚子の西を通り、9 時には水戸の東海上を通つて三陸沖に進み、栃木県東部から茨城県西部・北部を中心に関東地方全域に強い雨を降らせた。

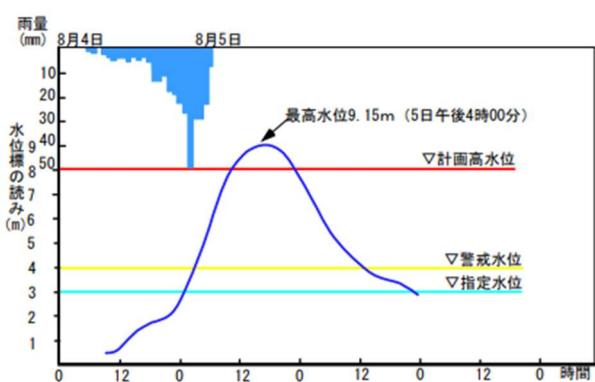
この台風により那珂川流域では大田原で 313mm、水戸で 186mm の総雨量を記録した。特に 1 時間に 30mm～40mm という集中豪雨なみの降雨を記録したことにより大出水となつた。

那珂川の水府橋地点の水位は、8 月 5 日 16 時 30 分には最高水位 9.15m を記録した。計画高水位（8.152m）を約 1m も越える未曾有の洪水となつた。

那珂川沿川の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて床上浸水 4,864 戸、床下浸水 2,815 戸であつた。



▲昭和 61 年洪水那珂川の氾濫（水戸市）
(出典：関東建設弘済会 昭和 61 年 8 月洪水 水害)



※雨量：大田原要観測所、水位：水府橋水位観測所

図 4-1 昭和 61 年 8 月洪水の降雨状況と
水府橋地点の水位



▲洪水によって流された家屋（那須烏市）



▲水没した水戸市街地の様子
(出典：関東建設弘済会昭和 61 年 8 月洪水)

⑧ 平成 10 年（1998 年）洪水

平成 10 年（1998 年）8 月 25 日南大東島の南東海上で発生した台風第 4 号は、26 日には中心気圧 960 ヘクトパスカルの中型で強い台風となり、30 日には八丈島の南南東約 350km に達した後、9 月 1 日には八丈島の南東に去った。この影響により、本州上の停滯前線の動きが活発化したうえ、南側に斜面が開いている栃木県北部の地形条件、台風の動きが遅かったことなども手伝い、記録的な大雨をもたらした。台風第 4 号に刺激された停滯前線により降り始めた雨は、8 月 26 日から 31 日まで栃木県北部を中心に降り続き、流域平均総雨量は 446mm、上流部大沢観測所では総雨量 1,091mm と年間雨量の約 4 分の 3 に達する記録的な大雨となった。大沢観測所の 1 時間当たり雨量は 103mm を記録した。この大雨により那珂川は急激に増水し、水府橋（水戸市）では 8 月 28 日 14 時には最高水位 8.43m（標高 7.42m）を記録した。8 月 29 日には一旦警戒水位を下回ったものの、上流域の強い雨による増水により 30 日には再び上昇して 8.20m となり、計画高水位を 2 度も上回る出水となった。この記録的な大雨により、那珂川沿川の各地では、堤防のない地区や低い土地での浸水が相次ぎ、水戸市を中心に昭和 61 年（1986 年）に次ぐ大水害となった。那珂川沿川の浸水被害は、茨城県で床上浸水 411 戸、床下浸水 410 戸であった。

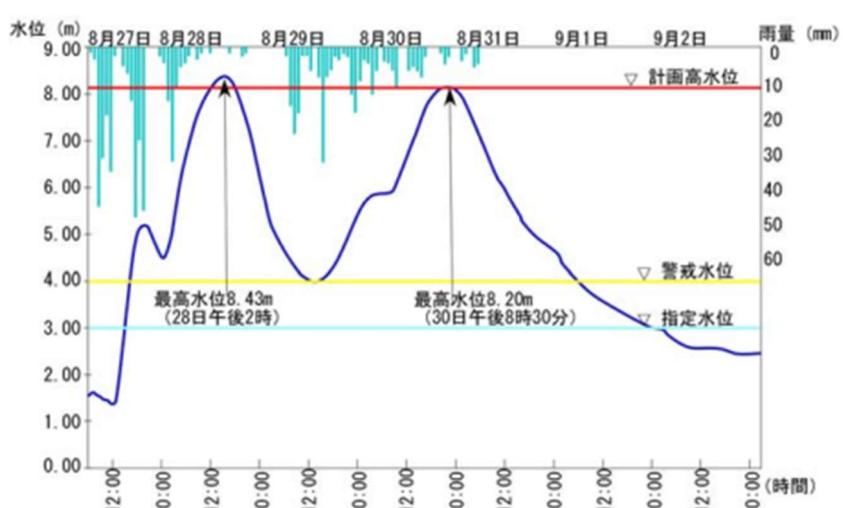


▲洪水によって流された寿橋（水戸市）



▲平成 10 年洪水那珂川の氾濫（水戸市）

（出典：常陸工事事務所平成 10 年 8 月那珂川洪水写真集）



※雨量：黒田原雨量観測所、水位：水府橋水位観測所

図 4-2 平成 10 年 8 月洪水の概況

⑨ 平成 11 年（1999 年）洪水

平成 11 年（1999 年）7 月洪水は、熱帯低気圧によるものであり、この熱帯低気圧は動きが遅く、10 日から 15 日の 6 日間にかけて関東地方に大雨をもたらし、板室で 463mm の総雨量を記録した。那珂川の最高水位は野口で 4.07m、水府橋で 7.69m に達し、警戒水位を超える出水となった。那珂川沿川の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて床上浸水 53 戸、床下浸水 350 戸であった。

⑩ 平成 14 年（2002 年）洪水

平成 14 年（2002 年）7 月洪水は、台風第 6 号によるものであり、那珂川流域では 9 日昼頃から上流域を中心に強い雨が降り始め、板室で 397mm の総雨量を記録した。那珂川の最高水位は水府橋で 8.24m に達し、計画高水位（8.15m）を超える洪水となった。那珂川沿川の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて床上浸水 16 戸、床下浸水 26 戸であった。

⑪ 平成 23 年（2011 年）洪水

平成 23 年（2011 年）9 月洪水は、台風第 15 号によるものであり、矢板で 301mm の総雨量を記録した。那珂川の最高水位は水府橋で 8.54m に達し、計画高水位（8.36m）を超える洪水となった。那珂川沿川の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて床上浸水 52 戸、床下浸水 49 戸であった。

⑫ 令和元年（2019年）洪水

令和元年（2019年）10月洪水は、台風第19号（令和元年東日本台風）によるものであり、矢板で戦後最多となる353mmの日雨量を記録した。那珂川の最高水位は小口で戦後最高の6.5mに達し、氾濫危険水位（5.50m）を超える洪水となった。また、野口で戦後最高の6.4mに達し、氾濫危険水位（4.50m）を超えるとともに、水府橋で戦後最高の9.7mに達し、計画高水位（8.36m）を超える洪水となった。

大臣管理区間では那珂川の堤防が3箇所で決壊したほか、那珂川流域の浸水被害は茨城県、栃木県合わせて全壊116棟、半壊786棟、一部損壊765棟、床上浸水91棟、床下浸水313棟であった。

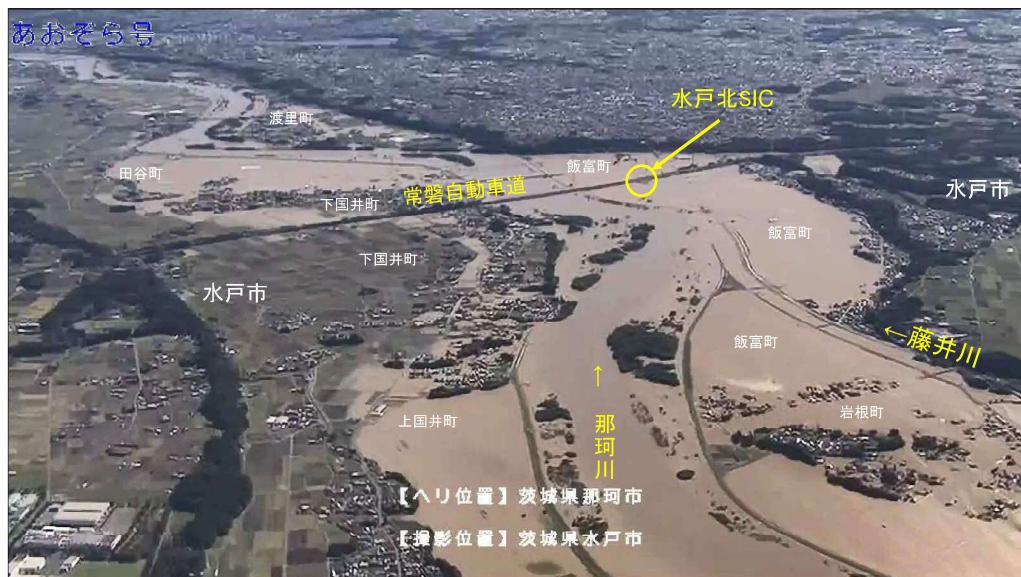


図 4-3 那珂川・藤井川合流付近の状況



図 4-4 那珂川における堤防決壊箇所

4.2 治水事業の沿革

(1) 江戸時代の治水事業

水害を未然に防ぐ治水土木事業は、水戸藩では寛永年間（1624年～1644年）から堤防工事を郡奉行・代官の任務とした。河川工事は川除普請と呼ばれたが、大規模な施工は行われていない。那珂川の工事でさえ、護岸工事が格別に施された形跡はみられない（「水戸市史」）。それに比べ利水工事は江戸時代より盛んに行われている。千波湖の水を利用した備前堀や江堰や溜池が多くつくられている。那珂川の木場堰、久慈川の辰之口堰、岩崎堰は三大江堰といわれる。その他水道や新田開発のための江堰や水路、運河等の工事が行われている。

(2) 治水事業の変遷

那珂川は古くから洪水を頻発し流域に被害をもたらしてきたが、昭和初期までは治水事業としてはほとんど見るべきものもなく、ひとたび洪水に見舞われると渦流となって流域に氾濫する状態であった。

① 那珂川本川

昭年 13 年（1938 年）洪水を契機として、昭和 16 年度（1941 年度）に那珂川の改修計画が国の直轄事業として樹立され、那珂川の治水事業がスタートした。昭和 17 年（1942 年）にはこの計画にもとづいて河口域の高水流下断面の増大のための拡張工事を開始し昭和 18 年度（1943 年）まで行ったが、第 2 次世界大戦の影響で本格的な工事には至らず、昭和 20 年度（1945 年）をもって工事を打ち切った。

昭和 21 年～25 年（1946 年～1950 年）には大宮町小場地先の掘削築堤工事、昭和 23 年～25 年度（1948 年～1950 年度）には水戸市三の丸築堤工事および細谷掘削築堤工事を、また昭和 26～29 年度（1951～1954 年度）にはひたちなか市枝川町地先の水衝部の護岸工事を、昭和 28 年～38 年度（1953 年～1963 年度）には那珂町地先築堤工事および水戸市飯富地先の掘削築堤工事を概成した。

昭和 36 年度（1961 年度）に開始した常北町上泉地先の築堤工事は、その後いったん中断し、昭和 59 年度（1984 年度）に再開した。

昭和 42 年（1967 年）からは下流部の工事に主眼を置き、千歳橋を中心として左岸水戸市国田地区から中河内地区までおよび右岸水戸市渡里地区から根本地区までの掘削築堤工事を暫定断面で開始した。

昭和 42 年度（1967 年度）からは、大臣管理区間の延長に伴う最上流地区の改修として、右岸栃木県那須郡小川町地区の小川上築堤工事、左岸那須郡馬頭町地区の三川又築堤工事を暫定断面で開始した。

新那珂橋下流については、昭和 47 年度（1972 年度）に小川下築堤工事を開始し、昭和 51 年度（1976 年度）までに権津川合流点付近まで暫定断面で概成した。

② 支川

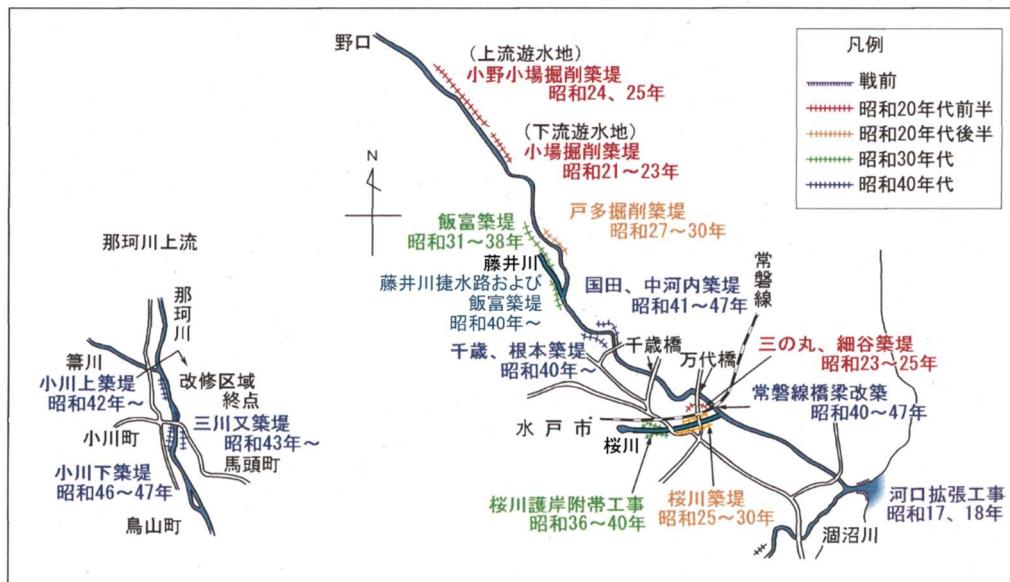
右支川桜川については、昭和 25 年度（1950 年度）に新桜川の開削、本川との合流点の引き下げ、本川からの逆流の緩和のための新桜川掘削築堤工事を開始し、昭和 30 年度（1955 年

度)には、捷水路開削・築堤工事等を概成、その後これに付随する護岸・樋管・橋梁等の関連工事を昭和51年度(1976年度)まで継続し概成した。

右支川藤井川については、昭和40年度(1965年度)に藤井掘削築堤工事を開始し、捷水路開削、護岸、橋梁等を施工した。

右支川田野川については、昭和47年度(1972年度)に左岸田野川掘削築堤工事を開始し、昭和58年度(1983年度)までに本川との合流点から上流の2条7号区間を暫定断面で概成した。

那珂川本川及び支川(大臣管理区間)の改修工事の変遷は以下の図4-5に示すとおりである。



(出典：建設省関東地方建設局常陸五十年史をもとに作成)

図4-5 改修工事の変遷

(3) 改修計画の変遷

① 昭和16年(1941年)改修計画

昭和16年(1941年)の改修計画の計画高水流量は、昭和13年(1940年)6月、7月洪水を基に基準地点野口において $4,300\text{m}^3/\text{s}$ (基本高水のピーク流量 $5,200\text{m}^3/\text{s}$ 、上流ダムにて $900\text{m}^3/\text{s}$ 調節)と定め、大場遊水地にて $200\text{m}^3/\text{s}$ 調節し、河口で $4,500\text{m}^3/\text{s}$ とした。

② 昭和28年(1953年)改修改定計画

昭和22年(1947年)9月洪水を基に改修計画が見直され、基準地点野口の計画高水流量を $5,200\text{m}^3/\text{s}$ (基本高水のピーク流量 $6,200\text{m}^3/\text{s}$ 上流ダムにて $1,000\text{m}^3/\text{s}$ 調節)とし、大場遊水地にて $200\text{m}^3/\text{s}$ 調節し、その下流河口までを $5,000\text{m}^3/\text{s}$ と定めた。

③ 昭和41年(1966年)工事実施基本計画

昭和39年(1964年)制定の河川法により、昭和41年(1966年)には「工事実施基本計画」を策定したが計画の基本は昭和28年(1953年)改修改訂計画と同様とした。昭和41年(1966年)3月には、大臣管理区間が栃木県那須郡黒羽町(現大田原市)及び湯津上村(現大田原市)までの39.0km延長され、合計99.5kmとなった。

④ 平成5年（1993年）工事実施基本計画改定

人口増加に伴う市街地の那珂川沿川への拡大など、流域の土地利用が変化する中で、昭和61年（1986年）8月に水戸市周辺をはじめとして被害が発生した事から、工事実施基本計画の見直しを行い、平成5年（1993年）4月に現計画を決定した。現計画では、治水安全度を1/100として、基本高水のピーク流量を基準地点野口において $8,500\text{m}^3/\text{s}$ とし、このうちダム及び遊水池により $1,900\text{m}^3/\text{s}$ を調節して河道への配分流量を $6,600\text{m}^3/\text{s}$ とした。

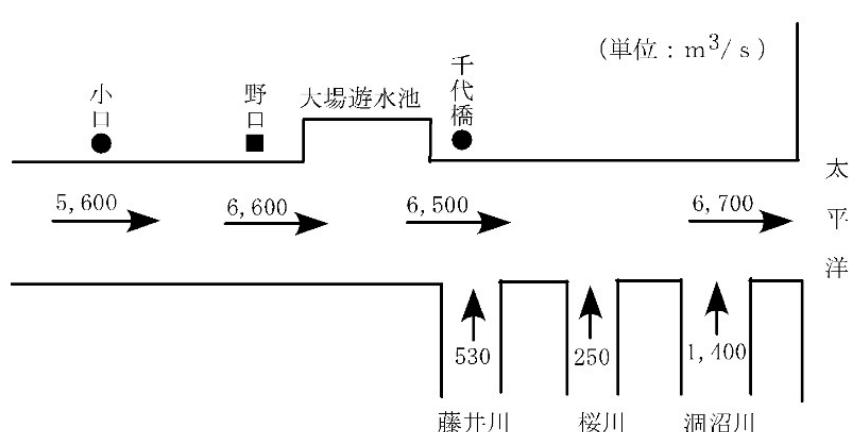
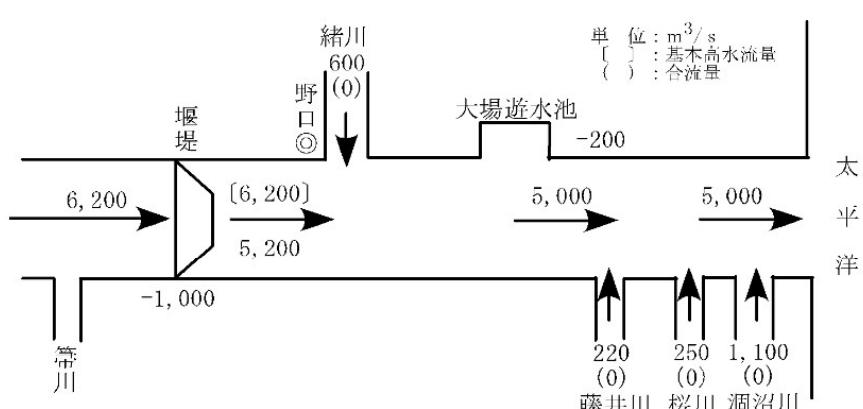
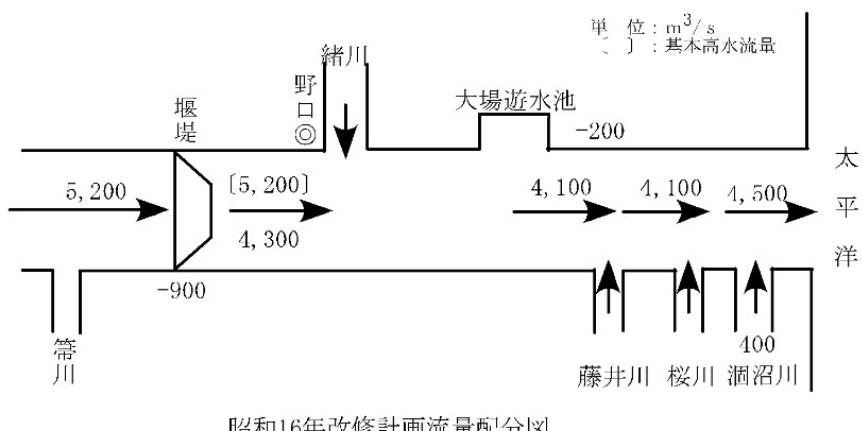


図 4-6 那珂川大臣管理区間流量配分の変遷

⑤ 平成 18 年（2006 年）那珂川水系河川整備基本方針

平成 18 年（2006 年）に策定した那珂川水系河川整備基本方針では、基準地点野口における基本高水のピーク流量については $8,500\text{m}^3/\text{s}$ とした。

計画高水流量は、洪水調節施設により洪水調節し、支川からの流入量を合わせ、小口地点において $5,700\text{m}^3/\text{s}$ 、基準地点野口において $6,600\text{m}^3/\text{s}$ 、湊大橋地点において $6,700\text{m}^3/\text{s}$ とし、河口まで同流量とした。

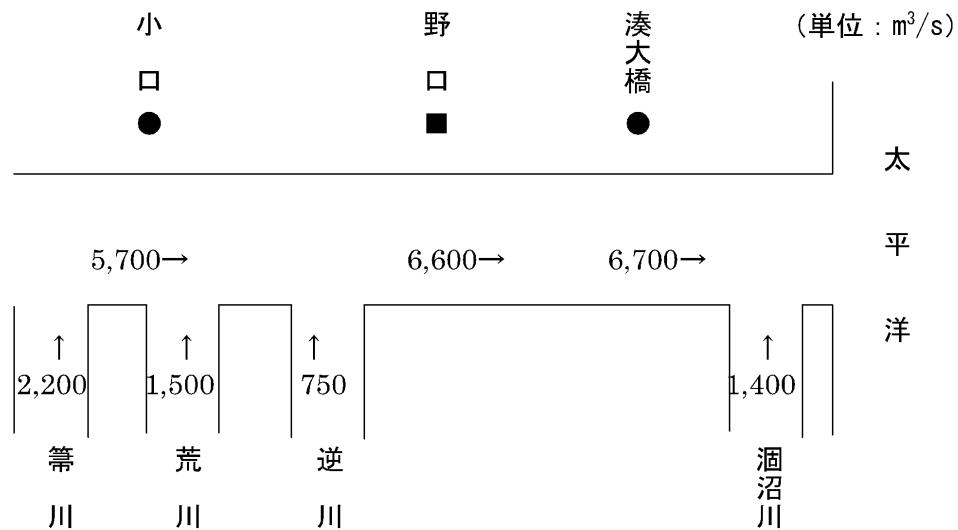
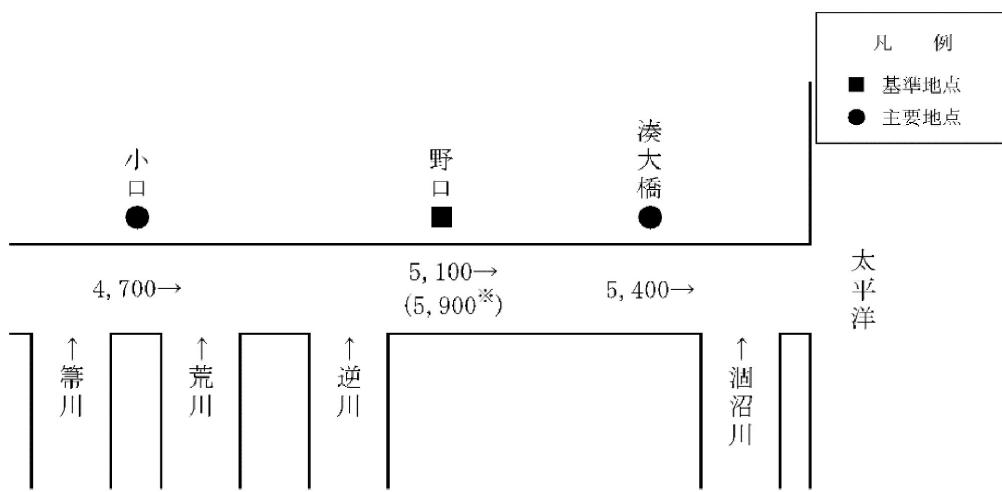


図 4-7 平成 18 年（2006 年）那珂川水系河川整備基本方針の流量配分

⑥ 平成 28 年（2016 年）那珂川水系河川整備計画

平成 28 年（2016 年）に策定した那珂川水系河川整備計画では、計画対象期間を概ね 30 年間とし、平成 10 年（1998 年）8 月洪水と同規模の洪水が発生しても災害の発生の防止又は軽減を図ることとした。

河川整備目標流量は、平成 10 年（1998 年）8 月洪水規模とし、基準地点野口で $5,100\text{m}^3/\text{s}$ （氾濫・ダムなし： $5,900\text{m}^3/\text{s}$ ）とした。



* 気象・水文データによる推定値

図 4-8 平成 28 年（2016 年）那珂川水系河川整備計画の流量配分

⑦ 令和 2 年（2020 年）那珂川水系河川整備計画（変更）

令和 2 年（2020 年）に変更した那珂川水系河川整備計画では、計画対象期間を概ね 30 年間とし、戦後最大洪水である令和元年（2019 年）10 月洪水と同規模の洪水が発生しても災害の発生の防止又は軽減を図ることとした。

地球温暖化に伴う気候変動による洪水流量の増加や高潮による潮位・海面水位の上昇等が懸念されることから、必要に応じて見直しを行う。

河川整備目標流量は、戦後最大洪水である令和元年（2019 年）10 月洪水規模とし、基準地点野口で $6,100\text{m}^3/\text{s}$ （氾濫・ダムなし： $7,400\text{m}^3/\text{s}$ ）とした。

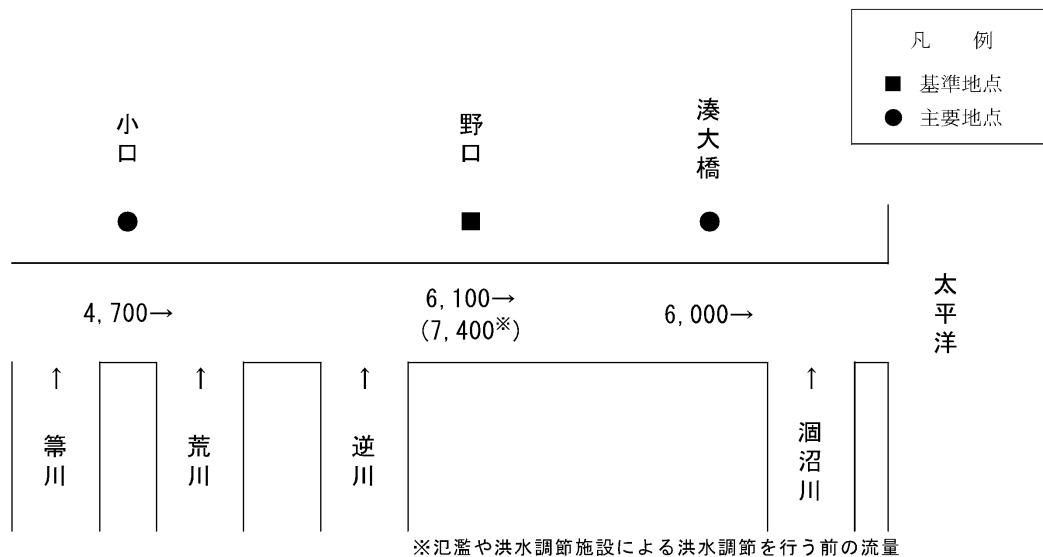


図 4-9 令和 2 年（2020 年）那珂川水系河川整備計画（変更）の流量配分

(4) 近年の治水事業

近年、昭和 61 年（1986 年）8 月の大出水、平成 10 年（1998 年）8 月の豪雨による水害など、戦後最大規模の浸水被害を受け、特に茨城県の商業・工業の重要な拠点である水戸市やひたちなか市は大きな被害を受けた。

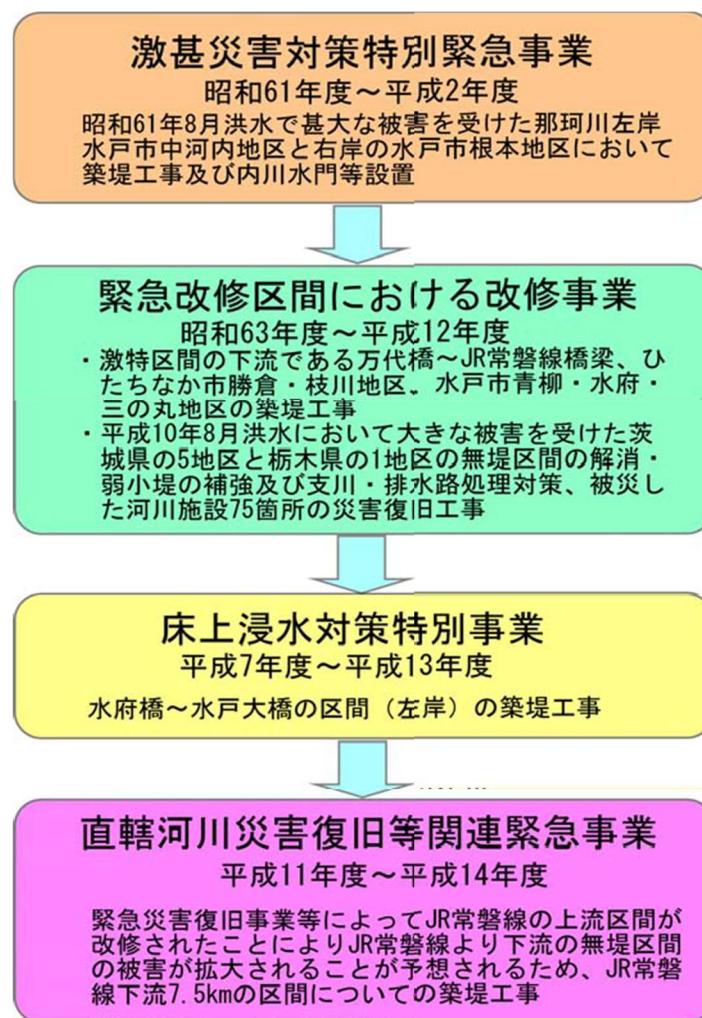
こうした状況から、那珂川では、「水害に強い川づくり」を重点施策とし、無堤部の早期解消をはじめとした治水施設の整備に力を注いでいる。近年行われた治水事業や現在進められている治水事業を以下に示す。

① 近年行われた主な治水事業

昭和 61 年（1986 年）8 月洪水及び平成 10 年（1998 年）8 月洪水により甚大な被害を受けた那珂川に対し、災害からの復旧や今後の治水対策のため、近年実施した治水事業について図 4-10 に示す。

その後、主に JR 常磐線下流の無堤地区の堤防整備を進めており、平成 24 年度（2012 年度）より大野地区、平成 26 年度（2014 年度）より勝田地区の築堤に着手している。

また、河積阻害となっていた橋梁の架け替えを進めてきており、JR 水郡線橋梁の架け替えが平成 25 年度（2013 年度）に完了、水府橋は平成 25 年度（2013 年度）に新橋が開通し、平成 29 年度（2017 年度）に旧橋の撤去が完了している。



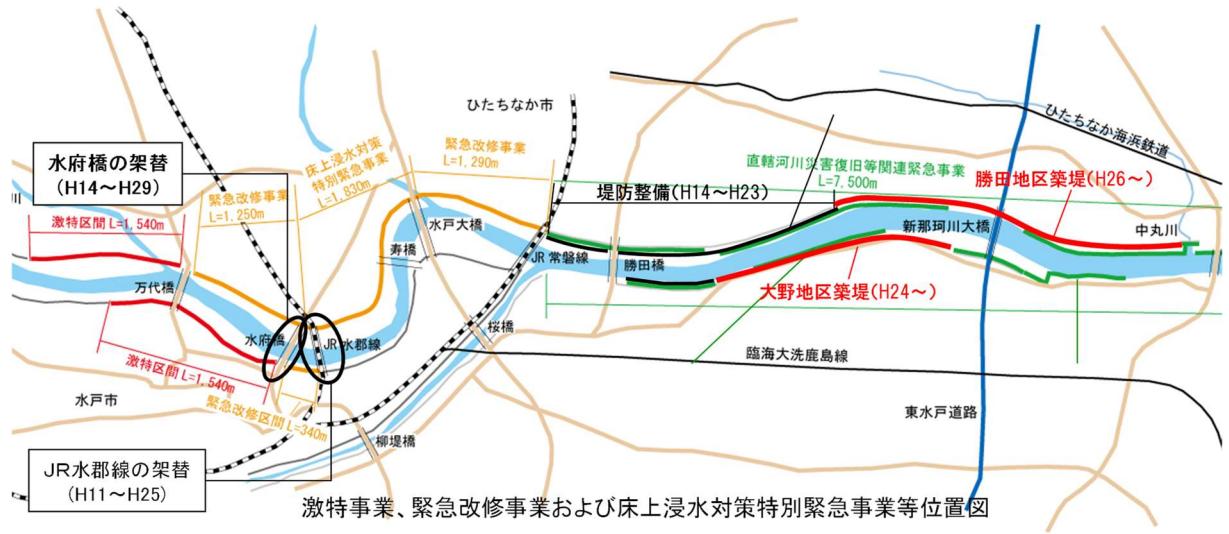


図 4-11 近年行われた那珂川下流部の治水事業の状況

② 現在進められている治水事業

令和元年東日本台風（2019年）により甚大な被害が発生した那珂川水系において、国、県、市町が連携し「那珂川緊急治水対策プロジェクト」を実施している。

現在、那珂川緊急治水対策プロジェクトで実施している治水事業は以下のとおりである。

- 堤防の整備

堤防が整備されていない区間や、標準的な堤防の断面形状に対して高さ又は幅が不足している区間について、築堤・堤防の嵩上げ・拡幅を行う。

現在、那珂川緊急治水対策プロジェクトでは、ひたちなか市勝田地区・常陸大宮市伊勢畑地区等で堤防整備を実施している。

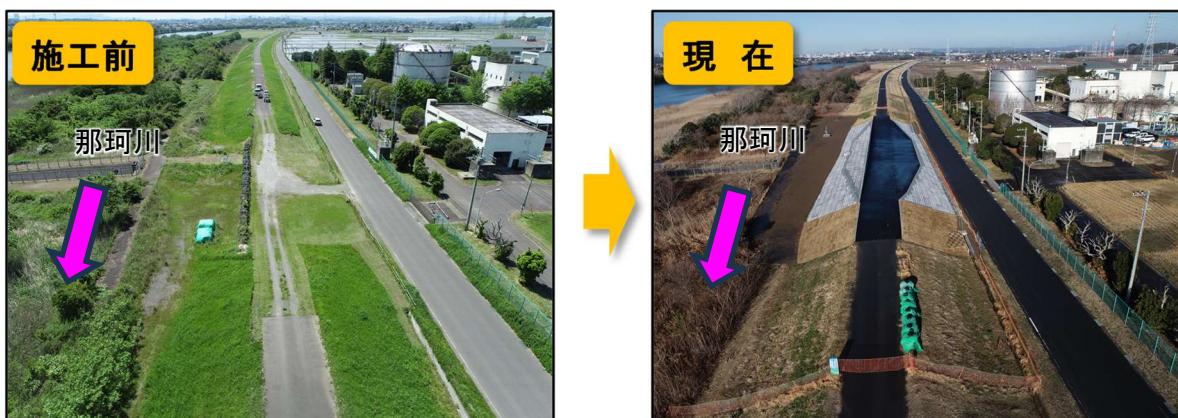


図 4-12 那珂川左岸ひたちなか市三反田地区における堤防整備状況

- ・ 河道掘削

洪水を安全に流下させるために必要な箇所等において、上下流バランスを考慮しつつ河道掘削を行う。

現在、那珂川緊急治水対策プロジェクトでは、ひたちなか市枝川地区・水戸市渡里地区などで樹木伐採が完了し、河道掘削を実施中である。



図 4-13 那珂川右岸 17k 水戸市渡里地区における樹木伐採

- ・ 遊水地

中流部及び下流部の洪水ピーク流量の低減を図るため、地形や現状の土地利用等を考慮した遊水地を整備する。

現在、那珂川緊急治水対策プロジェクトでは、常陸大宮市・城里町において大場遊水地を整備中である。

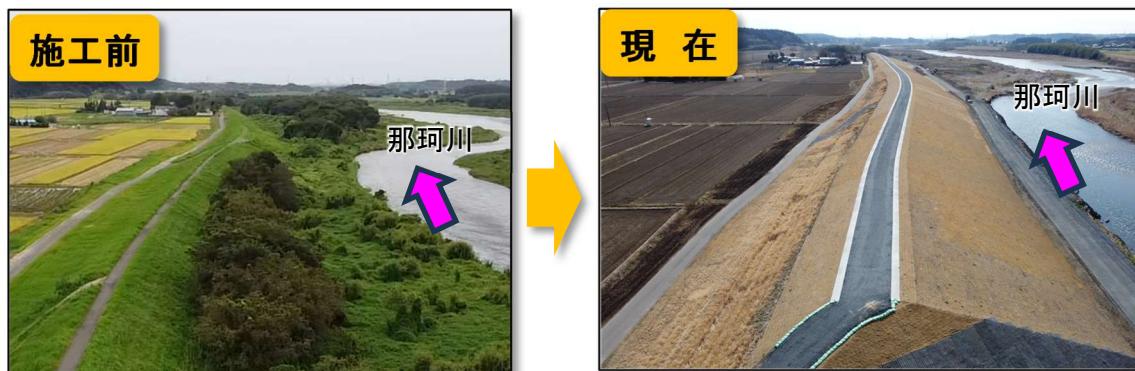


図 4-14 那珂川左岸 32k 大場遊水地囲ぎょう堤整備状況

5. 水利用の現況

5.1 水利用の現況

河川水の利用については、現在、農業用水として、約 28,900ha の農地でかんがいに利用されているほか、那須塩原市、水戸市、ひたちなか市等の水道用水、那珂市、ひたちなか市の工業用水として利用されている。また、水力発電としては、11箇所の発電所により、総最大出力約 160 万 kW の電力供給が行われている。

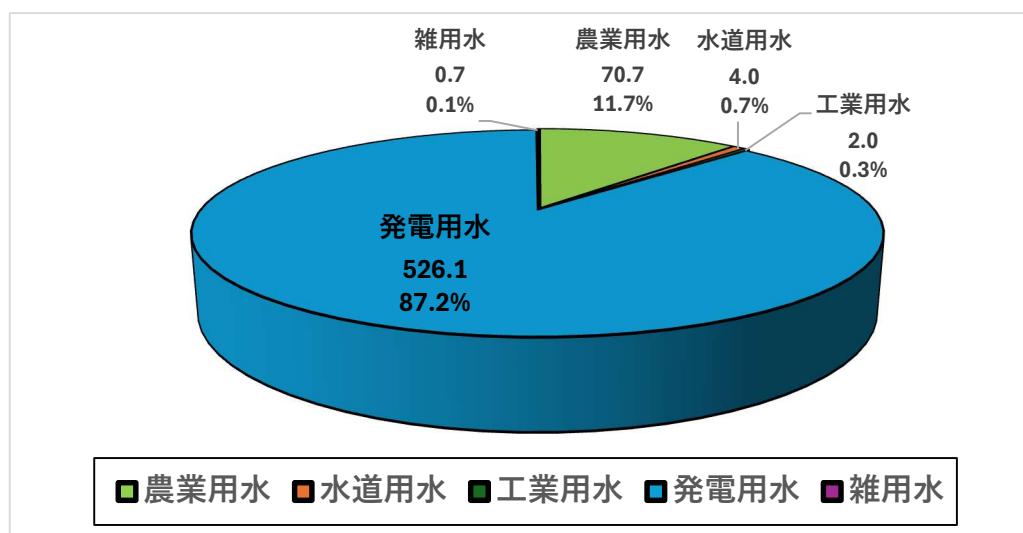
表 5-1 那珂川水系の水利用の現状

目的別	件数	水利権量計 (最大取水量) (m ³ /s)	水利権率 (全水利権)	備考
農業用水	696	70.7	11.7%	かんがい面積約 28,900ha
水道用水	23	4.0	0.7%	
工業用水	4	2.0	0.3%	
発電用水	11	526.1	87.2%	総最大出力約 1,612,400kW
雑用水	12	0.7	0.1%	
合計	746	603.6	100.0%	

※ 優行水利の計上は届出全件数で、水利権量及びかんがい面積は届出書の記載値とした
(令和 7 年 (2025 年) 3 月 31 日現在)

那珂川における水利用について、農業用水は最大取水量の合計で約 70.7m³/s が取水されている。なお、農業用水は季節等により利用量が大きく変動する。

都市用水は、水道用水として最大約 4.0m³/s、工業用水として最大約 2.0m³/s が取水されている。



(令和 7 年 (2025 年) 3 月 31 日現在)

※最大取水量は、大臣管理区間における許可水利権量と慣行水利権の取水量の合計

図 5-1 那珂川水系の水利用の割合

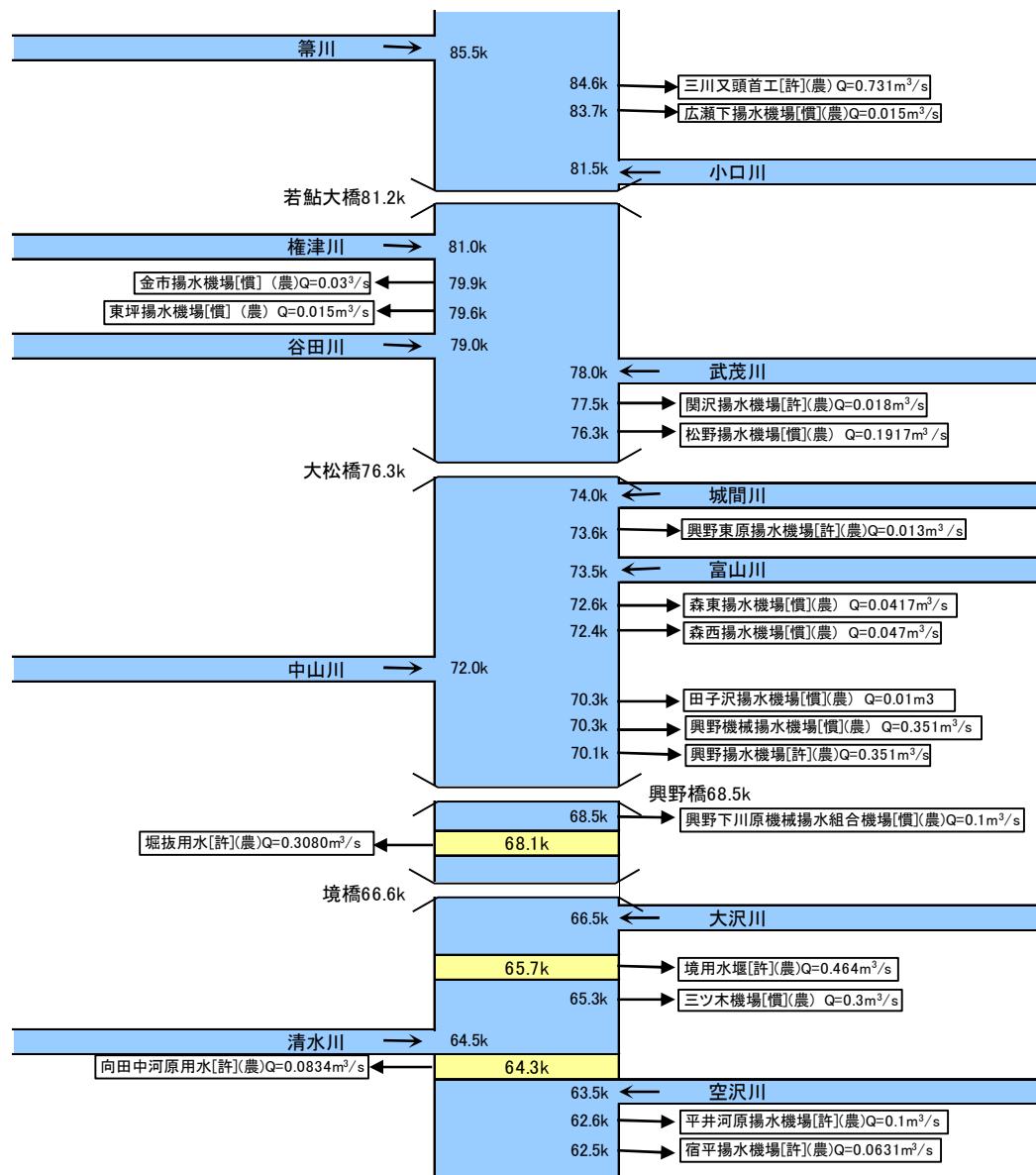


図 5-2 那珂川水理模型式図 (60.0k~85.5k)

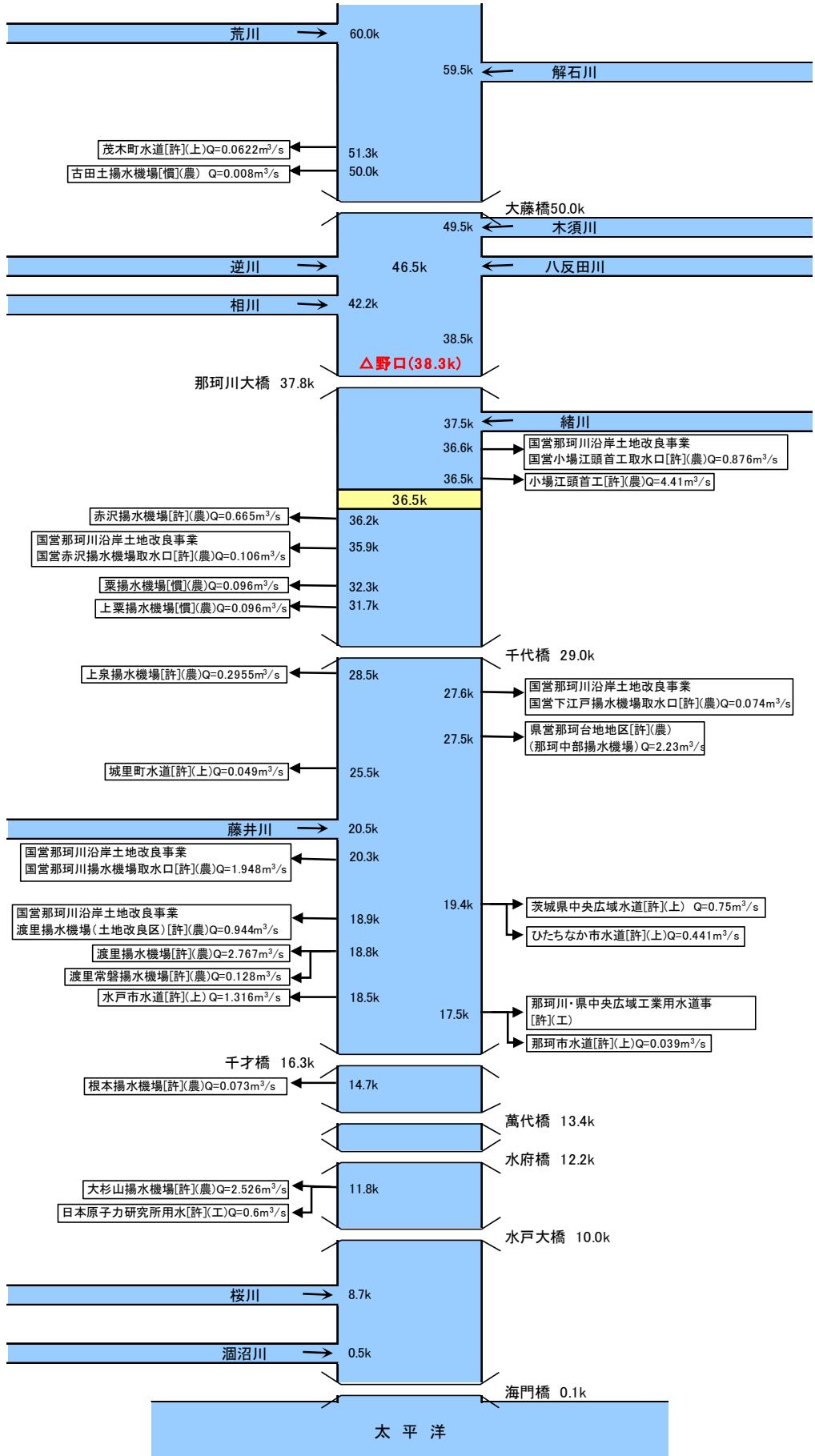


図 5-3 那珂川水理模型式図 (0.0k~60.0k)

5.2 渇水被害の概要

那珂川は、1~2 年に 1 回程度渇水が発生している。那珂川における近年の渇水の状況を図 5-4 に示す。那珂川下流部における渇水による取水障害は、塩分遡上によるものであるが、そのほとんどが 4 月末から 5 月初めに発生している。また、渇水発生時の具体的な対策は、取水制限や潮見運転上流地点からの振替取水等で対応されている。



図 5-4 既往の渇水被害発生状況

表 5-2 那珂川の過去の渇水の概況

年度	月	状況
S62	4～5	取水制限最大 農水30%、都市用水20% 5/1～5/4、5/6～5/14(13日間) 千波湖土地改良区 振替取水 5/2～5/14(13日間) 勝田市(現:ひたちなか市)上水 振替取水 4/22～5/14(23日間)
H2	8	勝田市(現:ひたちなか市)上水 15%の減圧給水 8/9～8/10(2日間)
H5	4～5	取水制限最大 農水30%、都市用水20% 4/23～5/3(11日間) 千波湖土地改良区 取水停止 期間不明 那珂川工業用水道・那珂町(現:那珂市)水道 潮見運転 4/23～5/1(9日間)
H6	4～5	取水制限最大 農水15%、都市用水10% 4/28～5/6(8日間) 千波湖土地改良区 振替取水 5/3～5/5(3日間) 那珂川工業用水道、那珂町(現:那珂市)水道 潮見運転 4/26～5/2(7日間) 水戸市水道 潮見運転 4/28～4/30(3日間)、渡里揚水機場 潮見運転 4/29(1日間)
H8	4～5	取水制限最大 農水15%、都市用水10% 4/28～5/2(5日間) 千波湖土地改良区 振替取水 4/27～5/3(7日間) 那珂川工業用水道、那珂町(現:那珂市)水道、水戸市水道 潮見運転 4/27～5/2(6日間) 渡里揚水機場 潮見運転 4/27～28、5/1～2(4日間)
	8	千波湖土地改良区 振替取水 8/13～24(12日間)
H9	4～5	千波湖土地改良区 潮見運転 4/17～25(9日間) 千波湖土地改良区 振替取水 4/26～5/14(20日間) 那珂川工業用水道、那珂町(現:那珂市)水道 潮見運転 4/27～29(3日間)
H13	4～5	取水制限最大 農水15%、工水10% 4/27～5/9(13日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/16～23(8日間) 千波湖土地改良区 振替取水 4/24～5/8(15日間) 那珂川工業用水道 潮見運転 4/25～4/29(5日間) 那珂町(現:那珂市)水道 振替取水 4/27～5/9(13日間)
H17	4～7	千波湖土地改良区 潮見運転 4/21～7/1のうち(51日間) 千波湖土地改良区 揚水不能 6/28(1日間)
H21	7	千波湖土地改良区 潮見運転 7/13～7/16(4日間)
H23	7	千波湖土地改良区 潮見運転 7/4～14、16～19(15日間) 千波湖土地改良区 揚水不能 7/15(1日間)
H25	5～6	塩水遡上の最大到達点(5/27満潮時)河口から16.0km地点(千歳橋16.3km) 千波湖土地改良区 振替取水 5/10～6/12のうち(16日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 5/6～7、16、6/6、9～11(7日間) 千波湖土地改良区 揚水不能 5/8(1日間)
H26	4～6	塩水遡上の最大到達点(4/29満潮時)河口から15.7km地点 千波湖土地改良区 振替取水 4/28～29、5/19(3日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/22～6/5のうち(25日間)
H27	6	塩水遡上の最大到達点(6/5満潮時)河口から18.1km地点 千波湖土地改良区 振替取水 6/1～3、5(4日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/28～8/13のうち(53日間) 千波湖土地改良区 揚水不能 5/31(1日間)
H28	4～8	塩水遡上の最大到達点(6/6満潮時)河口から18.2km地点 千波湖土地改良区 振替取水 6/3～9、8/2(8日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/21～8/14のうち(42日間) 千波湖土地改良区 揚水不能 8/15～8/16(2日間)
H29	3～	塩水遡上の最大到達点(5/26満潮時)河口から15.9km地点 千波湖土地改良区 振替取水 4/28～5/25のうち(6日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/25～7/25(58日間)
H30	4～8	塩水遡上の最大到達点(7/24満潮時)河口から18.1km地点 千波湖土地改良区 振替取水 7/1～7/5、7/19～7/27(14日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 4/21～8/7のうち(25日間)
H31 (R1)	4～	取水制限最大 農水15%、都市用水10% 4/27～5/22(20日間)(一時解除期間は除く) 塩水遡上の最大到達点(4/25満潮時)河口から19.9km地点 千波湖土地改良区 振替取水 4/23～6/7のうち(19日間) 千波湖土地改良区 潮見運転 5/6～6/2のうち(8日間)
R2	5	塩水遡上の最大到達点(5/14満潮時)河口から13.4km地点 千波湖土地改良区 潮見運転 5/12～5/18(7日間)
R3	1～5	塩水遡上の最大到達点(4/28満潮時)河口から17.6km地点 那珂川工業用水道 潮見運転 1/11～1/18、2/8～2/15(16日間) 千波湖土地改良区 振替取水 4/27～4/29、5/15のうち(4日間)
R4	4～7	塩水遡上の最大到達点(7/14満潮時)河口から14.6km地点 千波湖土地改良区 潮見運転 4/26～4/29、6/25～6/27、6/30、7/1～7/14(22日間)
R5	7～9	塩水遡上の最大到達点(8/1満潮時)河口から16.4km 千波湖土地改良区 潮見運転 7/27～7/29、8/2～8/9(11日間) 千波湖土地改良区 振替取水 7/30～8/1(3日間)
	12～6	塩水遡上の最大到達点(1/11満潮時)河口から17.6km地点 千波湖土地改良区 潮見運転 4/21～4/24、4/27～5/1、5/3～5/5、5/6～5/7、5/25～5/27、6/16(18日間)

(出典：常陸河川国道事務所資料)

5.3 水需要の動向

那珂川水系における将来の水需要の動向について、茨城県及び栃木県の水需給の見通しを以下に示す。

(1) 茨城県

① 水道用水

茨城県の生活用水においては「茨城県水道ビジョン（令和4年（2022年）2月）茨城県」で水需要の動向がまとめられている。

需要水量の推計フローにより算出した令和32（2050）年度の1日最大給水量は975千m³/日となり、令和元年度（2019年度）と、ほぼ同程度となる見込みとなる。

また、1日平均給水量では令和32（2050）年度の推計値は817千m³/日となり、同様に比較すると約4%減少する見込みとなる。

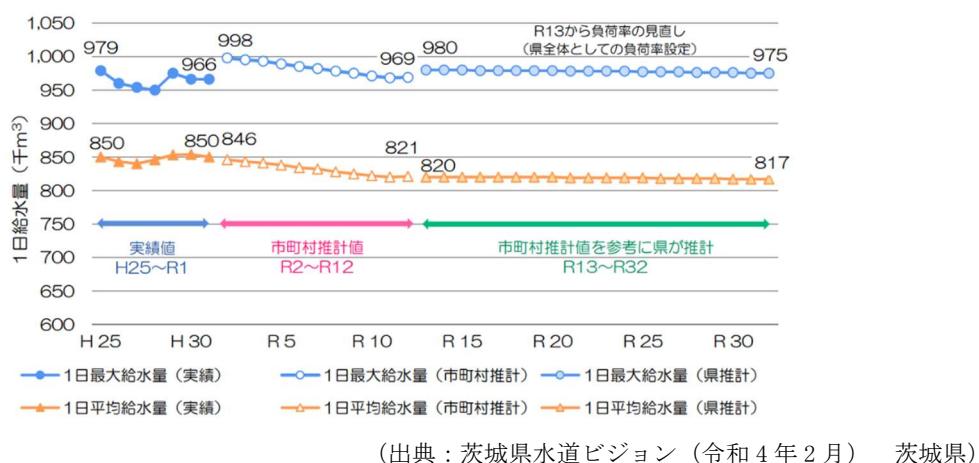
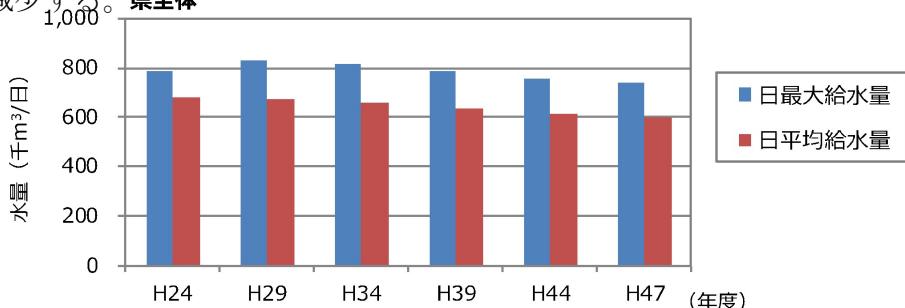


図 5-5 給水量の推移と将来予測（上水道事業及び公営簡易水道事業（県北））

(2) 栃木県

① 水道用水

栃木県の生活用水においては、「栃木県水道ビジョン（平成27年（2015年）3月）栃木県」で水需要の動向がまとめられている。給水人口の減少に伴い、一日平均給水量も減少傾向にあり、平成47年度（1972年度）の一日平均給水量は、県全体で601,968m³/日まで減少するものと予測しており、平成24年度（2012年度）実績（679,167m³/日）と比較して77,000m³/日程度減少する。**県全体**



(出典：栃木県水道ビジョン（平成27年3月） 栃木県)

図 5-6 水道水の需要予測

6. 河川の流況と水質

6.1 河川流況

那珂川の中流部の基準地点野口における流況は、図 6-1、表 6-1 に示すとおりである。

基準地点野口における近 75 ヶ年（昭和 24 年（1949 年）～令和 5 年（2023 年））の平均渇水流量は $24.69 \text{m}^3/\text{s}$ 、平均低水流量は $37.44 \text{m}^3/\text{s}$ である。

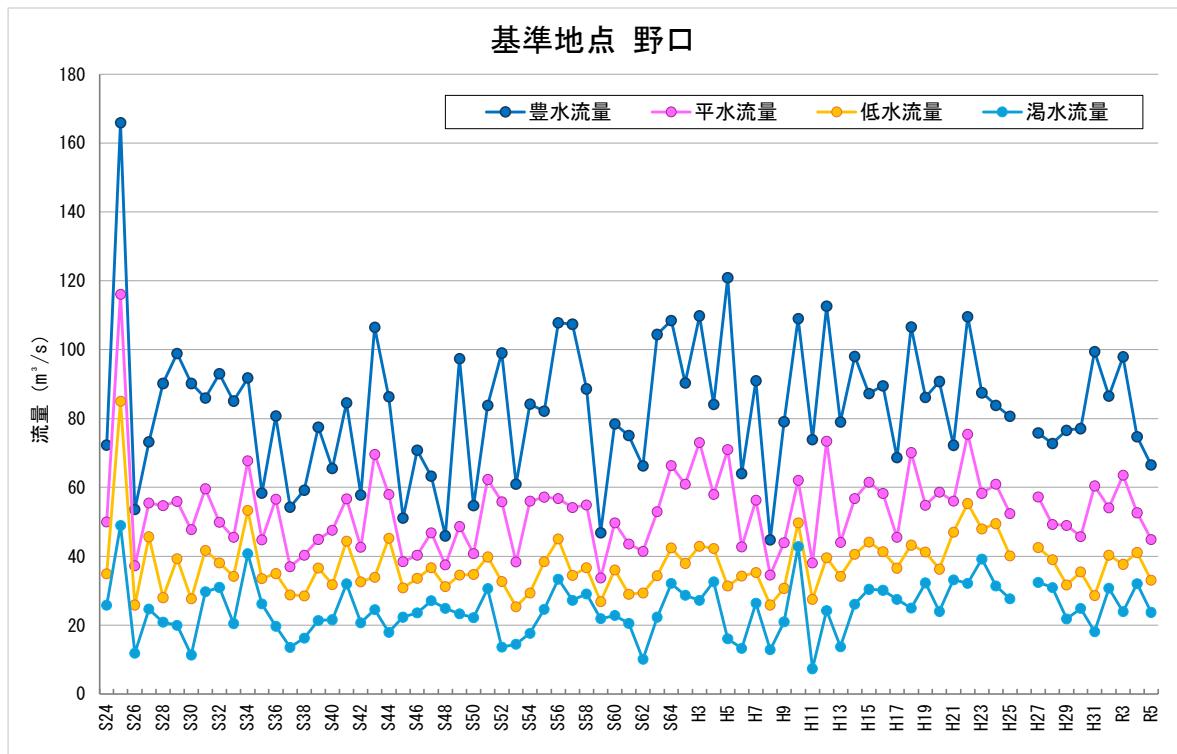


図 6-1 基準地点野口における流況図（流域面積： $2,181 \text{km}^2$ ）

表 6-1 野口地点流況表（流域面積：2,181km²）

No	年	西暦	豊水	平水	低水	渇水	平均	年総 流出量 (10 ³ m ³ /y)	備考
1	昭和24年	1949	72.31	49.96	34.93	25.77	70.43	2,221	
2	昭和25年	1950	165.89	116.04	84.99	49.00	169.77	5,354	
3	昭和26年	1951	53.63	37.24	25.84	11.87	43.80	1,382	
4	昭和27年	1952	73.21	55.49	45.67	24.66	66.48	2,102	
5	昭和28年	1953	90.20	54.68	28.01	20.86	74.19	2,340	
6	昭和29年	1954	98.92	55.98	39.34	20.01	88.68	2,796	
7	昭和30年	1955	90.20	47.73	27.63	11.34	74.89	2,362	
8	昭和31年	1956	85.95	59.58	41.73	29.70	74.97	2,371	
9	昭和32年	1957	93.02	49.90	38.11	31.00	87.20	2,750	
10	昭和33年	1958	85.08	45.53	34.22	20.50	88.79	2,800	
11	昭和34年	1959	91.76	67.76	53.31	40.75	95.92	3,025	
12	昭和35年	1960	58.40	44.80	33.50	26.20	54.80	1,732	
13	昭和36年	1961	80.70	56.60	35.00	19.70	90.80	2,865	
14	昭和37年	1962	54.30	37.00	28.80	13.60	53.40	1,684	
15	昭和38年	1963	59.20	40.30	28.50	16.30	53.80	1,696	
16	昭和39年	1964	77.50	44.90	36.60	21.40	75.50	2,388	
17	昭和40年	1965	65.50	47.60	31.80	21.60	67.80	2,139	
18	昭和41年	1966	84.50	56.70	44.40	32.00	90.17	2,844	
19	昭和42年	1967	57.80	42.60	32.60	20.70	56.10	1,769	
20	昭和43年	1968	106.51	69.65	33.92	24.56	83.34	2,635	
21	昭和44年	1969	86.32	57.98	45.27	17.95	76.91	2,425	
22	昭和45年	1970	51.14	38.40	30.85	22.36	48.18	1,520	
23	昭和46年	1971	70.77	40.37	33.56	23.56	73.57	2,320	
24	昭和47年	1972	63.24	46.87	36.72	27.10	67.14	2,123	
25	昭和48年	1973	45.95	37.52	31.17	24.92	41.70	1,315	
26	昭和49年	1974	97.40	48.66	34.53	23.28	77.76	2,452	
27	昭和50年	1975	54.70	40.74	34.78	22.23	46.94	1,480	
28	昭和51年	1976	83.81	62.33	39.83	30.61	66.73	2,110	
29	昭和52年	1977	99.04	55.85	32.70	13.63	90.16	2,843	
30	昭和53年	1978	60.93	38.35	25.38	14.48	52.70	1,662	
31	昭和54年	1979	84.16	56.01	29.38	17.66	72.85	2,298	
32	昭和55年	1980	82.17	57.19	38.42	24.63	78.02	2,467	
33	昭和56年	1981	107.82	56.77	45.03	33.40	81.97	2,585	
34	昭和57年	1982	107.41	54.19	34.52	27.23	112.93	3,561	
35	昭和58年	1983	88.61	54.90	36.69	29.11	79.56	2,508	
36	昭和59年	1984	46.86	33.71	26.85	21.92	42.67	1,349	
37	昭和60年	1985	78.49	49.71	36.01	22.80	72.36	2,282	
38	昭和61年	1986	75.05	43.60	29.00	20.56	73.78	2,327	
39	昭和62年	1987	66.22	41.43	29.36	10.10	64.95	2,048	
40	昭和63年	1988	104.44	52.99	34.36	22.31	92.45	2,924	
41	昭和64年	1989	108.51	66.36	42.41	32.14	95.46	3,010	
42	平成2年	1990	90.34	60.91	37.92	28.68	79.32	2,501	
43	平成3年	1991	109.78	73.08	42.93	27.22	108.62	3,426	
44	平成4年	1992	84.10	57.94	42.31	32.66	72.23	2,284	
45	平成5年	1993	120.88	71.00	31.38	16.03	91.62	2,889	
46	平成6年	1994	64.04	42.80	34.28	13.28	67.71	2,135	
47	平成7年	1995	90.94	56.28	35.32	26.44	80.60	2,542	
48	平成8年	1996	44.78	34.57	25.86	12.88	42.71	1,351	
49	平成9年	1997	79.07	43.97	30.68	20.94	65.14	2,054	
50	平成10年	1998	109.00	62.07	49.77	42.87	119.25	3,761	
51	平成11年	1999	73.88	38.10	27.53	7.38	74.60	2,353	
52	平成12年	2000	112.61	73.44	39.63	24.23	96.10	3,039	
53	平成13年	2001	79.04	44.00	34.19	13.72	79.31	2,501	
54	平成14年	2002	98.03	56.81	40.55	26.07	90.11	2,842	
55	平成15年	2003	87.28	61.56	44.12	30.42	75.41	2,378	
56	平成16年	2004	89.53	58.20	41.35	30.11	82.94	2,623	
57	平成17年	2005	68.65	45.53	36.58	27.49	69.28	2,185	
58	平成18年	2006	106.60	70.13	43.27	24.95	95.63	3,016	
59	平成19年	2007	86.12	54.84	41.22	32.28	78.80	2,485	
60	平成20年	2008	90.73	58.67	36.30	23.97	79.23	2,506	
61	平成21年	2009	72.26	56.02	47.01	33.18	70.27	2,216	
62	平成22年	2010	109.59	75.42	55.33	32.16	90.82	2,864	
63	平成23年	2011	87.50	58.29	47.95	39.19	欠測	欠測	
64	平成24年	2012	83.82	60.91	49.47	31.40	81.25	2569.32	
65	平成25年	2013	80.64	52.42	40.18	27.64	76.08	2399.20	
66	平成26年	2014						データ無	
67	平成27年	2015	75.81	57.25	42.55	32.43	76.44	2410.64	
68	平成28年	2016	72.74	49.23	39.03	30.91	72.32	2287.00	
69	平成29年	2017	76.58	48.96	31.69	21.88	69.81	2201.66	
70	平成30年	2018	77.08	45.73	35.45	24.87	64.87	2045.74	
71	平成31年	2019	99.47	60.42	28.59	18.12	81.45	2568.61	
72	令和2年	2020	86.56	54.11	40.39	30.74	72.45	2291.04	
73	令和3年	2021	97.90	63.52	37.66	23.92	83.77	2641.77	
74	令和4年	2022	74.74	52.66	41.09	32.06	69.96	2206.17	
75	令和5年	2023	66.51	44.87	33.01	23.71	60.80	1917.28	
75カ年 (1949~2023)		最大	165.89	116.04	84.99	49.00	169.77	5353.84	
		最小	44.78	33.71	25.38	7.38	41.70	1314.92	
		平均	83.17	53.48	37.44	24.69	76.56	2415.76	
10カ年 (2014~2023)		平均	80.82	52.97	36.61	26.52	72.43	2285.55	
		第1位	66.51	44.87	28.59	18.12	60.80	1917.28	

6.2 河川水質

那珂川、支川藤井川及び涸沼川の水質は、水質汚濁の代表指標である BOD (75% 値) で評価すると、桜川合流後の勝田橋（那珂川）を除くと、現行計画策定後は概ね環境基準を達成している。

支川桜川は現行計画策定後もしばしば環境基準を達成できておらず、桜川合流後の勝田橋（那珂川）においても同様である。

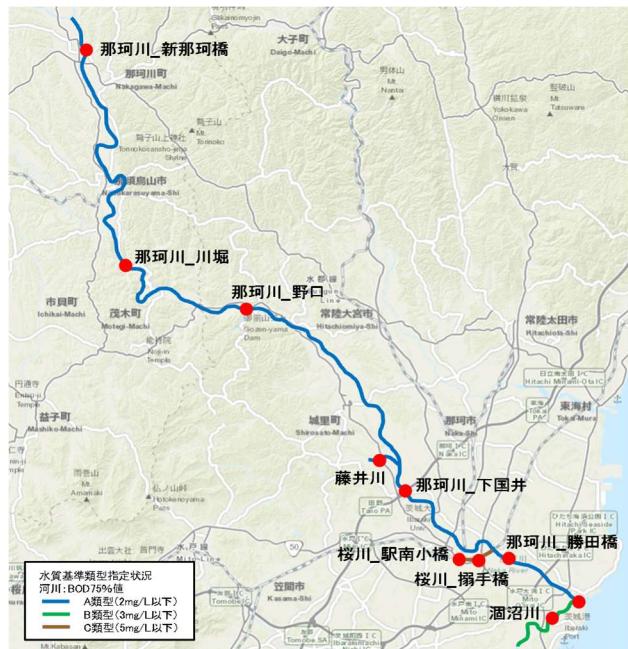


図 6-2 水質基準類型指定状況と水質観測位置

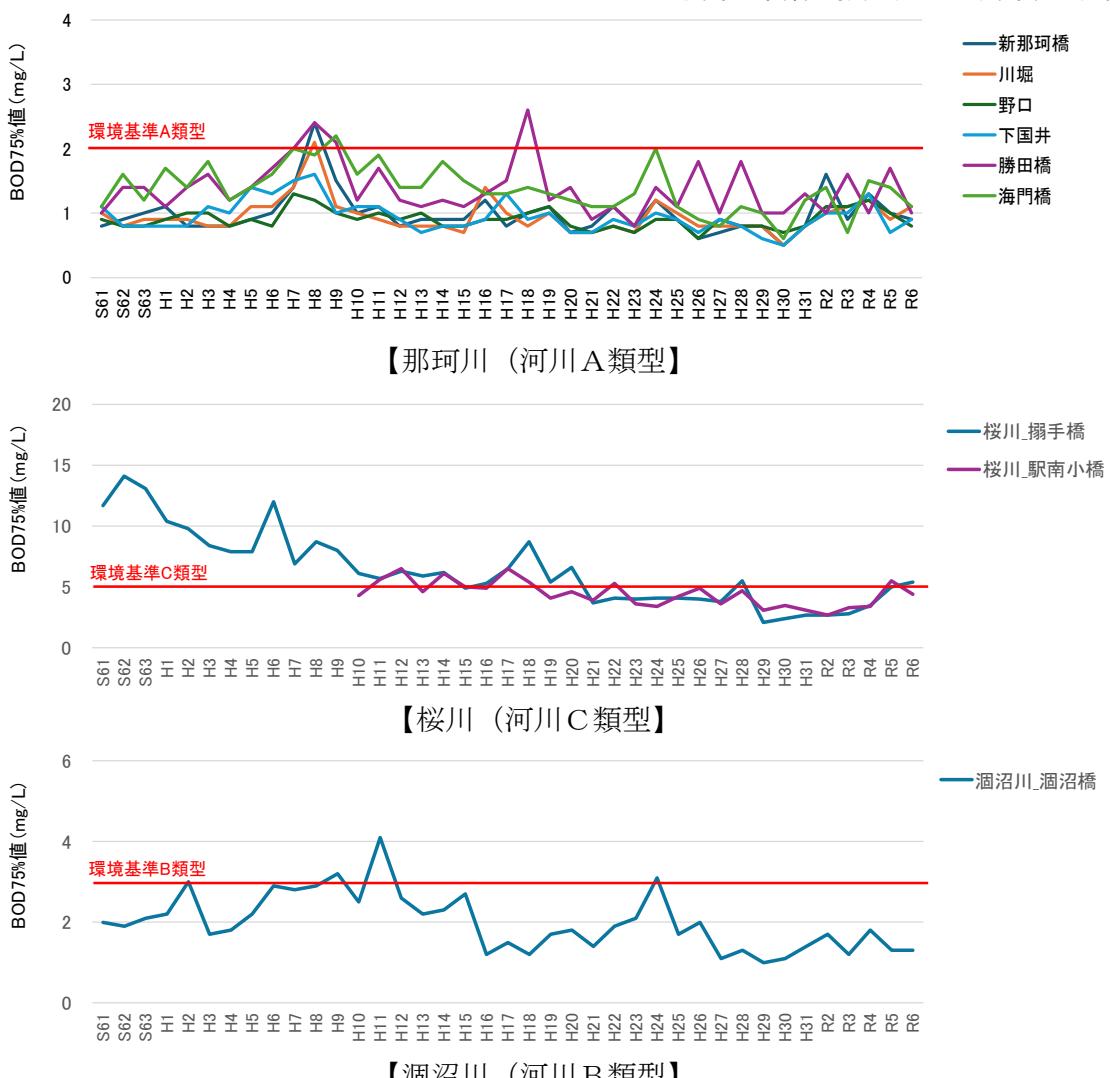


図 6-3 水質の経年変化 (BOD)

7. 河川空間の利用状況

(1) 河川空間の利用状況

那珂川水系の河川空間は、山間地を流れ、景観に優れ、施設の整備された場所でのスポーツ、散策などが盛んに行われている。

特に、下流部では河川敷の運動公園での利用が活発であり、また、河口部の大洗水辺プラザ周辺では釣り人の利用が多い。

平成 12 年（2000 年）以降、河川利用客は増加していた。しかし、令和元年（2019 年）は令和元年東日本台風（2019 年）の影響により、災害復旧工事等が行われ利用者数は減少している。なお、利用場所や利用形態は、水際の釣りや水遊びから高水敷や堤防の散策やスポーツが多くなり、変化してきている。

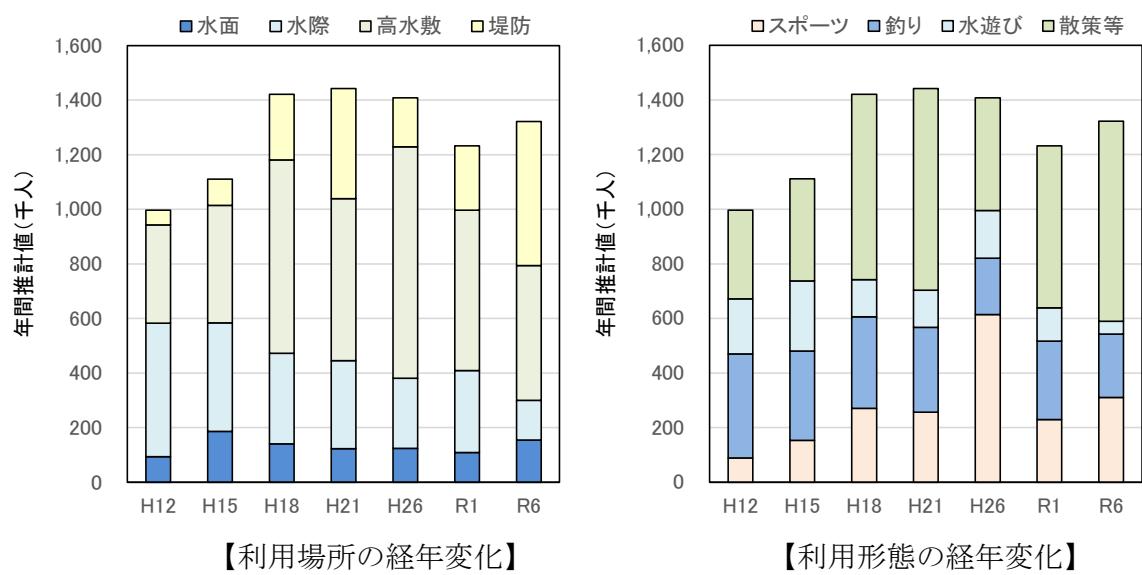


図 7-1 那珂川大臣管理区間ににおける利用場所と利用形態の経年変化



(2) 河川の利用

那珂川の内水面漁業における主な漁業対象は、アユ、サケ類、コイ、フナ類、オイカワ・ウグイ、シジミである。サケ類は、減少傾向にあり、令和5年（2023年）の漁獲量は0tであった。また、アユは平成21年（2009年）から減少傾向にあり、平成25年（2013年）から横ばいとなっている。シジミは平成22年（2010年）から平成27年（2015年）に減少したが、その後、少し回復し、現在は横ばいとなっている。

なお、那珂川ではアユやサケの人工放流が行われており、サケの人工孵化・放流については、明治10年（1877年）にわが国最初に行われ、現在に至っている。また、平成13年（2001年）からシジミ稚貝の養殖、放流が行われている。

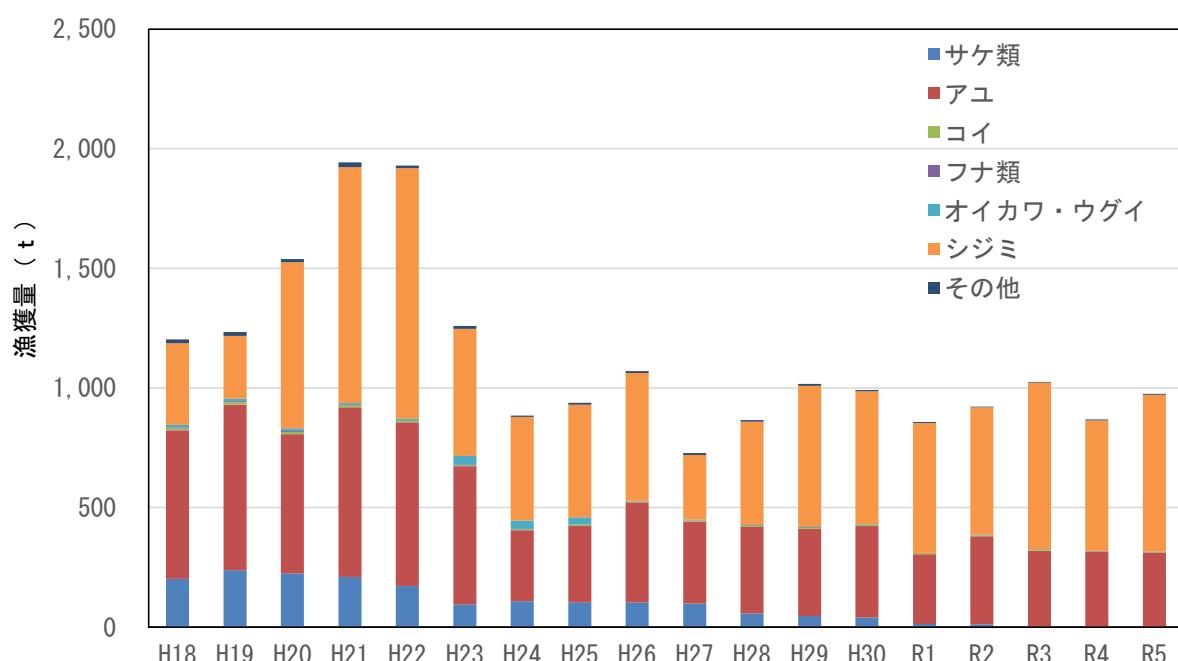


図 7-2 那珂川水系の経年の漁獲量

（農水省_内水面漁業生産統計調査結果）

8. 河道特性

那珂川の河道特性について上流部、中流部、下流部に分けて説明する。

また、那珂川の河道特性区分を図 8-1、大臣管理区間の現況河道縦断図を図 8-2 に示す。

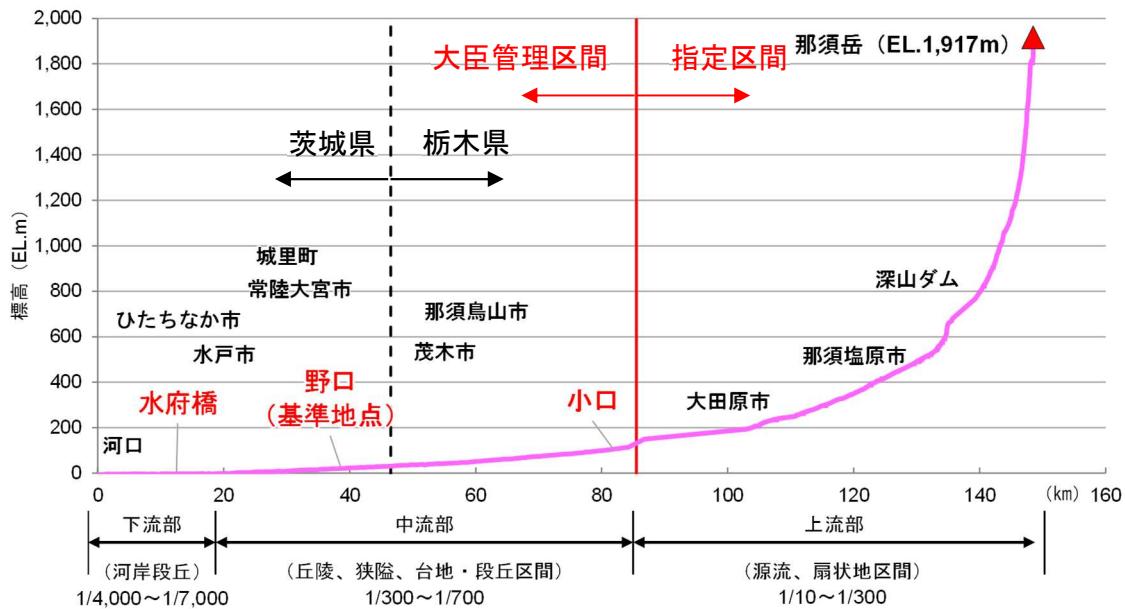


図 8-1 河道特性区分

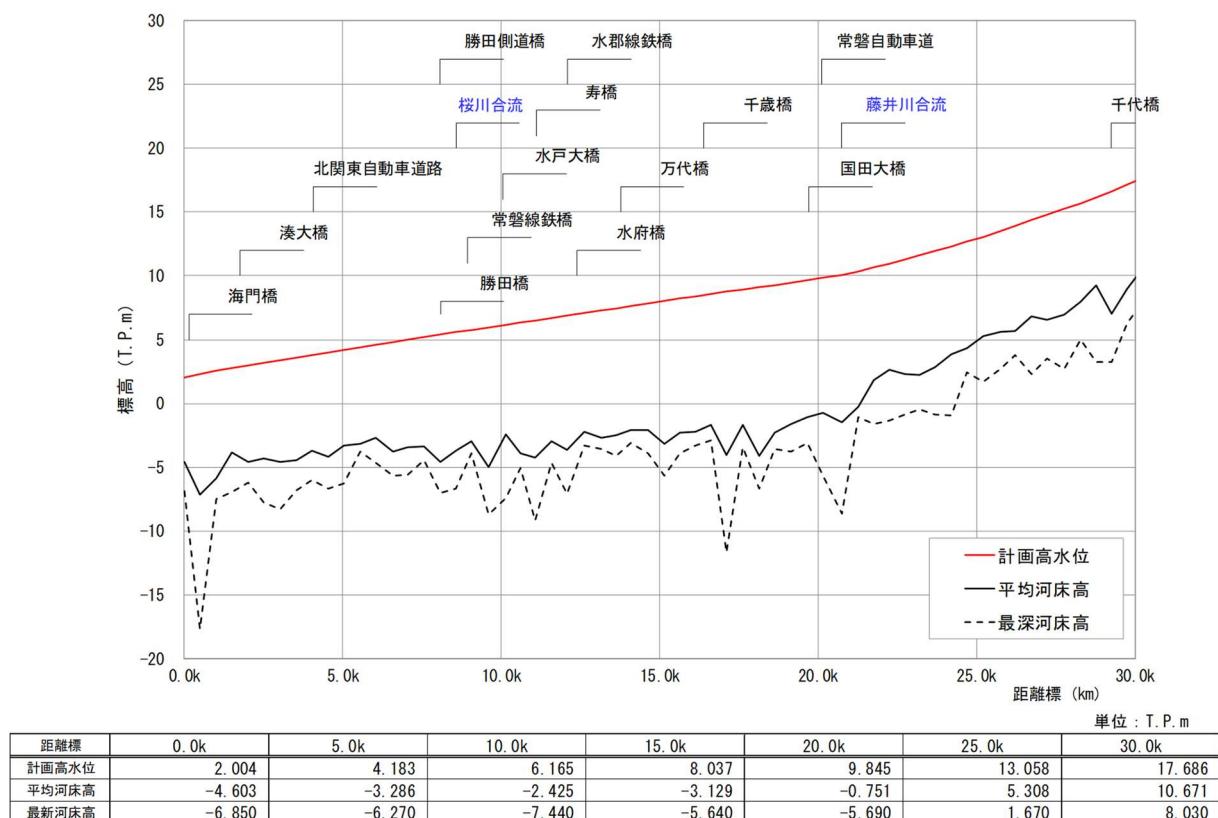


図 8-2(1) 那珂川現況河道縦断面図（大臣管理区間 0.0k～30.0k）

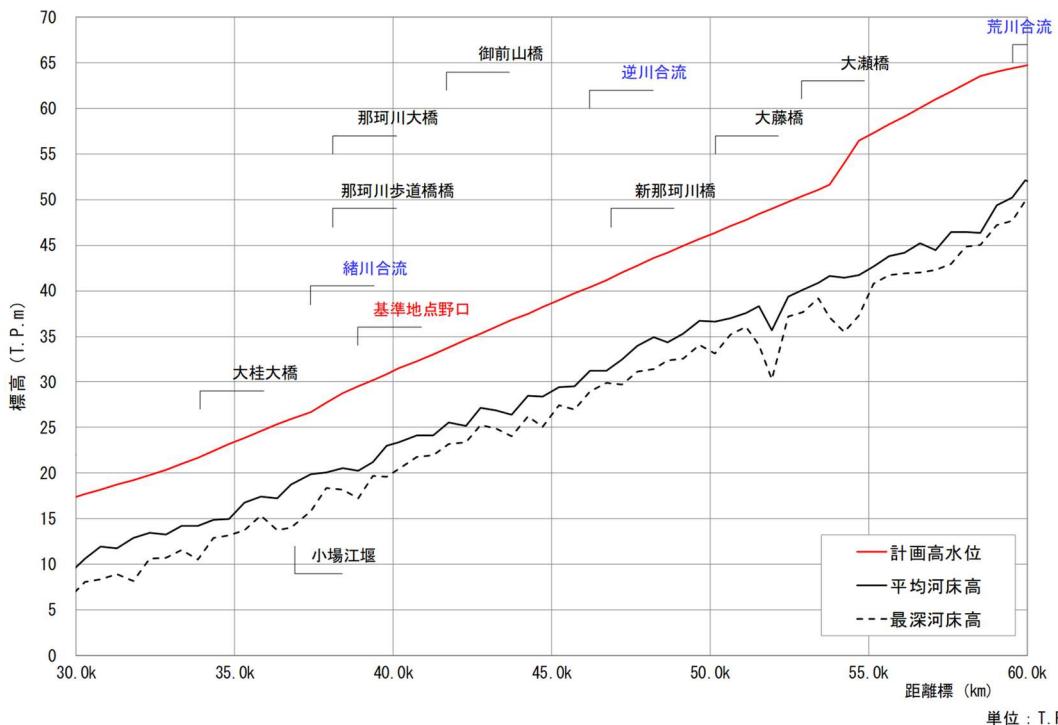


図 8-2(2) 那珂川現況河道縦断面図（大臣管理区間 30.0k～60.0k）

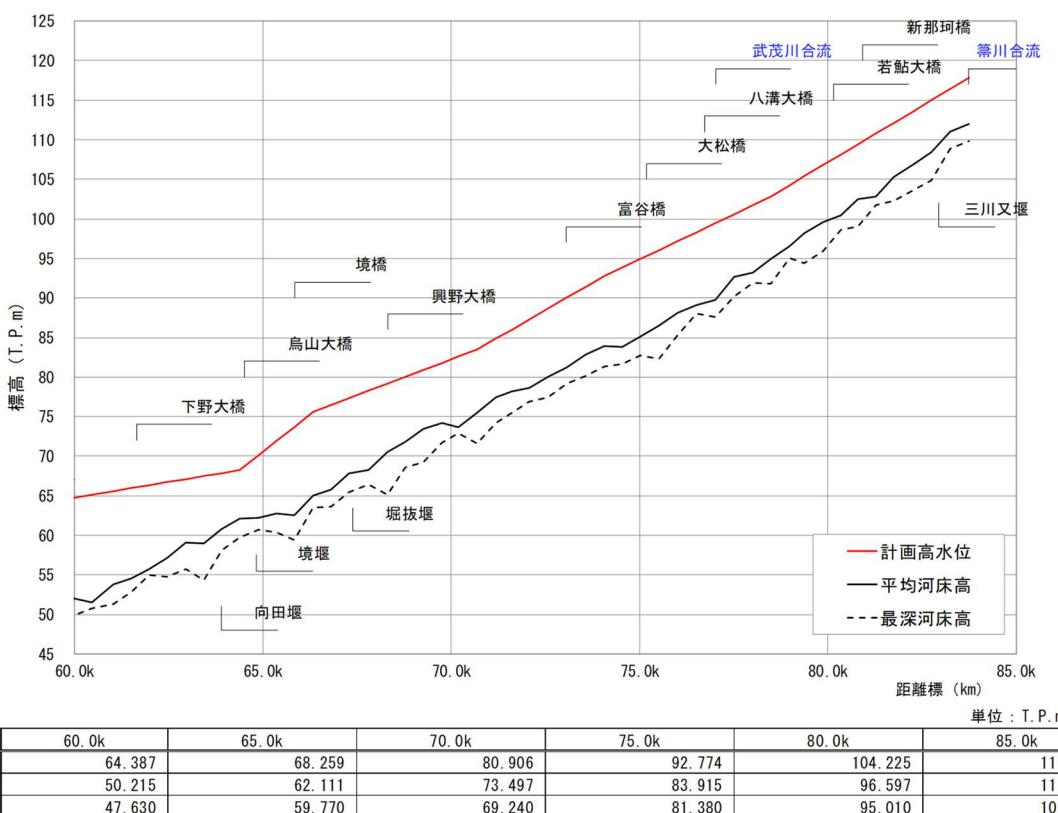


図 8-2(3) 那珂川現況河道縦断面図（大臣管理区間 60.0k～85.0k）

(1) 上流部（源流～簗川合流点）

上流区間は、水源からV字渓谷の急流を流れる源流区間と那須野ヶ原扇状地の中を浸食し流下する区間の2つに分けられる。

① 源流区間

那須岳を水源とし、V字渓谷の中を流れる急流の渓谷区間で、日光国立公園に指定されている区間であり、渓谷を流下していることから、河川周辺の土地利用はほとんど見られない。

河床勾配は1/80以上で、河床材料は代表粒径30cmの巨礫で構成される。

② 那須野ヶ原扇状地区間

那須野ヶ原の火山性台地を浸食した幅広い掘り込み河道を流れる区間である。両岸には斜面林が見られ、台地の上には農地が点在する。一部河川敷の広い区間には公園やキャンプ場が見られる。

河床勾配は1/100～1/300で、河床材料は代表粒径5～15cmの中礫・大礫で構成される。



図 8-3 那珂川 簗川合流部付近 (85.0k付近)

(2) 中流部（簗川合流点付近～城里町上泉地先）

中流部は、八溝山地の横を平行に流れる区間、八溝山地を浸食してきた渓谷の中を流れる区間、瓜連丘陵や友部丘陵等の台地・丘陵地の中を流れる区間の3つに分けられる。

① 山間区間【簗川合流点（85.5k）～荒川合流点（60.5k）】

八溝山地に沿って盆地の中を流下する区間であり、川の中は早瀬と淵が連続している。川沿いの低地は主に水田として利用されており、川から離れた台地上の土地などが住宅地や幹線道路として利用されている。河道は部分的に築堤されている。

川の周辺は八溝県立自然公園として指定されるなど自然豊かな場所である。

川幅は150～600m、河床勾配は1/330～440で、河床材料は代表粒径29～30mmの砂・礫で構成される。



図 8-4 那珂川 大松橋付近（76.0k 付近）

② 狹窄区間【荒川合流点（60.5k）～新那珂川橋（46.5k）】

八溝山地を横断し、崖地の深い谷の中を流れる区間であり、崖地の中を流下する区間であることから土地利用は少ないが、川にアクセスが容易な場所では観光やなが設置され、アユ釣りが盛んである。川の周辺は那珂川県立自然公園に指定されるなど、自然豊かな場所である。

川幅は120～440mと狭く、河床勾配は1/770で、河床材料は代表粒径25mmの砂・礫で構成される。



図 8-5 那珂川 やな場付近 (53.0k 付近)

③ 台地・丘陵地区間【新那珂川橋 (46.5k) ~城里町上泉地先 (27.5k)】

台地・丘陵地に挟まれた区間を流下し、川幅は広い。両岸には河岸段丘と斜面林、広い河原が特徴的な景観を持ち、川の中は砂州、瀬と淵による変化に富んでいる。沿川は常陸大宮市や城里町であるが、この市街地や幹線道路は台地や丘陵地の上にある。

川幅は 200~650m、河床勾配は 1/770 で、河床材料は代表粒径 25mm の砂・礫で構成される。

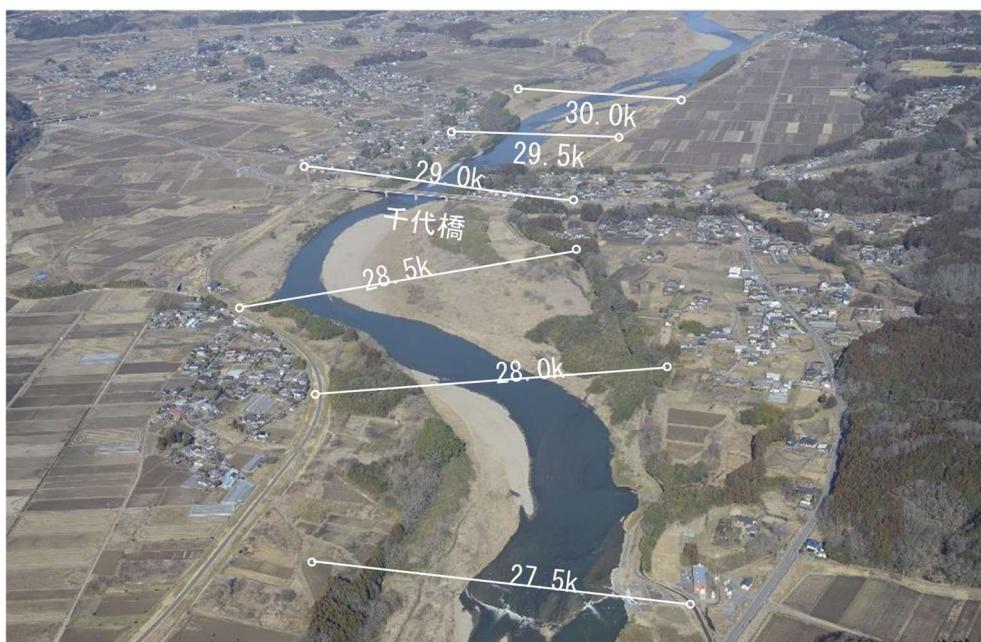


図 8-6 那珂川 千代橋付近 (29.0k 付近)

(3) 下流部（城里町上泉地先～河口）

那珂台地、東茨城台地を削ってできた河岸段丘の間を流れ、台地の間は沖積平野となっており、水戸市をはじめとする市街地が発達している。

① 自然堤防区間【城里町上泉地先（27.5k）～河口（0.0k）】

低地の自然堤防が発達している区間であり、水戸市の中心地で大きく蛇行し、河口から桜川合流点までは緩やかに蛇行する。

川幅は200～600m、河床勾配は1/1,000～7,000で、河床材料は代表粒径0.40～0.25mmの細礫、砂、シルトで構成される。



図 8-7 那珂川 水戸市付近（12.5k 付近）



図 8-8 那珂川 河口付近（-0.5k 付近）

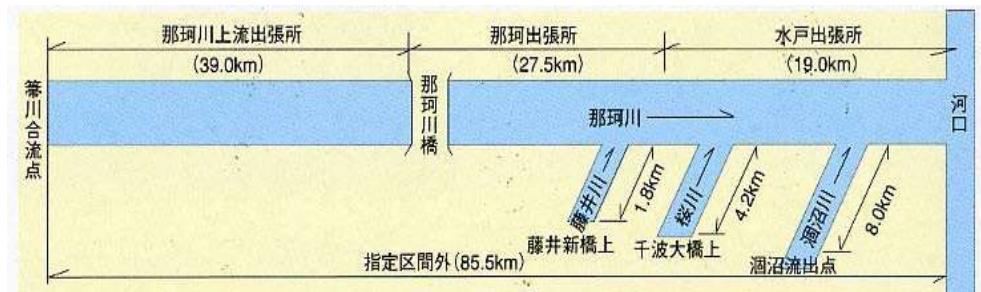
9. 河川管理の現状

那珂川水系においては、洪水等による災害の防止、河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持、河川環境の整備と保全の観点から日々の河川管理を行っている。

那珂川水系について、大臣管理区間とその延長は表 9-1、図 9-1、指定区間の河川数および管理区間延長は表 9-2 に示すとおりである。

表 9-1 那珂川水系大臣管理区間 管理区間延長

河川名	区間		
	上流端	下流端	管理区間延長 (km)
那珂川	篠川合流点	河口	85.5
涸沼川	涸沼流出点	那珂川合流点（河口より0.5km）	8.0
桜川	千波大橋	那珂川合流点（河口より8.7km）	4.2
藤井川	藤井新橋	那珂川合流点（河口より21.2km）	1.8



(出典：常陸河川国道事務所資料)

図 9-1 那珂川水系直轄管理区間図

表 9-2 那珂川水系の指定区間河川数および指定区間延長

	河川数	指定区間延長 (km)
茨城県	65	375.7
栃木県	132	1,029.8

(出典：常陸河川国道事務所資料)

9.1 河川区域

事務所確認中

那珂川水系の大臣管理区間における河川区域の内訳を表 9-3 に示す。低水路は 45%、堤防敷は 6%、高水敷は 49%となっている。民有地は 17%でありそのほとんどが高水敷である。

表 9-3 那珂川水系大臣管理区間の管理区域面積

(単位 : 千 m³)

	低水路 (1号地)			堤防敷 (2号地)			高水敷 (3号地)			合計		
	官有地	民有地	不明地	官有地	民有地	不明地	官有地	民有地	不明地	官有地	民有地	不明地
那珂川	11,404	653	0	1,035	383	0	9,498	3,548	324	21937	4584	324
涸沼川	727	0	0	27	0	0	94	324	0	776	324	0
桜川	74	0	0	150	0	0	94	0	0	318	0	0
藤井川	31	0	0	60	0	0	62	74	0	153	74	0
合計	12,236	653	0	1,272	383	0	9,676	3,946	324	23,184	4,982	324

(出典 : 常陸河川国道事務所資料)

9.2 河川管理施設等

(1) 河川管理施設

那珂川水系の大臣管理区間における河川管理施設は、堤防護岸等の他、水門 4 箇所、樋門樋管 51 箇所がある。水門・樋管等の河川管理施設は、昭和 50 年（1975 年）以前に築造されたもの（設置後 30 年以上経過）が 1/3 を占め、今後老朽化の進行等により施設更新や補修時期が集中することが考えられるため、施設の重要度や不具合の状況に応じた構築的、適切な維持管理を行う必要がある。

直轄管理区間における堤防整備状況と河川管理施設について以下に示す。

表 9-4 那珂川水系大臣管理区間堤防整備状況（令和 7 年（2025 年）3 月時点）

	延長 (km)				
	那珂川	涸沼川	桜川	藤井川	計
完成堤防	46.7	0.7	7.4	2.7	57.5
暫定堤防	15.0	0.0	0.2	0.0	15.3
未施工区間	41.9	11.9	0.0	0.0	53.8
堤防不必要区間	64.6	2.4	0.0	0.7	67.7
計	168.3	15.0	7.6	3.4	194.3
整備率	45.1%	5.6%	96.9%	100.0%	45.4%

※令和7年3月末時点

※延長は、大臣管理区間の左右岸の合計である。

※暫定堤防は、H.W.L 以上の堤防と H.W.L 未満の堤防の合計である。

(出典 : 常陸河川国道事務所資料)

表 9-5 河川管理施設一覧表（大臣管理区間）

種別	那珂川	涸沼川	桜川	藤井川	合計
水門	3	0	0	1	4
樋門・樋管	38	0	11	2	51

（出典：常陸河川国道事務所資料）

(2) 許可工作物

那珂川水系の大臣管理区間における許可工作物は、樋門・樋管 61 箇所、水門 1 箇所、堰 6 箇所、橋梁 55 箇所があり、各構造物について河川管理施設と同程度の維持管理水準を確保するよう各施設管理者と協議し、適正な維持管理を行うよう指導している。

表 9-6 主要な許可構造物一覧表（大臣管理区間）（平成 24 年（2016 年）3 月現在）

種別	那珂川	涸沼川	桜川	藤井川	合計
樋門・樋管	45	7	8	1	61
水門	1	0	0	0	1
堰	5	0	1	0	6
橋梁	33	4	14	4	55

（出典：那珂川河川維持管理計画【国土交通大臣管理区間編】）

9.3 水防体制

(1) 河川情報の概要

那珂川流域内では、雨量観測所 24 箇所、水位・流量観測所 11 箇所を設置し、光ファイバーや無線等により迅速な情報収集を行うとともに、これらのデータや洪水予測システムを用いて洪水予報や水防警報を発表している。また常に出水の状況等を監視するため、河川管理上重要な箇所には CCTV カメラを設置している。これらの水位・雨量等の災害情報をリアルタイムで情報提供し、迅速かつ的確な水防活動を促すため、関係自治体や放送メディアと光ファイバー接続している。



図 9-2 那珂川流域の雨量・水位観測所の位置図

(出典: 常陸河川国道事務所資料より作成)

(2) 洪水予報

那珂川は、水防法第10条第2項及び気象業務法第14条の2第2項の規定に基づき国土交通大臣と気象庁長官が共同して洪水予報を行う「洪水予報指定河川」に指定されている。指定状況を表9-7に示す。

表 9-7 那珂川水系に関わる洪水予報指定状況

河川名	実施区間	洪水予報 基準観測所
那珂川	左岸 栃木県大田原市亀久字太平419番4地先から海まで	小口
	右岸 栃木県大田原市佐良土字野島2835番1地先から海まで	野口 水府橋

(出典：常陸河川国道事務所資料)

(3) 水防警報

那珂川には水防警報対策対象水位観測所が小口、野口、水府橋の3箇所設置されている。洪水による災害が起こる恐れがある場合に、水防警報対策対象水位観測所の水位をもとに、水防警報を通知している。

表 9-8 水防対策対象水位観測所

河川名	観測所	所在地	計画高水位 (m)	氾濫 危険水位 (m)	避難 判断水位 (m)	氾濫 注意水位 (m)	水防団 待機水位 (m)
那珂川	小口	河口から82.0km	9.67	5.5	5.0	5.0	4.0
	野口	河口から38.3km	7.56	4.5	4.1	3.5	2.5
	水府橋	河口から12.4km	8.36	5.8	5.4	4.0	3.0

(出典：常陸河川国道事務所資料)

(4) 水位情報周知河川

那珂川の支川藤井川、桜川及び涸沼川は、水防法第13条の規定に基づき、国土交通省が特別警戒水位を定め、水位がこれに達したとき、水防管理者に通知している。

表 9-9 水位情報周知河川

河川名	区間	基準地点	特別 警戒水位 (m)
藤井川	左岸：水戸市藤井町地先 右岸：水戸市飯富町地先 から幹川合流点	野口	4.7
桜川	左岸：水戸市桜川1丁目地先 右岸：水戸市中央2丁目地先 から幹川合流点	水府橋	8.1
涸沼川	左岸：東茨城群茨城町大字下石崎地先 右岸：東茨城郡大洗町神山町地先 から幹川合流点	水府橋	5.7

(出典：常陸河川国道事務所資料)

9.4 危機管理に対する取組

(1) 水防関係団体との連携

那珂川における水害を防止または軽減するために、水防関係団体・地域住民とともに、水防資材の備蓄や水防訓練・情報伝達訓練及び重要水防箇所の巡回・点検を行っている。



▲減災対策協議会（Web）の状況



▲マイ・タイムライン作成講習会の状況



▲ホットライン訓練の状況



▲共同点検の状況



▲水質事故訓練の状況



▲水防訓練の状況

(2) 水質事故防止の実施

那珂川における近年の水質事故の発生状況は表 9-10、図 9-2 のとおりである。水質事故の件数は平成 21 年（2009 年）から減少傾向である。

那珂川では水質汚濁対策に関して、国土交通省、関係県、政令指定都市および水資源機構等の関係機関をもって設置された「関東地方水質汚濁対策連絡協議会」に所属している。同協議会では水質事故対策訓練を主催し、水質の実態把握と汚濁過程の究明、防止対策の樹立、情報の交換を行っている。

さらに沿川自治体と協力し、水質の監視や情報の交換、水質汚濁防止のための啓発活動を行い、水質事故発生防止や水質事故の早期解決に努めている。

表 9-10 那珂川水系の水質事故発生件数（大臣管理区間）

年度	西暦	発生件数
平成7年度	1995年	0
平成8年度	1996年	1
平成9年度	1997年	5
平成10年度	1998年	3
平成11年度	1999年	6
平成12年度	2000年	9
平成13年度	2001年	9
平成14年度	2002年	8
平成15年度	2003年	16
平成16年度	2004年	18
平成17年度	2005年	14
平成18年度	2006年	15
平成19年度	2007年	16
平成20年度	2008年	13
平成21年度	2009年	21
平成22年度	2010年	8
平成23年度	2011年	17

年度	西暦	発生件数
平成24年度	2012年	3
平成25年度	2013年	15
平成26年度	2014年	10
平成27年度	2015年	14
平成28年度	2016年	6
平成29年度	2017年	7
平成30年度	2018年	10
令和元年度	2019年	6
令和2年度	2020年	7
令和3年度	2021年	8
令和4年度	2022年	3
令和5年度	2023年	7
令和6年度	2024年	5

出典：平成 7 年度（1995 年度）～平成 23 年度（2011 年度） 常陸河川国道事務所資料
平成 24 年度（2012 年度）～令和 6 年度（2024 年度） 関東地方整備局一級河川の水質現況

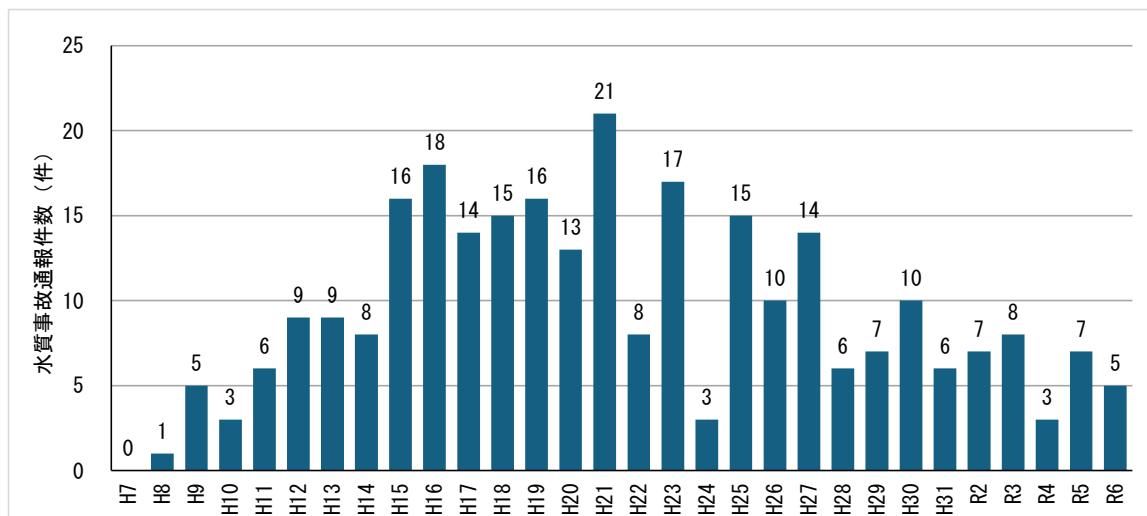


図 9-3 那珂川における水質事故の通報件数の経年変化

(3) 洪水危機管理への取組

- 洪水浸水想定区域図の公表

万が一水害が発生した場合には、住民1人1人の水害に対する危機意識や準備が何よりも重要となってくる。そのため、洪水等の円滑かつ迅速な避難を確保し、水災による被害を軽減するため、洪水浸水想定区域を指定し公表することにより、日頃からの危機意識の向上を図る。

さらに、各自治体においては、当該洪水浸水想定区域内における洪水予報の伝達方法、避難場所その他洪水時の円滑かつ迅速な避難確保を図るために必要な事項について定め（一般的な手法としてはハザードマップが用いられる）、住民に周知させることが義務づけられていることから、その支援を強化するとともに、平常時からの情報の共有化、連携の強化を図る。

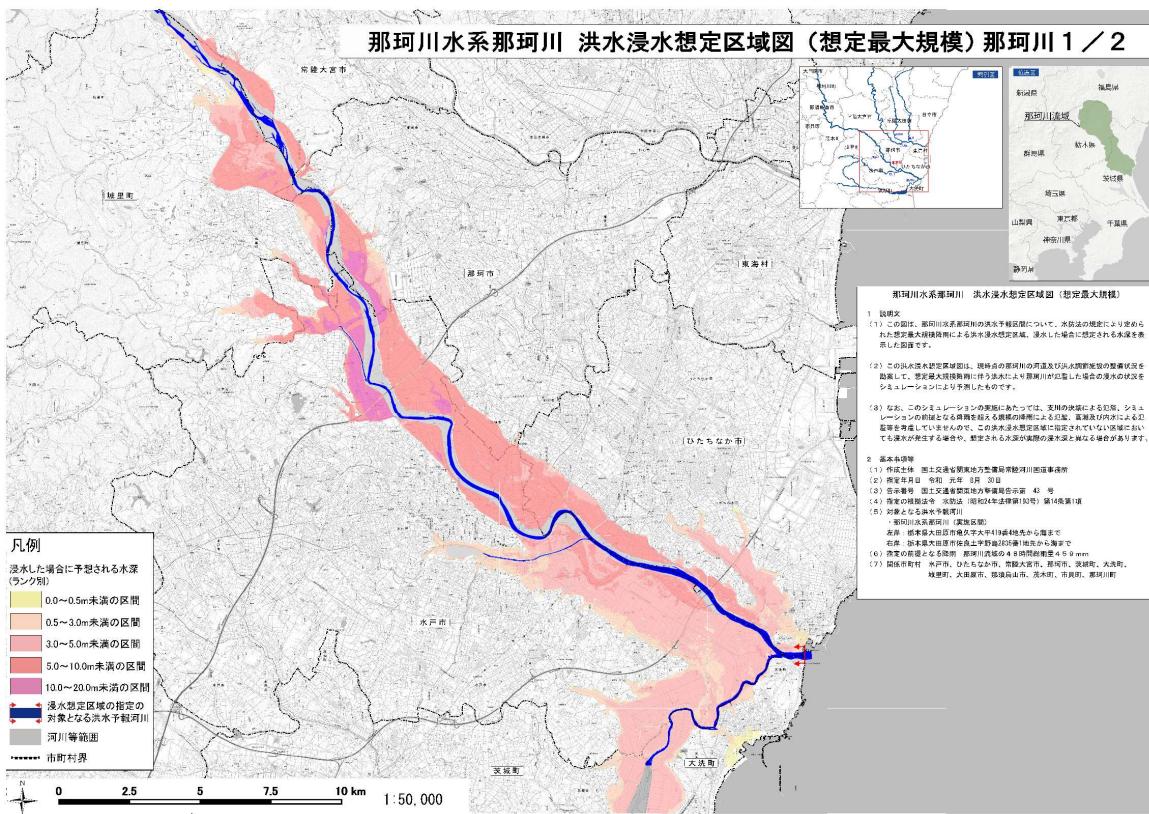


図 9-4 那珂川水系那珂川 洪水浸水想定区域図（令和元年（2019年）8月30日指定）

- マイ・タイムラインの普及

平成27年9月関東・東北豪雨（2015年）で約4,300名の逃げ遅れが発生したことを受けて、水防災意識社会構築ビジョンを策定し、「住民目線のソフト対策」へ転換する取組を行ってきた。令和2年（2020年）10月に「逃げ遅れゼロ」に向けた避難時のチェックリストとして活用する「マイ・タイムライン」の作成講習会を実施し、普及促進を図る。



図 9-6 訓練の様子（常陸大宮市）



図 9-6 ワークショップの様子（那珂市）

- 越水・決壊センサーの開発・整備

水防上重要な箇所において、氾濫の発生をいち早く捉え氾濫発生情報の発表を遅延なく行うことを目的に、越水・決壊を感知するセンサー機器の開発・整備を行った。

これまで実施していた河川巡視、河川監視カメラの映像、観測水位などの情報と合わせて活用し、夜間視認性が悪い箇所や現場に立ち入れず時間をする箇所においても、越水・決壊の状況把握の迅速化を推進する。



図 9-7 越水・決壊センサーの開発・整備イメージ図

(4) 火山活動の監視

那珂川源流部の茶臼岳（那須岳）は、最も古い記録で応永 11 年（1404 年）に噴火して以来 8 回噴火し、現在も活動している活火山である。最も新しい噴火は昭和 38 年（1963 年）7 月に発生した。

那須岳の噴火による災害（降灰、火山泥流、火山ガス等）を最小限に食い止めるため、栃木県では、「那須岳火山防災マップ」を公表し、災害発生が想定される区域や避難場所等についても地域住民に周知している。

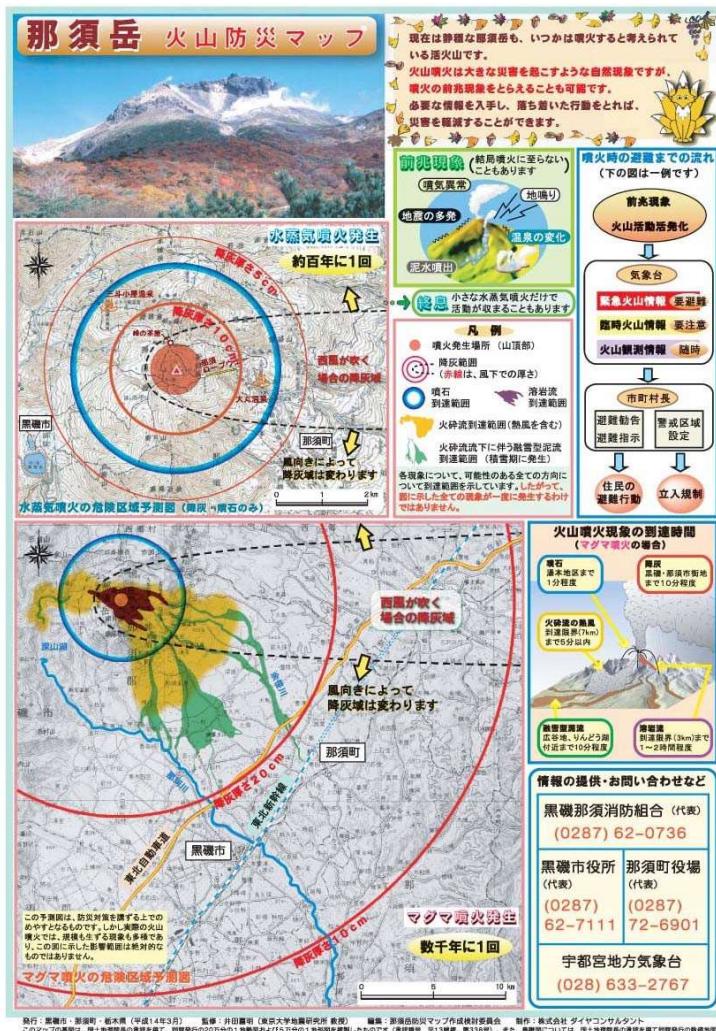


図 9-8 那須岳火災防災マップ

（出典：栃木県、那須塩原市）

(5) 地震への対応

那珂川流域は、内閣中央防災会議における「南関東地域直下の地震により著しい被害を生じる恐れがある地域」に隣接している地域であり、また活火山である那須岳を水源としていることから、大規模な地震への対応が必要な地域である。このような状況から河川管理施設等の耐震性について点検等を行っている。

9.5 流域治水への取り組み

(1) 久慈川・那珂川流域における減災対策協議会

平成 27 年 9 月関東・東北豪雨（2015 年）では、鬼怒川の堤防決壊などにより、氾濫流による家屋の倒壊・流失や広範囲かつ長期間の浸水が発生した。また、これらに住民の避難の遅れも加わり、近年の水害では例を見ないほどの多数の孤立者が発生する事態となった。

このことから、国土交通大臣から社会資本整備審議会会長に対して、「大規模氾濫に対する減災のための治水対策のあり方について」が諮問され、平成 27 年（2015 年）12 月 10 日に「大規模氾濫に対する減災のための治水対策のあり方について～社会意識の変革による「水防災意識社会」の再構築に向けて～」が答申された。

久慈川・那珂川流域では、この答申を踏まえ、水防災意識社会を再構築すべく、地域住民の安全安心を担う沿川の 14 市町村（水戸市、日立市、常陸太田市、ひたちなか市、常陸大宮市、那珂市、茨城町、大洗町、城里町、東海村、大田原市、那須烏山市、茂木町、那珂川町）と茨城県、栃木県、気象庁、国土交通省関東地方整備局で構成される「久慈川・那珂川流域における減災対策協議会」を平成 28 年（2016 年）6 月 3 日に設立した。

(2) 那珂川緊急治水対策プロジェクト

令和元年東日本台風（2019 年）において甚大な被害が発生した那珂川水系における今後の治水対策の取組として、関係機関が連携し、「那珂川緊急治水対策プロジェクト」をとりまとめ、国、県、市町が連携し、社会経済被害の最小化を目指している。

「那珂川緊急治水対策プロジェクト」では、以下の 2 つを柱として取り組んでいる。

1. 多重防護治水の推進
2. 減災に向けたさらなる取組の推進
 - 令和元年（2019 年）12 月 26 日：中間とりまとめ
 - 令和 2 年（2020 年）1 月 31 日：最終とりまとめ

(3) 久慈川・那珂川水系流域治水プロジェクト

「総力戦で挑む防災・減災プロジェクト」のとりまとめ（令和 2 年（2020 年）7 月 6 日）を踏まえ、久慈川・那珂川流域においても、流域治水を計画的に推進するため「久慈川・那珂川流域治水協議会」を設置し、

- 流域治水の全体像の共有・検討
 - 流域治水プロジェクトの策定・公表
 - 流域治水プロジェクトに基づく対策の実施状況のフォローアップ
- などを実施している。
- 令和 3 年（2021 年）3 月 30 日：那珂川水系流域治水プロジェクトを公表
 - 令和 4 年（2022 年）3 月 31 日：那珂川水系流域治水プロジェクトにグリーンインフラの取組を追加

10. 地域との連携

那珂川では、河川を基軸とした地域づくりや河川をフィールドとした地域活動が行われるとともに、那珂川の歴史・文化・風土・自然環境を伝える活動や施設等とのネットワークにより地域間の交流が盛んになっている。

(1) 河川に関する情報の発信

地域の魅力と活力を引き出した交流活動を推進するため、パンフレットやインターネットのホームページ等により河川に関する情報を幅広く地域に提供し、情報交換の促進を図っている。具体的な例として、事業進捗等を広報する「那珂川だより」や那珂川に関わる歴史・文化及び自然環境を紹介している「環境百科 那珂川」の発刊等の事例が挙げられる。



図 94 那珂川だより

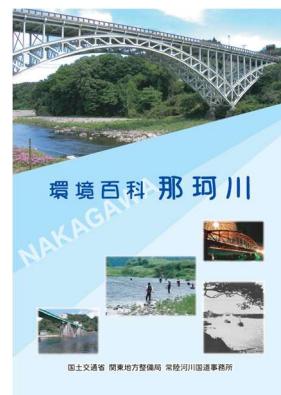


図 95 環境百科 那珂川

(2) 久慈川・那珂川クリーン作戦

「久慈川・那珂川クリーン作戦」は、国土交通省と久慈川・那珂川沿川市町村が一体となり、沿川住民・河川利用者及び各種ボランティア団体等が自ら行う清掃作業をとおして、河川の環境美化・愛護意識ならびに水質保全に対する一層の意識の向上をめざすとともに、ひとりひとりの「河川を大切にする心」の啓発を図ることを目的とし、毎年「河川愛護月間」である7月の第1日曜日に実施されている。久慈川水系では令和5年（2023年）で35回目となる。



写真 10-1 久慈川・那珂川クリーン作戦の様子

近年のクリーン作戦の参加人数とゴミ収集量についてエラー! 参照元が見つかりません。
及びエラー! 参照元が見つかりません。に示す。

表 10-1 久慈川・那珂川クリーン作戦の参加人数とゴミ収集量の推移

年	参加人数 (人)	ゴミ収集量 (kg)
H26	31,505	30,818
H27	22,659	16,255
H28	32,123	24,401
H29	24,449	18,970
H30	24,682	7,611
R1	22,254	4,129
R2	コロナにより中止	-
R3	コロナにより中止	-
R4	コロナにより中止	-
R5	6,353	4,721
R6	12,255	6,279
R7	12,141	5,204

(出典：常陸河川国道事務所資料)

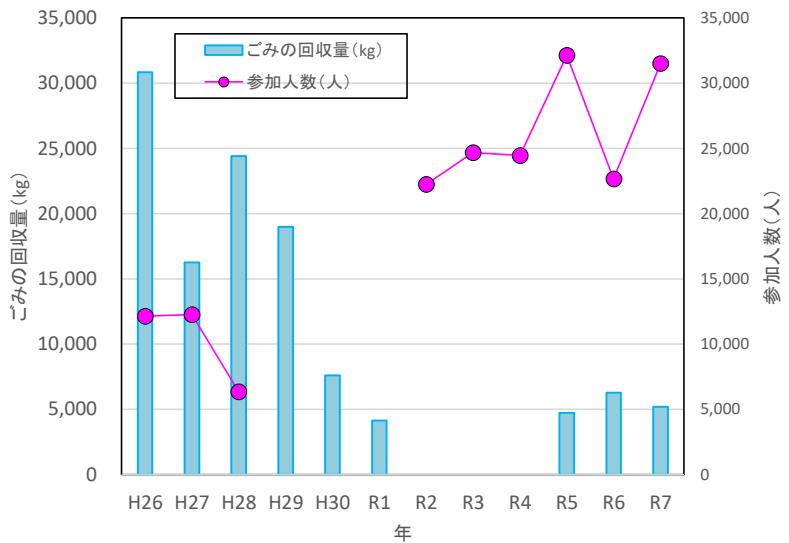


図 10-1 久慈川・那珂川クリーン作戦の参加人数とゴミ収集量の推移

(3) ひぬま流域クリーン作戦

クリーンアップひぬまネットワークは「恵み豊かで美しい湖沼の創造を目指して」を理念に、涸沼の自然を保全し、将来に残していくために、平成 13 年（2001 年）に涸沼流域（水戸市、笠間市、鉾田市、大洗町、城里町）の住民・事業者・団体・行政が一体となって設立した。

令和 7 年度（2025 年度）のクリーン作戦では、約 250 人が参加している。



写真 10-2 ひぬま流域クリーン作戦の様子

(4) 河川協力団体（茨城生物の会）

「茨城生物の会」は、郷土茨城の生物を調査研究し、さらに生物研究者や同行者などの交流及び情報交換により、郷土の自然をより明らかにして、自然環境の保全に役立てることを目的に設立された団体で、自然観察会などを通して楽しみながら茨城の自然への関心や理解を深め、自然環境保全の心を育み広げることを理念に掲げている。

活動場所は、那珂川、涸沼川、桜川、藤井川、久慈川、山田川、里川とし、主な活動内容や活動目標は以下の通りである。

(活動内容)

- ① 河川工事又は河川の維持
 - ・クリーン作戦への参加（桜川、逆川）
- ②調査研究
 - ・動物調査（久慈川・那珂川水系）
- ③知識の普及及び啓発
 - ・自然観察会（久慈川・那珂川水系）

(活動目標)

- ・クリーン作戦への参加や環境学習への支援を行うことにより、地域の方々に河川等の自然環境への理解を深めてもらう。
- ・河川に生息する希少生物、外来生物の実態を明らかにする。



写真 10-3 茨城生物の会の活動状況（左：桜川・逆川クリーン作戦 右：自然観察会（涸沼～冬の野鳥～））

その他、那珂川水系の一斉クリーン作戦や、ひぬま流域クリーン作戦を毎年、実施している。令和6年度（2024年度）の那珂川流域一斉クリーン作戦では、約7,200人が参加し、令和7年度（2025年度）ひぬま流域クリーン作戦では、約250人が参加している。

◆久慈川・那珂川水系一斉クリーン作戦

久慈川・那珂川水系一斉クリーン作戦は、沿川住民、河川利用者及び各種ボランティア団体等が清掃作業をとおして、河川の環境美化、愛護意識並びに水質保全に対する一層の意識の向上をめざし、一人一人の河川を大切にする心の啓発を図るものとして実施されている。

令和6年（2024年）7月7日に実施されたクリーン作戦では、那珂川水系全体で約7,200人が参加している。

